

令和6年度生活困窮者就労準備支援事業費等補助金（社会福祉推進事業）

**就労準備支援事業・認定就労訓練事業等就労支援に
関する手引き改訂に関する調査研究事業**

報 告 書

令和7年3月

一般社団法人北海道総合研究調査会

- 目次 -

第Ⅰ章 調査研究の概要	1
1. 調査研究の目的	1
2. 本調査研究の全体像.....	2
3. 実施概要	3
4. 成果の公表方法	5
第Ⅱ章 生活困窮者自立支援制度における就労支援	6
1. 生活困窮者自立支援制度における就労支援の概要	6
2. 生活困窮者に対する就労支援の実施状況	11
第Ⅲ章 ヒアリング調査結果	15
1. 調査概要	15
2. ヒアリング結果概要	17
3. 調査結果（自治体別）	40
第Ⅳ章 「手引き」改訂に向けて.....	77
1. 「手引き」改訂の基本的な方向性【総論編】	78
2. 生活困窮者自立支援制度が目指す就労支援の実践に向けて【実践編】	84
第Ⅴ章 おわりに	103

【資料編】

○就労支援の実践から学ぶ個別事例集

第 I 章 調査研究の概要

1. 調査研究の目的

(1) 背景

生活困窮者自立支援制度における就労支援では、自立相談支援事業における就労支援員の配置や、就労準備支援事業、認定就労訓練事業（いわゆる「中間的就労」）の創設等により、ハローワークによる仲介をはじめ「求人につなぐ」だけでは「働くこと」「働き続けること」が困難な層への新たな支援プロセスを整備してきた。

各地で創意工夫による就労支援が展開される一方、就労支援（就労準備支援事業）の利用実績に地域差が大きいことや、認定就労訓練事業所の認定件数は年々増加しているものの、受入実績のない事業所が約半数あり、利用が進んでいない状況がうかがえる。

また、2024（令和6）年4月の法改正により、生活保護受給者（特定被保護者）が生活困窮者向けの就労準備支援事業等を利用できる一体実施の仕組みが創設されることから、制度をまたぐ就労支援の効果的な実施手法も求められている。

こうしたことから、生活困窮者等に対する就労支援を支える各事業の連続性が確保され、対象者の状況に応じた柔軟かつ多様な働き方の実現に向けた就労支援の実践が全国的に広がることが期待される。また、働く体験を通して本人が自身のストレングスや適性を発見し、企業（雇用）側も多様な人材を受け入れられるよう、既存の制度を活用しながら新たな働き方の開発を通じた地域づくりへの展開・充実を図ることが重要である。

(2) 目的

生活困窮者自立支援法改正により、生活保護受給者（特定被保護者）が生活困窮者向けの就労準備支援事業等を利用することが可能となることから、既に生活保護受給者向け事業との一体的な支援を行っている自治体を含め、就労準備支援事業の実施形態（場所、時間、支援体制等）や具体的な支援プログラム、プログラムの構築プロセス、提供方法、工夫点等を調査する。

また、認定就労訓練事業については、生活保護受給者を含め、本人の状況に応じた柔軟な働き方を実現する場として利用促進を図ることが必要である。就労訓練を必要とする人と認定就労訓練事業所とのマッチングから、「非雇用型」や「雇用型」による実践的な就労訓練を通して、対象者と受入れ企業の双方に対するフォローアップまでを行うことができる仕組みや体制、具体的な支援手法等に関する実態を把握する。

これらの実態調査を行うことにより、生活困窮者自立支援制度における就労支援を一体的に活用した効果的な支援手法、及び制度・事業をまたぐ複数のフェーズが存在する

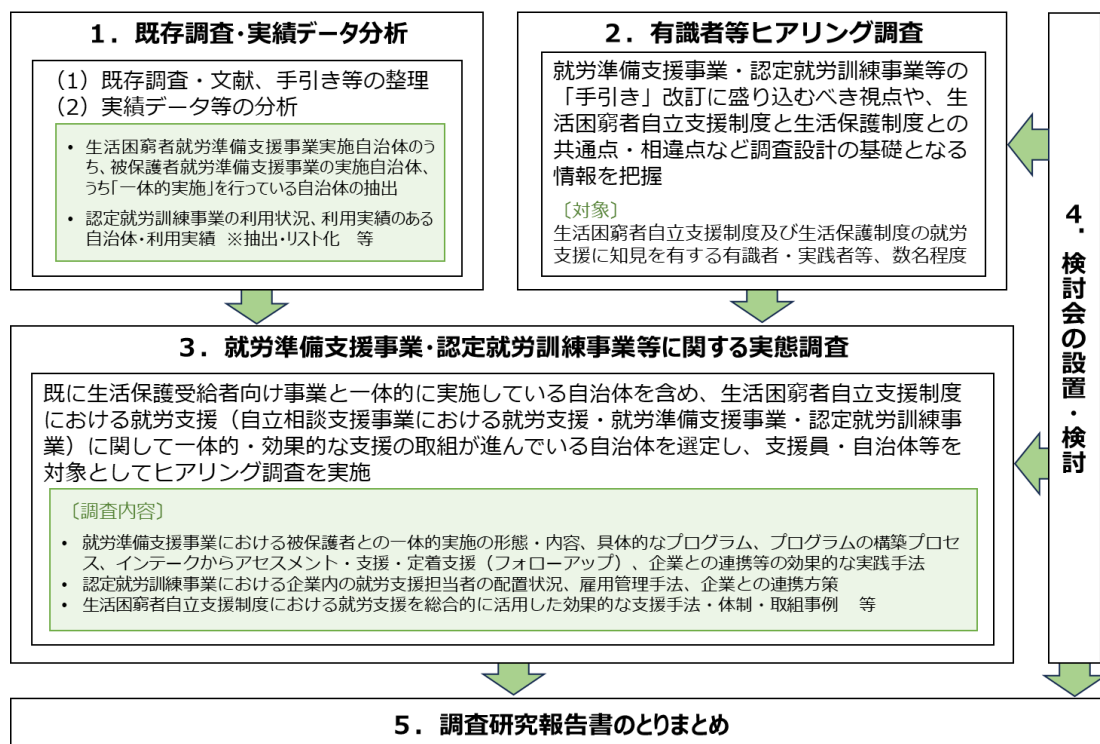
中で、連続性のある支援を行うための体制等の事例を収集し、就労準備支援事業・認定就労訓練事業等就労支援に関する「手引き」の改訂に反映できるようとりまとめる。

2. 本調査研究の全体像

(1) 全体構成

本調査研究の全体構成は以下のとおりである。

図表 I-2-1 本調査研究の全体構成



(2) 実施経過

本調査研究の実施経過は以下のとおりである。

図表 I-2-2 実施スケジュール

	令和6年 7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和7年 1月	2月	3月
1. 既存調査・実績データ分析	既存調査・実績データ分析								
2. 有識者等ヒアリング調査	事前ヒアリング先の選定・調整								
		実施							
3. 就労準備支援事業・認定就労訓練事業等に関する実態調査	調査対象の選定、ヒアリングシート設計								
			ヒアリング調査実施						
						随時ヒアリング結果とりまとめ			
4. 検討会の開催			●			●		●	●
5. 報告書とりまとめ						各種調査結果の整理・報告書作成			

3. 実施概要

本調査研究では、以下の調査等を実施した。

(1) 既存データ・実績データ分析

既存の調査研究報告書や手引き・ガイドライン等を精査し、生活困窮者自立支援制度における就労支援や生活保護受給者向け事業との一体的実施の取組状況、課題等を把握した。

また、「企業支援を中心としたマッチング支援担当者設置のモデル事業」（2020（令和2）年～2023（令和5）年）実施自治体における事業所開拓・マッチング等の実績や実施体制、取組手法、効果と課題等の概況を把握した。

さらに、厚労省による各種調査データの分析を行い、就労準備支援事業・認定就労訓練事業の利用状況等の基礎データを収集・整理し、ヒアリング調査の対象を選定する際の参考とした。

(2) 有識者等ヒアリング調査

就労準備支援事業・認定就労訓練事業に係る実態調査において把握すべき事項や、「手引き」改訂に盛り込むべき視点等を確認するため、有識者等ヒアリング調査を実施した。

ヒアリング先としては、生活困窮者自立支援制度及び生活保護制度の就労支援に知見を有する有識者・実践者等とし、訪問またはオンライン（zoom等）により実施した。

調査対象は以下のとおりであった。

図表 I-2-3 有識者等ヒアリング先

氏名	所属・役職
熊部 良子氏	認定 NPO 法人 ユースポート横濱 理事長
高橋 尚子氏	一般社団法人京都自立就労サポートセンター 理事兼主任相談員
西岡 正次氏	A´ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター） 副館長・就労支援室長

(3) 就労準備支援事業・認定就労訓練事業等ヒアリング調査

既に生活保護受給者向け事業と一体的に実施している自治体を含め、自立相談支援事業による就労支援・就労準備支援事業・認定就労訓練事業に関して一体的・効果的な支援の取組が進んでいる自治体を抽出し、具体的なプログラムの内容や構築プロセス、支援の提供状況、各事業の支援員の配置・役割分担等の工夫点など「手引き」改訂の参考となる情報を収集することを目的としてヒアリング調査を実施した。

(4) 「検討会」の設置

調査研究全体の設計や論点の整理、調査対象の選定・調査項目等に関して助言を行うとともに、「手引き」改訂に盛り込むべき事項を検討するため「検討会」を設置・開催した。

検討会については、会場参加のほか zoom により関係者の参集によらないオンライン形式による開催、会場開催とオンラインでのハイブリッド開催等とした。

検討会の委員は有識者及び生活困窮者自立支援制度・生活保護制度の就労支援に関して専門的な知見を有する者、現場支援者等により構成した。

検討会の概要、各回の検討内容等は次のとおりであった。

①検討委員一覧

図表 I-2-4 「検討会」委員（五十音順、敬称略）

氏名	所属・役職
朝日 雅也	埼玉県立大学 名誉教授 ※座長
菊地 英人	旭川児童相談所 地域支援課 児童福祉司
熊部 良子	認定 NPO 法人 ユースポート横濱 理事長
佐藤 圭司	一般社団法人パーソナルサポートセンター/仙台市生活自立・仕事相談センター「わんすてっぷ」アウトリーチ支援センター 所長
藤村 貴俊	京丹後市健康長寿福祉部 生活福祉課 課長補佐

②開催概要

図表 I-2-5 開催概要

開催日程		主な議事
第1回	2024(令和6)年 9月20日 ※ハイブリッド開催	<ul style="list-style-type: none"> ・調査研究の全体像・進め方について ・ヒアリング調査等の実施について ・認定就労訓練事業所調査の実施・内容等の検討
第2回	2024(令和6)年 12月17日 ※ハイブリッド開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒアリング調査等の実施概要について ・「手引き」の改訂に向けた視点について ・今後の調査の方向性について
第3回	2025(令和7)年 2月6日 ※オンライン開催	<ul style="list-style-type: none"> ・追加ヒアリング調査の実施概要について ・「手引き」の改訂に向けた視点について ・個別事例の取りまとめについて ・報告書の構成について
第4回	2025(令和7)年 3月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・調査結果のとりまとめ（報告書案）について

4. 成果の公表方法

本報告書は、事業実施者である一般社団法人北海道総合研究調査会（HIT）のWEBサイトに公開する。

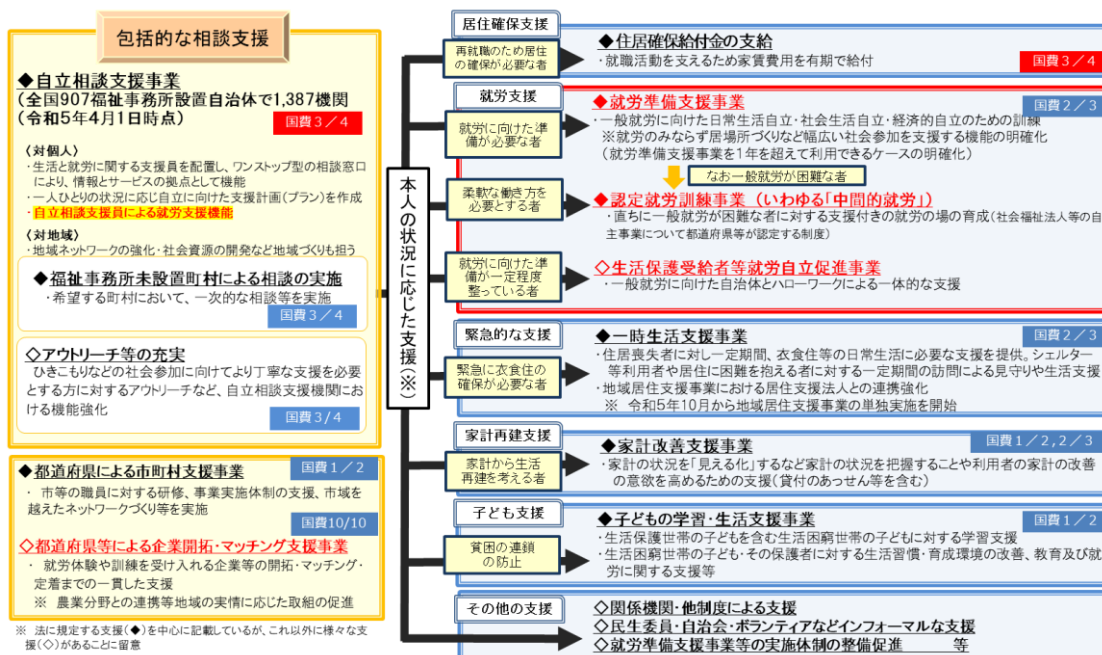
第Ⅱ章 生活困窮者自立支援制度における就労支援

1. 生活困窮者自立支援制度における就労支援の概要

(1) 生活困窮者自立支援制度における就労支援の全体像

生活困窮者自立支援制度における就労支援には、自立相談支援事業による就労支援、就労準備支援事業、認定就労訓練事業があり、制度に関する「手引き」「ガイドライン」等において、各就労支援の役割が示されている。また、他の公的な就労支援策として、ハローワークによる一般職業紹介のほか、生活保護受給者等就労自立促進事業における支援等がある（図表Ⅱ-1-1）。

図表Ⅱ-1-1 生活困窮者自立支援制度の概要



(資料：令和5年度生活困窮者自立支援制度人材養成研修<就労支援・就労準備支援事業従事者養成研修>「生活困窮者自立支援制度における就労支援について」、厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室 研修資料)

生活困窮者の状態に応じた就労支援の枠組みは、図表Ⅱ-1-2（次頁）のように示されている。

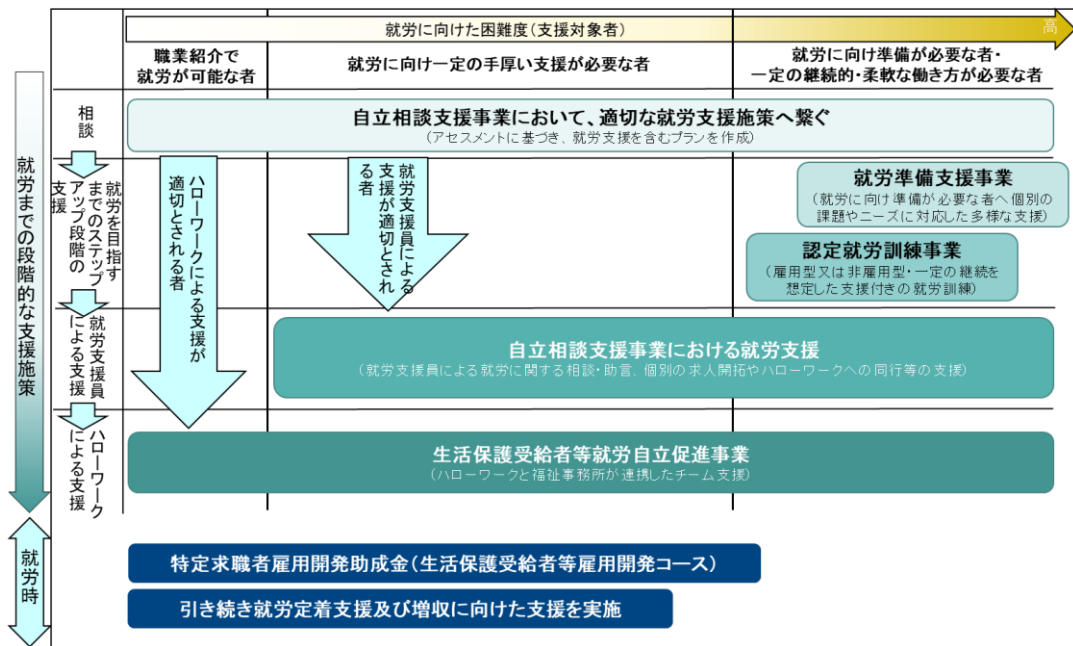
「就労準備支援事業の手引き」によると、まず、就労に向けた準備が整っており自ら求職活動を行うことができると考えられる者は、ハローワークの一般窓口での職業紹介や公共職業訓練・求職者支援訓練等を利用することとなる。

次に、就労に向けた準備は一定程度整っているものの、個別に求職活動の支援を行うことが必要と判断される者については、ハローワーク（生活保護受給者等就労自立促進事業）や自立相談支援事業の就労支援員が担当者制で支援を行う。

一方で、単に就労に必要な実践的な知識・技能等が不足しているだけでなく、複合的な課題があり、生活リズムが崩れている、社会との関わりに不安を抱えている、就労意欲が低下している等の理由で就労に向けた準備が整っていない者については、就労準備支援事業において、就労に向けた準備としての基礎能力の形成からの支援を、計画的かつ一貫して実施することとなる。就労準備支援事業は、1年間を基本として支援プログラムを作成することとしているため、例えば、就労意欲が著しく希薄である等の理由により、1年を超える支援が必要となると見込まれる者については、就労準備支援事業を利用する前に、自立相談支援事業の就労支援員が意欲喚起などの支援を行うことも想定されている。

また、就労準備支援事業の利用終了後も結果的に一般就労につながらなかったケースについては、自立相談支援事業の就労支援員が引き続き支援を行うことや、就労訓練事業の利用をあっせんすることとなる。

図表Ⅱ-1-2 生活困窮者に対する就労支援



(資料：令和5年度生活困窮者自立支援制度人材養成研修<就労支援・就労準備支援事業従事者養成研修>「生活困窮者自立支援制度における就労支援について」、厚生労働省社会・援護局地域福祉課生活困窮者自立支援室 研修資料)

(2) 生活困窮者自立支援法改正と就労支援

生活困窮者自立支援法（平成 25 年法律第 105 号）は、2015（平成 27）年施行後、5 年ごとの見直しが行われており、前回は 2018（平成 30）年 10 月 1 日から改正法の一部が施行、さらに 2025（令和 7）年 4 月 1 日、生活困窮者自立支援法等の一部を改正する法律（令和 6 年法律第 21 号）が施行となる。

就労支援に係る各事業の主な法改正事項は次のとおりである。

①就労準備支援事業

前回 2018（平成 30）年法改正では、就労に向けた準備を支援する「就労準備支援事業」、家計管理を支援する「家計改善支援事業」は、生活困窮者の自立の促進に成果をあげてきたことを踏まえ、自立相談支援事業・就労準備支援事業・家計改善支援事業の一体的実施の促進のため、以下が定められた。

- 就労準備支援事業及び家計改善支援事業の実施の努力義務化
- 両事業の適切な実施を図るため、国による必要な指針の作成
- 自立相談支援事業と併せて、両事業が効果的・効率的に行われている場合には、家計改善支援事業の補助率の引き上げ（1/2→2/3）

また、改正法の施行に伴う厚生労働省関係省令の整備等に関する省令（2018（平成 30）年 9 月 28 日公布、同年 10 月 1 日施行）により生活困窮者自立支援法施行規則が一部改正され、就労準備支援事業については、対象者の年齢要件の撤廃、資産収入要件によって対象者の範囲が必要以上に限定されないための規定の明確化等が行われた。

図表 II-1-3 就労準備支援事業の改正内容/2018（平成 30）年改正

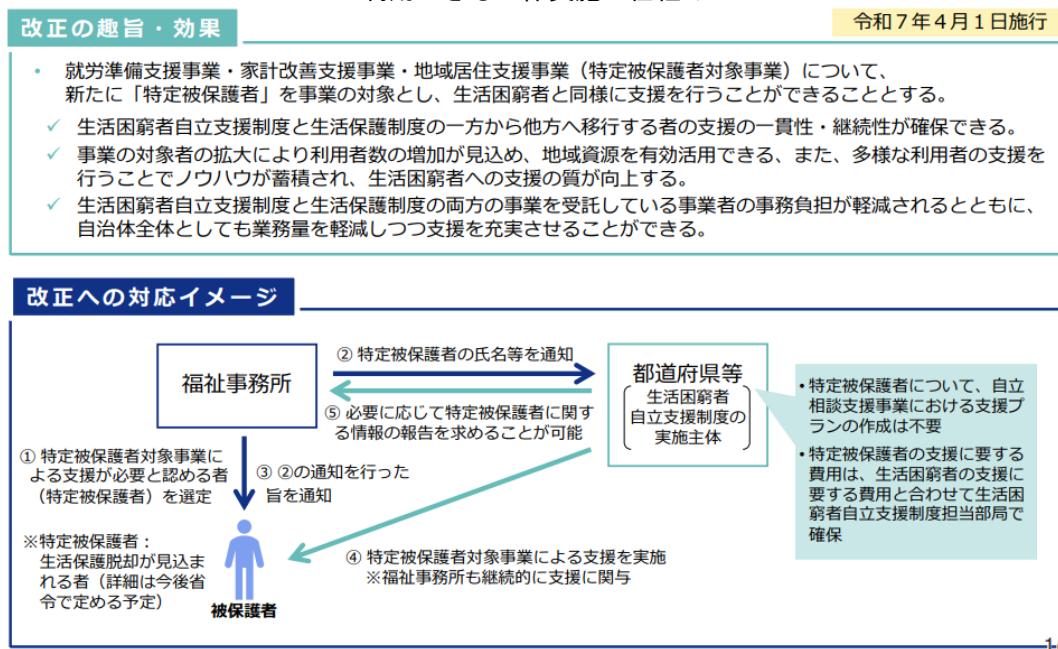
改正内容	改正の理由
年齢要件の撤廃 ・ 65 歳以上の者であっても支援の必用があると認められる場合には、就労準備支援事業の利用を可能とする。	・ 高齢者の就労を求めるニーズが高いこと ・ 生涯現役社会の実現の観点から、65 歳以降に雇用された者であっても雇用保険の適用対象とされたこと
資産収入要件の明確化 ・ 生活困窮世帯に準ずる者を以下のいずれかに該当する者とした。 ー 資産収入要件のうち、把握することが困難なものがあること ー 生活困窮世帯の要件に該当しない者であるが、今後該当する者となるおそれがあること ー 自治体の長が事業による支援が必要と認める者であること	・ 世帯単位でみると収入があるものの本人に収入がなく何かのきっかけで困窮に陥る事例や、家族の意思が確認できないことなどにより世帯全体の資産収入を把握できない事例が想定されること ・ 就労準備支援事業による必要に応じた予防や早期的な対応を図るため、対象者の範囲を必要以上に限定しないようにすること
定員要件の撤廃 ・ 「一事業につき、定員 15 人以上」の要件を撤廃した。	・ 支援ニーズの多少、地域資源の偏在など、地域の実情に応じて柔軟に事業を実施することが可能となるようにすること

（資料：平成 30 年度 生活困窮者就労準備支援事業費等補助金 社会福祉推進事業「就労準備支援事業の対象者別の効果と支援方法等の把握と共有に関する調査研究事業」報告書、厚生労働省資料より）

前回の法改正後、コロナ禍で顕在化した多様な相談者層への対応強化の観点から、2024（令和6）年法改正において、「就労準備支援事業・家計改善支援事業の全国的な実施の推進と質の向上」が努力義務化され、以下が定められた。

- 家計改善支援事業の国庫補助率を原則2分の1から一律3分の2に引き上げる
 - 必ず3事業（自立、就労、家計）を一体的に行う体制を確保し、効果的かつ効率的に行うものとする
 - 国は、就労準備支援事業・家計改善支援事業・居住支援事業の全国実施のための体制整備や支援の質の向上を図るための指針（告示）を策定する
- また、生活保護受給者（特定被保護者）が生活困窮者向けの就労準備支援事業等を利用できる一体実施の仕組みが創設された（図表Ⅱ-1-4）。

図表Ⅱ-1-4 生活保護受給者（特定被保護者）が生活困窮者向けの就労準備支援事業等を利用できる一体実施の仕組み



（資料：厚生労働省資料「令和6年 生活困窮者自立支援法等改正への対応ガイド」（令和6年6月26日））

②認定就労訓練事業

認定就労訓練事業は、本人の状況に応じた多様な働き方を実現する場として重要であり、生活困窮者の支援の「出口」として期待が寄せられている。一方、その認定数が伸び悩んでいること、また、事業所が生活困窮者の生活圏内にあることも継続的な訓練を行う際には重要であるとの観点から、全国的な認定数の増加に向けて、前回2018（平成30）年改正により以下の対応・見直しが行われた。

- 受注機会の増大を図るための努力義務規定の創設
- 認定に関する手続きの簡素化

認定に関する手続きの簡素化は、同一法人が複数の事業所において認定訓練事業を実施する場合において、同一都道府県内にある事業所であれば複数の事業所をまとめて申請することが可能となったほか、認定の申請にあたって、それまでの都道府県、指定都市、中核市に加え、事業所の経営地のある一般市等を経由して申請することが可能となった。また、申請書に添付する書類が簡素化された（図表Ⅱ-1-5）。

図表Ⅱ-1-5 認定に関する手続きの簡素化について

【手続きに係る見直し事項】

- 同一法人が複数の事業所において認定訓練事業を実施する場合において、同一都道府県内（※）にある事業所については、複数の事業所をまとめて申請することを可能とする。
 - ※ 政令市、中核市については、各々認定権限を有しているため、同一都道府県内にあっても事業所の所在地が異なる場合は、事業所毎に各々の自治体に申請することとなる。
- 市等を経由して申請することを可能とする。
 - ※認定権限を有するのは従来どおり都道府県、政令市、中核市のみ。

【申請書に添付する書類(厚生労働省社会・援護局長が定める書類)の簡素化】

- 全ての法人について、下記書類の添付は要さないこととする。
 - ・就労訓練事業の実施状況に関する情報の公開のための措置に係る書類
 - ※誓約書において、情報の公開について必要な措置を講じる旨記載（従来と同様の扱い）
 - ・非雇用型の利用者が被った災害について加入する保険商品に関する資料
 - ※誓約書において、利用に係る災害が発生した場合の補償のために、必要な措置を講じる旨記載。（従来と同様の扱い）
- 社会福祉法人、消費生活協同組合など、他の法律に基づく監督を受ける法人については、下記書類については添付を要さないこととする。
 - ・就労訓練事業を行う者の登記事項証明書
 - ・平面図や写真などの事業が行われる施設に関する書類、事業所概要や組織図などの事業の運営体制に関する書類、貸借対照表や収支計算書など法人の財政的基盤に関する書類
 - ・就労訓練事業を行う者の役員名簿

2. 生活困窮者に対する就労支援の実施状況

(1) 生活困窮者自立支援制度における支援状況

施行後9年間で支援状況は下表のとおり。2020（令和2）年度は、新型コロナの影響により新規相談受付件数やプラン作成件数等が急増し、就労支援の対象者も増加した。

就労支援対象者数は、2021（令和3）年度に79,365人と過去最多となった後、2022（令和4）年度は57,720人、2023（令和5）年度は45,141人と減少してきたが、就労・増収率は50.5%と前年度を上回っている。

図表Ⅱ-2-1 生活困窮者自立支援制度における支援状況

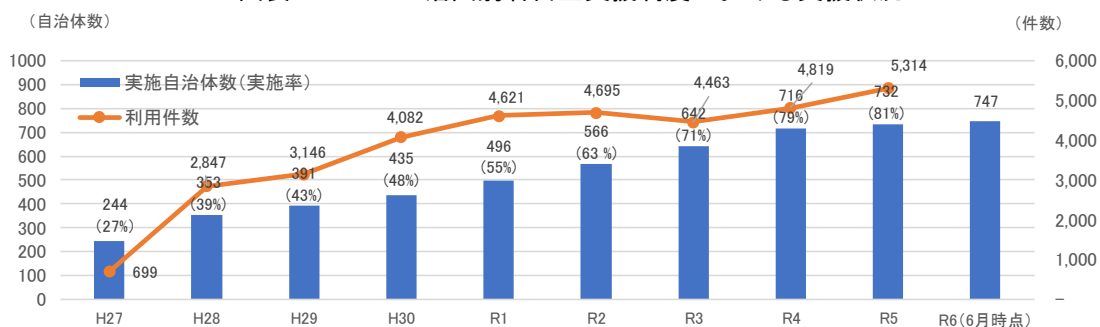
年度	新規相談受付件数		プラン作成件数		就労支援対象者数		就労者数		増収者数		就労・増収率 =(②+③)/①
		人口 10万人 あたり		人口 10万人 あたり	(①)	人口 10万人 あたり		うち 就労支援対象 プラン作成者 分 (②)		うち 就労支援対象 プラン作成者 分 (③)	
H27(2015)	226,411	14.7	55,570	3.6	28,207	1.8	21,465	—	6,946	—	—
H28(2016)	222,426	14.5	66,892	4.3	31,970	2.1	25,588	17,836	7,199	4,878	71.0%
H29(2017)	229,685	14.9	71,293	4.6	31,912	2.1	25,332	17,958	6,390	4,414	70.1%
H30(2018)	237,665	15.5	77,265	5.0	33,969	2.2	25,001	16,333	9,031	5,079	63.0%
R1(2019)	248,398	16.2	79,429	5.2	35,431	2.3	25,212	16,717	8,650	4,890	61.0%
R2(2020)	786,163	51.4	139,060	9.1	76,100	5.0	20,659	14,502	11,902	5,924	26.8%
R3(2021)	555,779	36.6	146,719	9.7	79,365	5.2	23,100	17,633	18,052	9,887	34.7%
R4(2022)	353,095	23.4	100,457	6.6	57,720	3.8	21,286	16,619	13,783	8,376	43.3%
R5(2023)	293,455	19.5	93,282	6.2	45,141	3.0	20,202	16,194	10,597	6,617	50.5%

（資料：「支援状況調査」各年度集計結果（厚生労働省））

(2) 就労準備支援事業の実施状況

生活困窮者就労準備支援事業は、2018（平成30）年改正法により努力義務化した結果、実施自治体は増加しており、2024（令和6）年6月時点での実施率は約8割（747自治体）となっている。利用件数も施行後から増加傾向にあり、2023（令和5）年は5,314件である。

図表Ⅱ-2-2 生活困窮者自立支援制度における支援状況

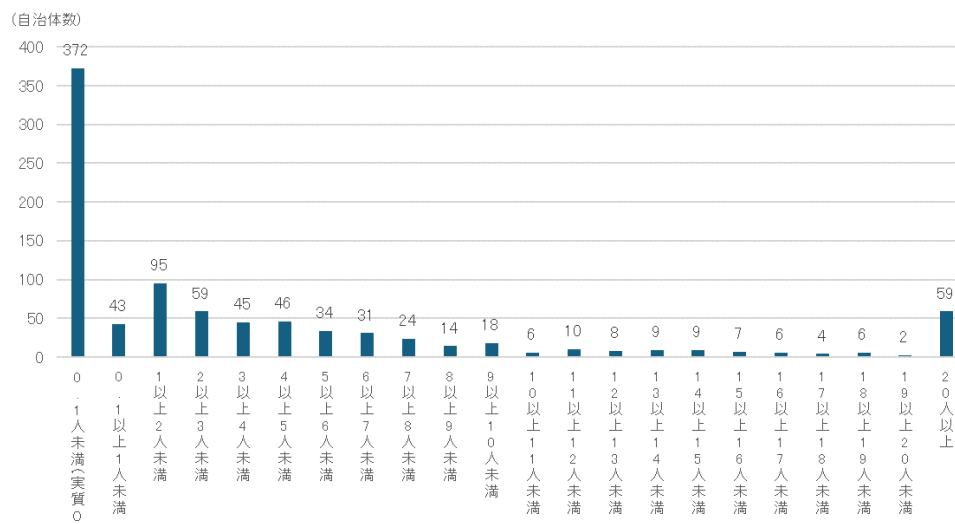


（資料：「生活困窮者自立支援法等に基づく各事業の事業実績調査」各年度（厚生労働省））

就労準備支援事業の実施率が8割を超え、全国どの地域においても必要な支援を受けられる土台が整ってきた一方、利用件数には自治体ごとのばらつきがみられる。福祉事務所単位で、就労準備支援事業の人口10万人あたりの実績の分布をみたところ「0.1件未満(実質0)」が最も多く372自治体(41.0%)となっている。※未実施自治体を含む。

一方、20件以上も59自治体存在しており、就労準備支援事業の利用状況に地域差が生じている(図表Ⅱ-2-3)。

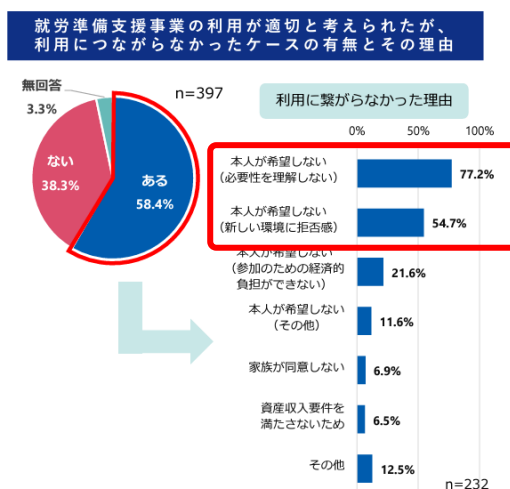
図表Ⅱ-2-3 就労準備支援事業人口10万人あたり実績自治体 (n=907 福祉事務所設置自治体)



(資料：令和4年度 就労準備支援事業等支援実績データ(厚生労働省)より作成)

また、過去調査によると、約6割の自治体で「就労準備支援事業の利用が適切と考えられたが利用につながらなかったケース」があり、理由としては、参加のための経済的負担よりも、本人の希望(必要性を理解しない、新しい環境に拒否感)によるものが多数となっている(図表Ⅱ-2-4)。

図表Ⅱ-2-4 就労準備支援事業の利用につながらなかったケース

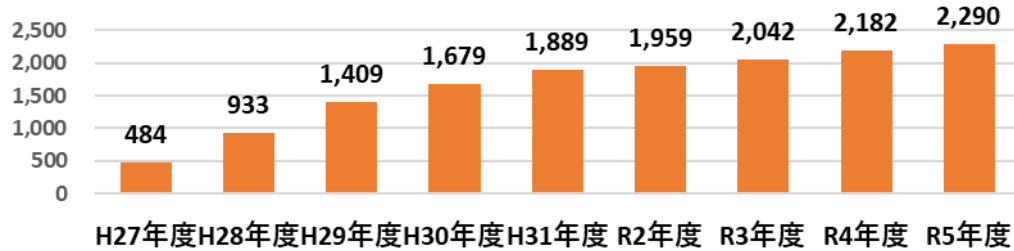


(資料：令和3年度社会福祉推進事業「新型コロナウイルス感染症等の影響を踏まえた生活困窮者支援のあり方に関する調査研究事業」((一社)北海道総合研究調査会)アンケート調査)

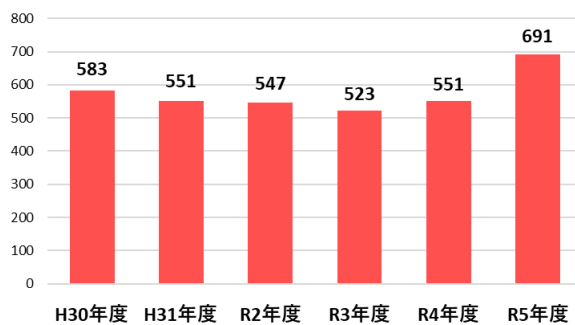
(3) 認定就労訓練事業の実施状況

制度開始以降、認定件数は増加しており、2023（令和5）年度末時点で2,290件（累計）、受入人数は691人（実数）となっている。業種別受入状況は、「清掃・警備」、「福祉サービスの補助作業」、「農林漁業関連（加工も含む）」の順に多い。

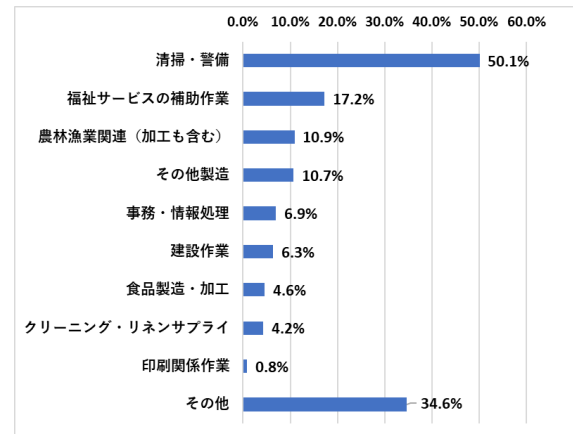
図表Ⅱ-2-5 認定件数の推移



図表Ⅱ-2-6 受入人数の推移



図表Ⅱ-2-7 業種別受入状況（R5年度）



2022（令和4）年の認定就労訓練事業所ごとの受入人数の分布をみると（図表Ⅱ-2-8）、「0件」が約半数となっており、認定を受けたものの受入の実績がない事業所も多く、利用が進んでいない状況もうかがえる。

また、利用形態ごとの利用件数は、「非雇用型」が全体の約7割となっている。

図表Ⅱ-2-8 受入人数の分布

受入人数	件数	%
0	1100	50.4%
1	118	5.4%
2	33	1.5%
3~4	24	1.1%
5~6	12	0.5%
7~9	4	0.2%
10~14	5	0.2%
15~19	3	0.1%
20~29	2	0.1%
30~39	1	0.0%
40~49	0	0.0%
50~99	0	0.0%
100~199	0	0.0%
200以上	0	0.0%
無回答	880	40.3%
計	2,182	100.0%

図表Ⅱ-2-9 利用形態ごとの利用者数

(n=534)

利用形態	件数	割合
非雇用型	385	69.9%
雇用型（非雇用型から雇用型へ移行）	34	6.2%
雇用型（開始当初から雇用型）	115	20.9%

※利用形態について回答のあったもののみ集計

（資料）「認定就労訓練事業の認定状況」（厚生労働省）
 ※図表Ⅱ-2-8は、厚生労働省提供データに基づき集計

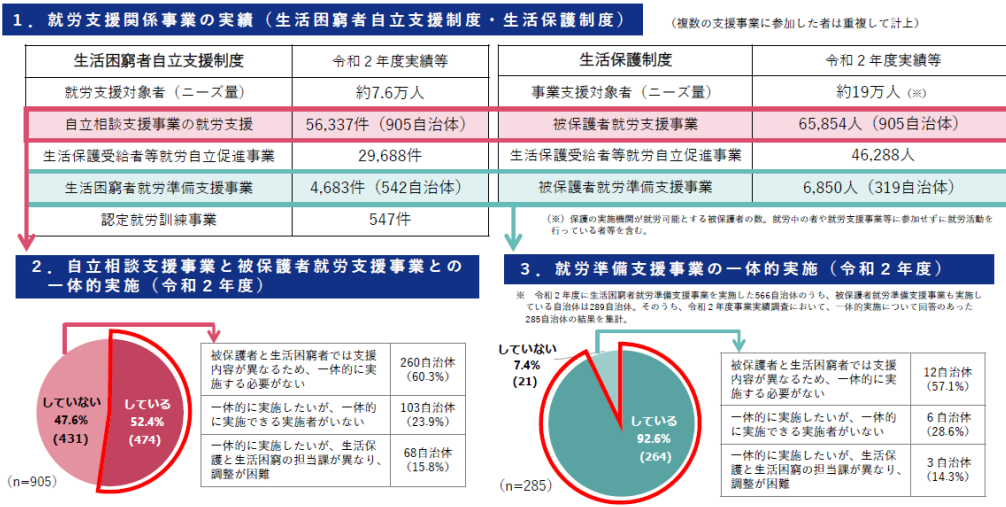
(4) 就労支援関係事業（生活困窮者・生活保護受給者）の実施状況

2022（令和4）年7月8日「社会保障審議会生活困窮者自立支援及び生活保護部会（第16回）」資料4によると、2020（令和2）年度実績では、福祉事務所設置自治体の約半数が、自立相談支援事業の就労支援と被保護者就労支援事業を一体的に実施している。

また、就労準備支援事業について、生活困窮者向け事業と生活保護受給者向け事業の両事業を実施する自治体の9割以上が、両事業を一体的に実施^{※1}している。

※1：一体的実施とは、同一法人に委託している場合や、いずれも直営で実施している場合、異なる主体が連携して実施している場合等を指す。

図表Ⅱ-2-10 就労支援関係事業（生活困窮者自立支援制度・生活保護制度）の実施状況

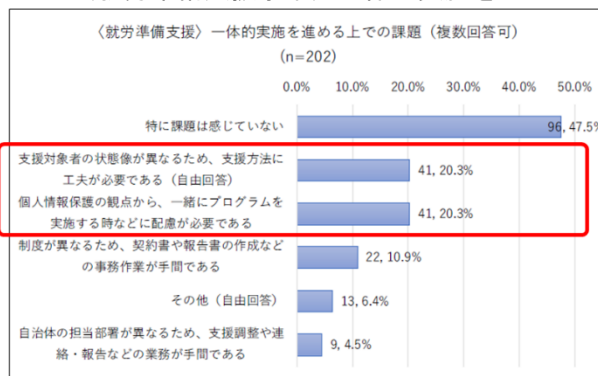


※ 出典：1は令和2年度支援状況調査・令和3年度における就労支援等の状況調査・令和元年度就労促進計画の実績評価及び令和2年度就労促進計画・平成21年度生活困窮者自立相談支援事業費等負担金及び生活困窮者就労準備支援事業費等補助金の標準負担（補助）協議より。2は令和2年度事業実績調査。3は令和2年度事業実績調査と被保護者就労準備支援事業の実施状況を突き合わせて算出。

生活困窮者自立支援法等の一部を改正する法律（2024（令和6）年4月17日成立）により、2025（令和7）年4月からは生活保護受給者（特定被保護者）も生活困窮者向けの就労準備支援事業を利用することが可能となる。過去調査^{※2}によると、一体的実施を進める上での課題（複数回答）として、「特に課題は感じていない」が47.5%の一方、「支援対象者の状態像が異なるため、支援方法に工夫が必要である」「個人情報保護の観点から、一緒にプログラムを実施する時に配慮が必要である」がともに20.3%となっている。

※2：令和3年度推進事業「生活困窮者及び被保護者に係る就労支援事業及び家計改善支援事業等の協働実施に向けた調査研究」（一般社団法人 協同総合研究所）アンケート結果より

図表Ⅱ-2-11 〈就労準備支援〉一体的実施を進める上での課題



第三章 ヒアリング調査結果

1. 調査概要

(1) 目的

既に生活保護受給者向け事業と一体的に実施している自治体を含め、自立相談支援事業による就労支援・就労準備支援事業・認定就労訓練事業に関して一体的・効果的な支援の取組が進んでいる自治体を抽出し、具体的なプログラムの内容や構築プロセス、支援の提供状況、各事業の支援員の配置・役割分担等の工夫点など「手引き」の改訂の参考となる情報を収集することを目的としてヒアリング調査を実施した。

なお、就労準備支援事業・認定就労訓練事業等に関する自治体・支援員等に対するヒアリング調査に先立ち、調査項目の検討や、「手引き」改訂に盛り込むべき視点等を確認するため、生活困窮者への就労支援の知見を有する有識者・実践者等を対象とするヒアリング調査も実施した。

(2) 調査の実施方法

①調査対象の選定

調査対象の選定にあたっては、以下の観点を考慮し、候補の検討を行った。

調査対象、実施日は図表Ⅲ-1-2（次頁）のとおりであった。

図表Ⅲ-1-1 ヒアリング調査対象の選定方法

- 生活困窮者自立支援制度における就労支援（自立相談支援事業による就労支援・就労準備支援事業・認定就労訓練事業）の支援実績を一定程度有する自治体を中心に、人口規模や地域性、実施事業者等のバランスを踏まえて選定する。
- 認定就労訓練事業所に関しては、一定程度の利用実績があり、自立相談支援機関・就労準備支援事業所・自治体等と効果的に連携しているなど、深掘りすべき取組を行っている自治体・事業所等を対象として加える。
- 上記に加え、小規模自治体特有の実態を把握する観点から、「離島」「僻地」「一人支援員」等のキーワードに対応する自治体1か所程度を抽出する。

図表Ⅲ-1-2 ヒアリング調査先一覧

都道府県	実施主体	種別	R6.1.1 圏域人口	実施(運営)方法				被保護者就労準備支援事業		ヒアリング調査実施状況	
				自立相談支援事業	事業実施者(委託先等)	就労準備支援事業	事業実施者(委託先等)	被保護者就労準備支援事業の実施	被保護者就労準備支援事業との一体的な実施	実施日	実施方法
北海道	小樽市	その他	106,507	直営+委託	社会福祉協議会	委託	株式会社	●	●	2024(令和6)年11月22日	訪問/オンライン
東京都	豊島区	その他	291,650	委託	社会福祉協議会/NPO法人	委託	NPO法人	●		2024(令和6)年11月24日	訪問
岡山県	倉敷市	中核都市	475,914	委託	NPO法人	委託	NPO法人	●	●	2024(令和6)年12月4日	訪問/オンライン
静岡県	熱海市	その他	33,934	委託	社会福祉協議会	委託	NPO法人	●		2024(令和6)年12月5日	訪問
島根県	松江市	中核都市	196,021	委託	社会福祉協議会	委託	社会福祉協議会	●	●	2024(令和6)年12月6日	訪問/オンライン
山梨県	南アルプス市	その他	71,660	直営+委託	社会福祉協議会	委託	株式会社	●	●	2024(令和6)年12月13日	オンライン
静岡県	静岡県	都道府県	219,686	委託	共同事業体(社協ほか)	委託	社会福祉法人	●	●	2024(令和6)年12月13日	オンライン
沖縄県	沖縄県	都道府県	38,247	委託	公益財団法人	委託	公益財団法人	●	●	2025(令和7)年1月22日	オンライン
大分県	臼杵市	その他	35,620	委託	社会福祉協議会	委託	社会福祉協議会			2025(令和7)年1月27日	訪問/オンライン
高知県	高知市	中核都市	316,410	委託	社会福祉協議会	委託	社会福祉協議会			2025(令和7)年1月30日	オンライン
愛知県	名古屋市長	政令指定都市	2,297,745	委託	社会福祉協議会	委託	NPO法人/他	●		2025(令和7)年1月31日	オンライン

(注)圏域人口:静岡県は福祉事務所設置自治体として所管する12町、沖縄県は北部圏域の町村の合計

②調査項目

調査項目は、以下のとおり設定した。

図表Ⅲ-1-3 ヒアリング調査項目

	自立相談支援事業	就労準備支援事業	認定就労訓練事業(※可能な場合)
各事業の調査項目	<ul style="list-style-type: none"> 基本情報の確認 生活困難者自立支援制度における就労支援(自立相談員による就労支援、就労準備支援事業、認定就労訓練事業)を総合的に活用した効果的な支援手法、工夫点について 制度・事業をまたぐ複数のフェーズが存在する中で、一貫した支援を行うために取り組んでいること・大切にしていること(就労支援におけるソーシャルワークの観点) 就労支援に関してうまくいっていないところがあれば(過去を含む)、その要因、及び、どのような方法で課題を解決できそうか(過去に解決・改善することができたか) 	<ul style="list-style-type: none"> 就労準備支援事業の対象者について(資産収入要件その他運用上の対応状況) 就労準備支援プログラムの内容(支援メニュー一覧) 支援体制(支援員の配置状況、自立相談の各支援員との役割分担等) インテークからアセスメント、支援の実施、各就労支援施策や協力事業所等とのつなぎ、フォローアップ・就労時の定着支援等の一連の支援プロセスにおける実践手法・工夫点、課題等 対象者を事業の利用につなぐために必要な姿勢・工夫点 アセスメントやプラン、評価時における自立相談や協力事業所等との情報共有の状況 就労体験や企業開拓等における各就労支援事業との連携の状況 (※被保護者と一体的に実施している自治体) 一体的実施の形態・内容(場所、時間、支援員、プログラム等) 利用実績、利用者への効果 一体的に効果的な支援を提供するための工夫点・必要要素(被保護者との共通プログラムの開発等を含む多様な支援メニューの整備、プログラムや社会資源の開拓等に関する両制度・各事業の支援員/関係機関との情報共有、効率的な人員配置等) 生活困難者自立支援と生活保護での支援における考え方・方法の共通点・相違点について(支援対象者の状態像を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> 法人・事業所の概要(法人種別、業種、主な訓練内容等) 人材の募集・採用方法(ハローワーク等の活用状況、事前の見学・体験の有無、インターンシップ等を通じた採用の有無等) 対象者の受入れ状況(受入れ定員、利用人数、雇用型・非雇用型、生活保護受給者の受入れ有無等) 認定就労訓練の実施体制(企業内の就労支援担当者の配置の状況・役割等) 対象者が希望する訓練内容(ニーズ)や対象者の特性、従事する業種・業務等のマッチングの状況 対象者への支援プロセス(業務の設定やプログラムの作成、定期的・継続的な状況把握/振り返り、自立相談支援・就労準備支援事業等関係機関との情報共有等) 雇用型・非雇用型それぞれにおける労働条件、雇用管理手法について 認定就労訓練事業に関する企業担当者としての認識 受入企業・協力事業所等との連携(就労訓練先の開拓から受入れ体制整備支援、就職支援・定着支援のフォロー等) 自立相談の就労支援員、就労準備支援事業担当者との連携状況等 認定就労訓練事業に取り組もうと思った理由・経緯、実際に受入れをしてどのような影響があったか、どのようなところが大変だったか/良かったか 認定就労訓練事業所として、自治体や自立相談支援機関等に求めることなど
事例(ケーススタディ調査)	◎各就労支援事業(就労準備・就労訓練)との連携事例、総合的に活用したケース等	◎就労準備支援事業の利用ケース	◎認定就労訓練事業の利用ケース
	各事業・支援員がどのように考え(アセスメントし)、関わったか、その際の具体的な支援内容や各事業のつなぎ・連携のポイント等		

③実施方法

実施方法については、オンライン（zoom）によるヒアリング、または現地訪問による対面ヒアリングとした。

④実施期間

2024（令和6）年11月～2025（令和7）年1月

2. ヒアリング結果概要

前述の11自治体へのヒアリング結果の分析から、「手引き」改訂の論点として想定される共通事項を抽出し、次の（1）～（7）の項目に分けて主な意見等を整理した。

- （1）地域の実情に応じた就労支援の実践
- （2）就労支援に関する各事業の連続性
- （3）就労支援の基本的な考え方
- （4）多様な就労（準備）支援プログラムの構築
- （5）企業・社会資源等の開拓と地域づくり
- （6）認定就労訓練事業の利用状況と課題
- （7）被保護者就労準備支援事業の一体的実施

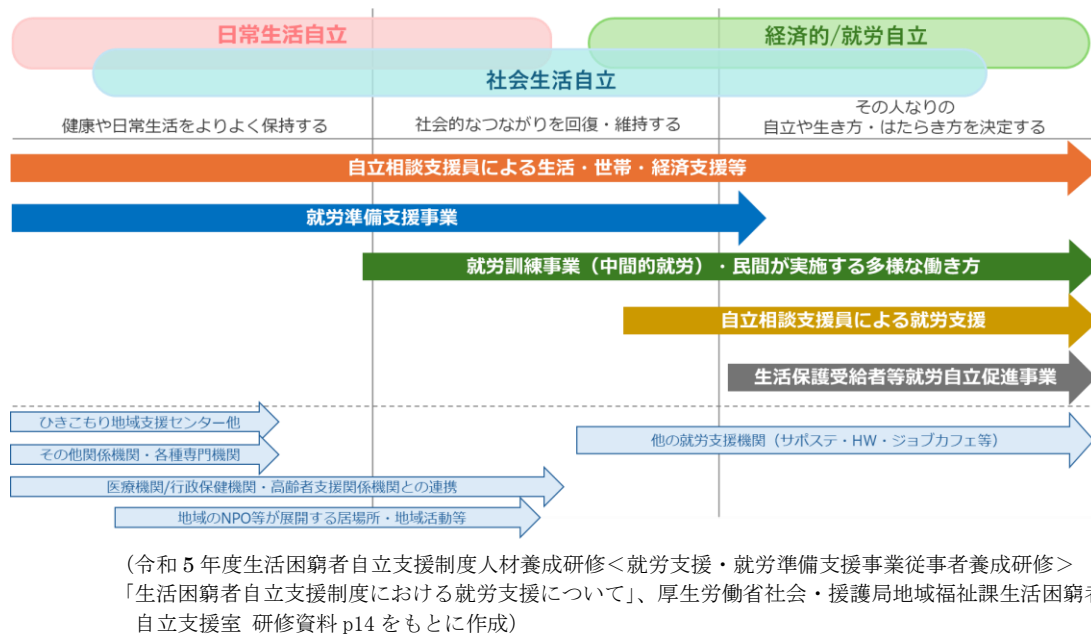
自治体ごとのヒアリング記録はp 40～76、各自治体から提供を受けた個別事例に関しては「資料編」に掲載している。

(1) 地域の実情に応じた就労支援の実践

① 生活困窮者自立支援制度における就労支援の全体像

生活困窮者自立支援制度の就労（準備）支援における自立の概念として、「日常生活自立」「社会生活自立」「経済的自立」の3つの自立がある。2023（令和5）年度生活困窮者自立支援制度人材養成研修〈就労支援・就労準備支援事業従事者養成研修〉資料によると、「3つの自立は「段階（クリアしたら次のステップに行く等）」ではなく、状態像であり、それぞれの自立が組み合わさり影響し合いながら、就労支援のプロセスをスライド（行ったり・来たり）する」ことが示されており、3つの自立と制度内・制度外の各支援事業の重なり合いは下表のようなイメージ図で表される。

図表Ⅲ-2-1 生活困窮者自立支援制度における就労支援のイメージ図



② ヒアリング自治体における実践からみた就労支援の展開

生活困窮者自立支援制度における就労支援（自立相談支援事業による就労支援、就労準備支援事業、認定就労訓練事業）の展開は、ヒアリング対象の各自治体の支援体制や社会資源の状況等によってさまざまであるが、支援の目的やプログラム内容としてみると共通項がみられた。また、各支援プログラムは、事業ごとの役割分担ではなく、支援対象者の状況に応じてグラデーション（事業・支援員間の重なり合い）のある支援が行われていることが特徴的であった。

ヒアリング自治体の実践からみた就労支援の展開（全体像）について、前述の図表Ⅲ-2-1 と照らしあわせながらみると、図表Ⅲ-2-2 のように整理することができる。

このイメージ分類に基づき各自治体の特徴について、P20～27 に解説した。

図表Ⅲ-2-2 地域の実情に応じた就労支援の取り組み方/分類イメージ

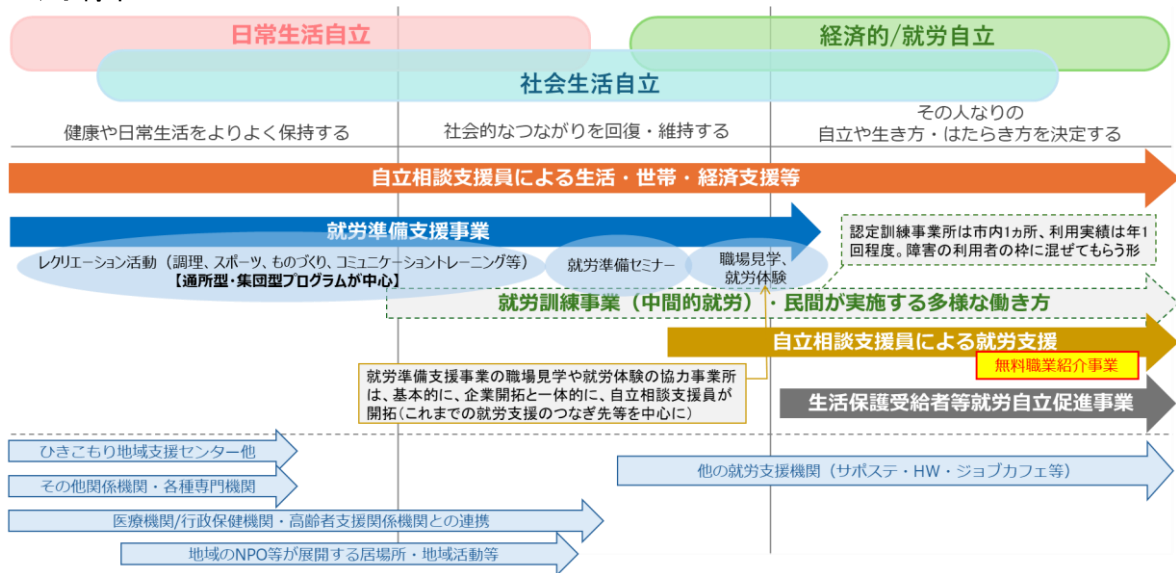
	就労支援の取り組み方・概要	自治体
A	自立相談支援事業（社会福祉協議会（以下「社協」という。）の就労支援と就労準備支援事業（人材派遣会社が受託）の展開は、生活困窮者自立支援制度の体系・各手引きに示される典型により実践されていると考えられる。また、自立相談支援事業の受託先である社協が自治体と協力しながら地域の企業・社会資源の開拓、コーディネートを担っている。	小樽市 南アルプス市
B	就労準備支援事業の受託団体に委託し、自立相談支援事業の就労支援員を専従で配置。就労を主訴とする対象者の場合、就労支援員の個別求人開拓先等での実際の働く体験を通して、就労準備支援事業と並走しながら切れ目のない就労支援の実践が可能となっている。	豊島区
C	自立相談支援事業の就労支援は、生活保護受給者等就労自立促進事業等、ハローワークとの連携・つなぎ、企業開拓等がメインとなる。就労準備支援事業は障害やひきこもり等の支援ノウハウのある NPO 法人への委託により、アウトリーチから社会参加、就労体験等のプログラムを実践し、就労体験先でそのまま就労する人も多い。	名古屋市 倉敷市
D	小規模自治体であり、就労準備支援事業支援員は他自治体からの委託も受け、週 1 回定例で自立相談支援機関に勤務。集団型のプログラムは人口が少なく参加者が一同に会しづらいため、就労準備支援事業の内容は、面談のほか地元企業において実際に働く体験、就職活動への同行等がメインとなる。自立相談支援事業を受託する社協が認定就労訓練事業の認定を受け、長期的な訓練というよりは、まず「働いてお金をもらう」体験を通じた自信の回復や意欲の向上、社会参加の意味合いで取り組まれる。	熱海市
E	自立相談支援事業と就労準備支援事業を社協が受託し、就労準備支援事業のプログラムとしての職場見学・就労体験先と、就労（訓練）先企業等の開拓などを一体的に進めることができている。認定就労訓練事業について、松江市は企業組合しまね就労福祉事業団、高知市は社協が認定就労訓練事業の認定を受けており、就労体験・訓練を通して日常生活自立や社会生活自立、そこに至る前の自己肯定感を育むような働きかけを支援員が丁寧に行っている。	松江市 高知市 白杵市
F	【都道府県】就労準備支援事業は合宿型を採用し、各自治体において就労準備支援事業が必要と判断された対象者が 1 か所に集まりプログラムに参加する。自立相談支援員は、地元での社会参加のための活動や就労体験など就労準備支援事業を補完するようなアプローチを、個別支援を通して実践。（長泉町を含む圏域では、自立相談支援事業を複数法人からなるコンソーシアムに委託）	静岡県
G	【都道府県】自立相談支援事業と就労準備支援事業は同じ委託先。就労支援員は相談支援員と兼務であり、主な支援内容はハローワークや県独自の就労支援「One×One（ワンバイワン）」等との連携。離島も抱えるため、継続した支援（訪問等による本人への働きかけ）や就労先、就労準備支援事業の職場見学・体験先等の開拓にはかなりのマンパワー（と時間）が必要となることから、まず支援につながることから始まり地域ごとの社会資源を柔軟に活用する視点で取り組まれている。	沖縄県

【A】小樽市、南アルプス市

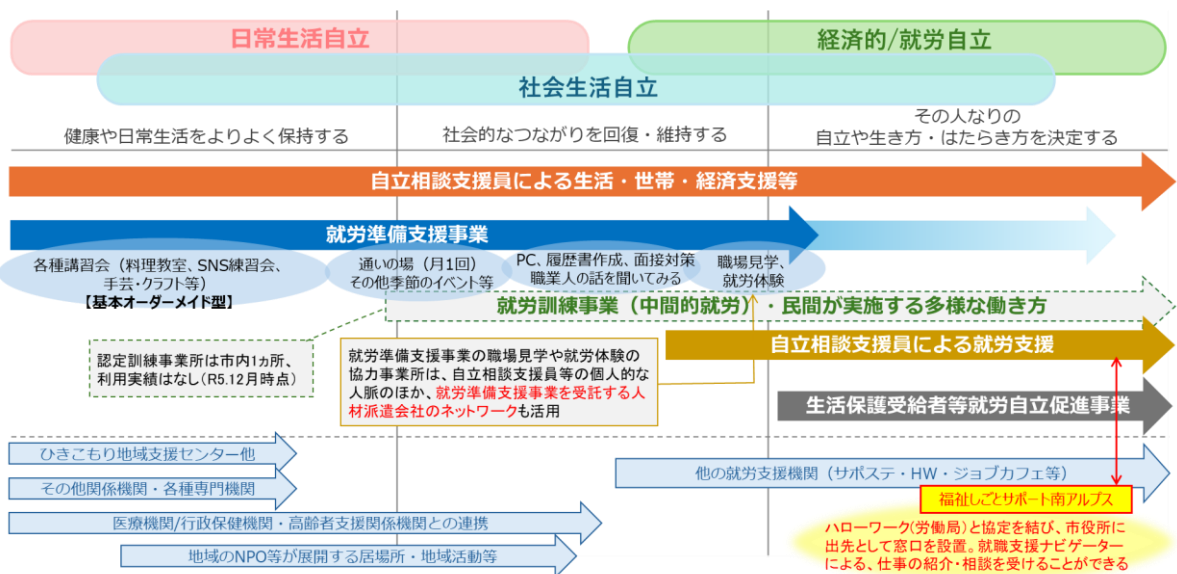
- 自立相談支援事業と就労準備支援事業の受託者が異なることもあり、自立相談支援事業において「就労に向けて準備が必要」と判断された人が就労準備支援事業を利用し、各支援員が情報共有しながら支援を進める。就労準備性をアセスメントした上で、就労支援員による職業紹介やマッチングが行われる。
- 両市とも自立相談支援事業は福祉系団体（社会福祉協議会）、就労準備支援事業は人材派遣会社となっており、社会参加を促すプログラムの企画は就労準備支援事業支援員を中心に行っている。就労体験等の協力事業所の開拓やコーディネートは、将来的な就労も見据えて自立相談員とも緊密に連携しながら行っている。

図表Ⅲ-2-3 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【A】

◆小樽市



◆南アルプス市

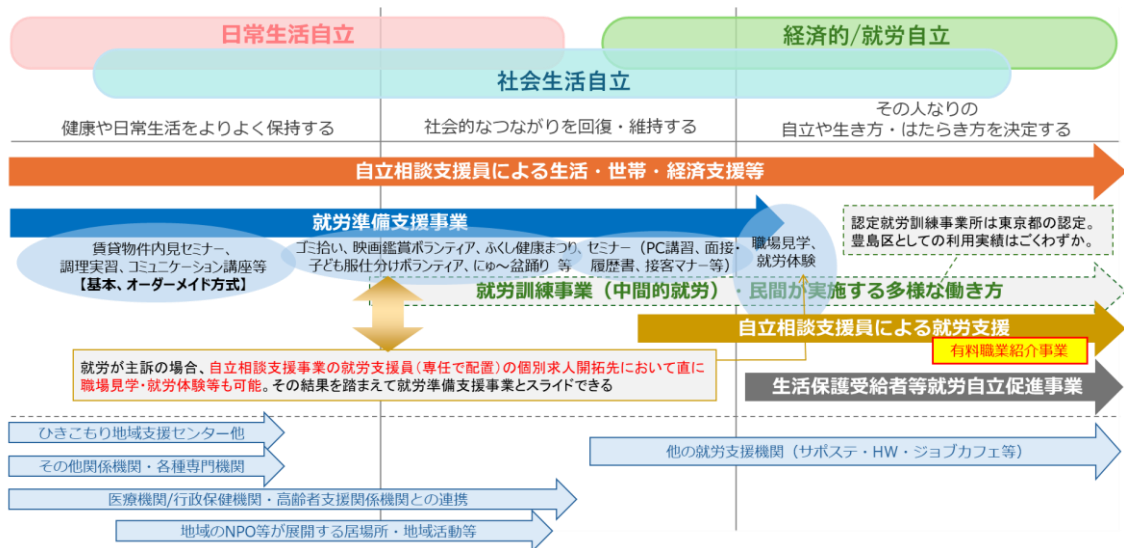


【B】豊島区

- 自立相談支援事業の就労支援員を、就労準備支援事業の受託団体に委託し専従で配置しているほか、就労準備支援事業支援員も自立相談支援機関と同じ窓口に常駐しているため事業間の連携が図りやすい体制となっている。
- 相談者の主訴が就労である場合、就労支援員が早い段階から面談に同席し、個別求人開拓先へのマッチングや職場見学・就労体験等につなぎながらアセスメントを深め、就労準備支援事業の必要性があれば、プランに追加（もしくは当初から利用を前提に並走）する。
- 本人の状況を「段階」で捉えるのではなく、オーダーメイド方式によるプログラムや働く体験を中心とした支援を通して継続的にアセスメントを行い、プランを常に微調整しながら組み立てている。

図表Ⅲ-2-4 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【B】

◆豊島区



【C】名古屋市、倉敷市

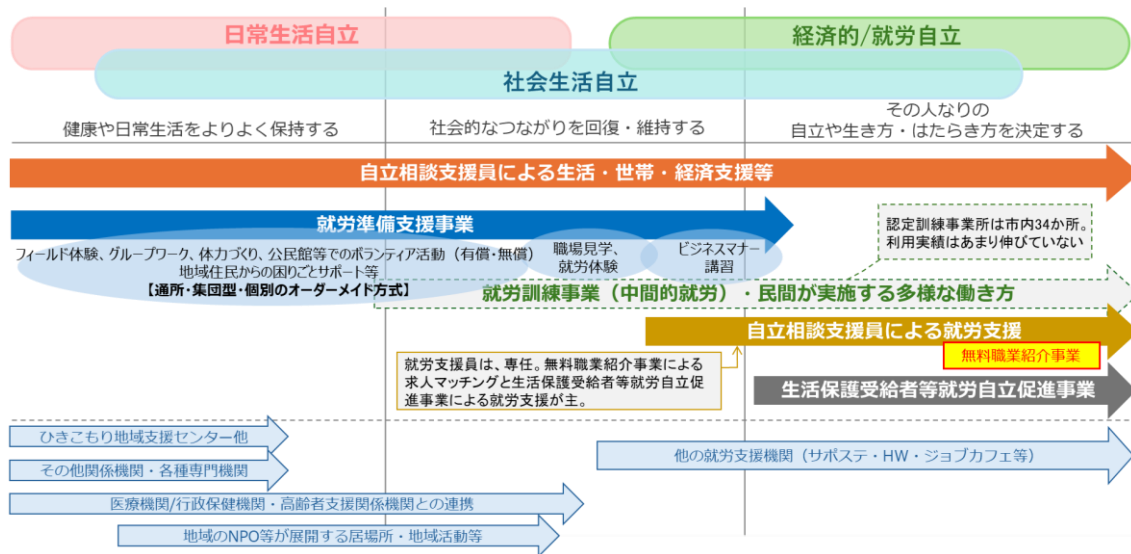
（倉敷市）

- 自立相談支援事業（社会福祉法人に委託）における就労支援としては、就職を具体的に考えていきたい人に対し、生活保護受給者等就労自立促進事業と無料職業紹介事業によりできる限り早期の就職を目指すことが中心となっている。そのため就労支援員による企業開拓は、ハローワークでマッチする求人が少ない人向けに、無料職業紹介事業により直でつながることができる雇用先・企業を増やすことがメインとされる。
- 就労準備支援事業の委託先事業所は自立相談支援事業の委託先とは異なり、1駅ほど離れて立地する。自主事業としてひきこもり支援センターを開設していることもあり、直接の相談も寄せられる。

- エリアが広いので、市役所の各支所や公民館等の面談室を借りて面談、各種プログラムを行うことや、活動場所までスタッフが車で送迎するなど本人にとってのアクセス性を考慮していることが、事業の利用しやすさにつながっている。
- 就労準備支援事業の利用者のほとんどが「職場体験」を行い、約半数が体験してから就労するため、その後の定着支援を兼ねて企業・事業所とのつながりを常に作っている。

図表Ⅲ-2-5 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【C】

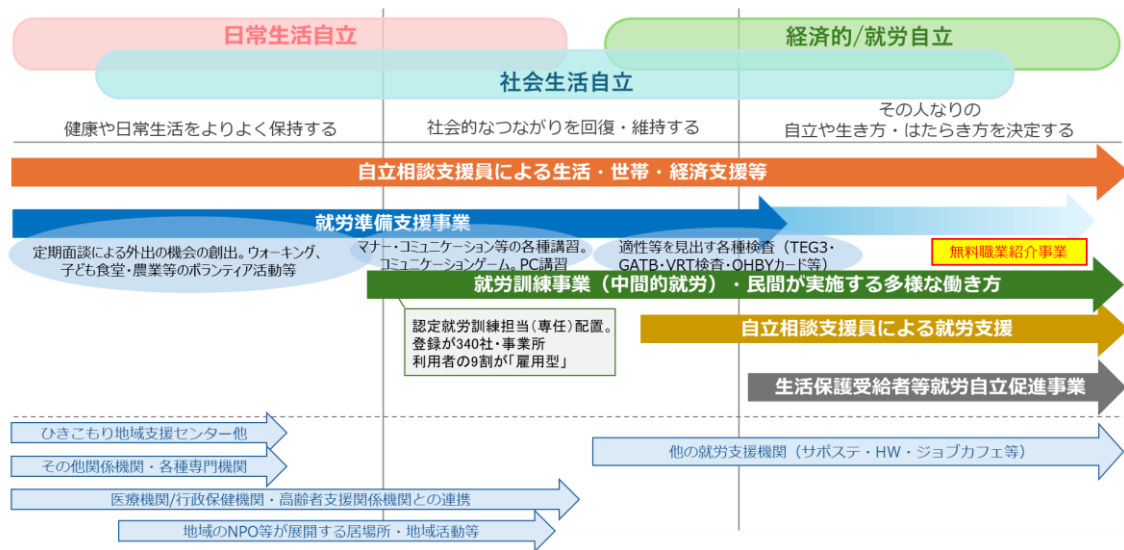
◆倉敷市



(名古屋市)

- 名古屋市も自立相談支援事業による就労支援の役割や、就労準備支援事業が幅広く一人の相談者に関わる点などにおいて倉敷市と類似している。(名古屋市の場合、就労準備支援事業支援員も自立相談支援機関と同じ窓口で常駐している。)
- 認定就労訓練事業の利用促進にも力を入れていることから、認定件数及び利用件数が一定程度あり、自立相談支援事業の中に「認定就労訓練担当」支援員を専属で配置している。また、相談支援員と就労支援員は兼務でケースに応じて役割のウェイトを変えており、明確な区別はない。認定就労訓練事業へのつながりやその後の出口の開拓を含めて認定就労訓練事業の担当支援員が特化して関わるほか、就労準備支援事業支援員も協力事業所とのつながりを活かして就労支援員のような役割を担う場合もあり、各事業の支援は重なり合っている。

◆名古屋市

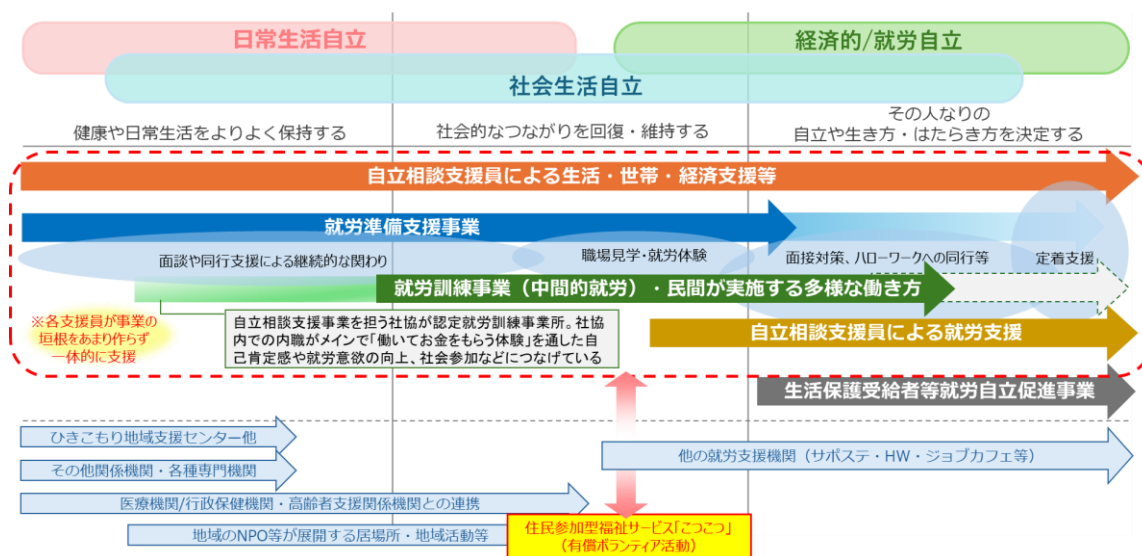


【D】熱海市

- 熱海市は、自立相談支援事業を社会福祉協議会、就労準備支援事業を NPO 法人に委託しており、社会福祉協議会が認定就労訓練事業所の認定を受けている。自立相談支援事業内での相談支援員と就労支援員の役割分担は明確ではなく、就労支援においては各相談員の職歴（得意分野）による強み・人脈等を活かして展開される。
- 就労準備支援事業支援員は、他自治体からの委託も受けて広域に動いており、熱海市の自立相談支援機関には週 1 回決まった曜日に勤務する形態となっている。小規模自治体のため、集団でのプログラムは人が集まりにくいいため、就労準備支援の内容は、地元企業において実際に働く体験がメインとなり、就労が可能な人にとっては、そのまま仕事に直結することが多い。就労が主訴であれば、2 回目以降の面談から就労準備支援事業につながり、ハローワークへの同行や具体的な面接対策等も、就労支援員に限らず就労準備支援事業支援員が一連のプロセスの中で必要に応じて実施する。
- 認定就労訓練事業は、主に社協内での内職（地元商店からの仕事の引き受けを含む）が中心であり、赤い羽根募金を財源に「非雇用型」がメインで展開されている。一般企業における認定就労訓練事業のように数か月といった長期間の訓練というよりは「働いてお金をもらう」という体験を通して「自分が役に立っている」実感を得ることや、働く意欲につなげること、支援そのものへの動機づけなどが重視されている。

図表Ⅲ-2-6 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【D】

◆熱海市



【E】松江市、高知市、臼杵市

(自立相談支援事業と就労準備支援事業)

- 松江市と高知市、臼杵市は、自立相談支援事業と就労準備支援事業の委託先が社会福祉協議会で同一組織^(※)であり、相談支援員と就労支援員、就労準備支援事業支援員は、それぞれメインの担当はあるものの、役割(相談者への関わり方)を明確には区切らず、ゆるやかであることが共通している。
- 高知市も体制としては上記2自治体と同様であるが、就労準備支援事業支援員は専任1名、就労支援員1名は自立相談支援事業の相談支援員と兼任で配置されている。就労準備支援事業支援員は自立相談支援事業の相談支援員と同じ島に机を並べており、概ね「就労準備支援事業」に特化している。
- 上記3自治体とも、対象者としてひきこもりなど地域社会で孤立していた期間が長い人も多いため、仕事をイメージする前段階で、就労以外の地域活動や興味・関心のある場に通うなどの社会につながるためのプログラム(場)を社協の自主事業とも連動し、工夫しながら実践している。

(※) 臼杵市は、就労準備支援事業を社協のほかワーカーズコープにも委託(ワーカーズコープは県内の他自治体からも委託を受けているため臼杵市を含む広域を対象に2名の担当者が配置されている)。

(認定就労訓練事業)

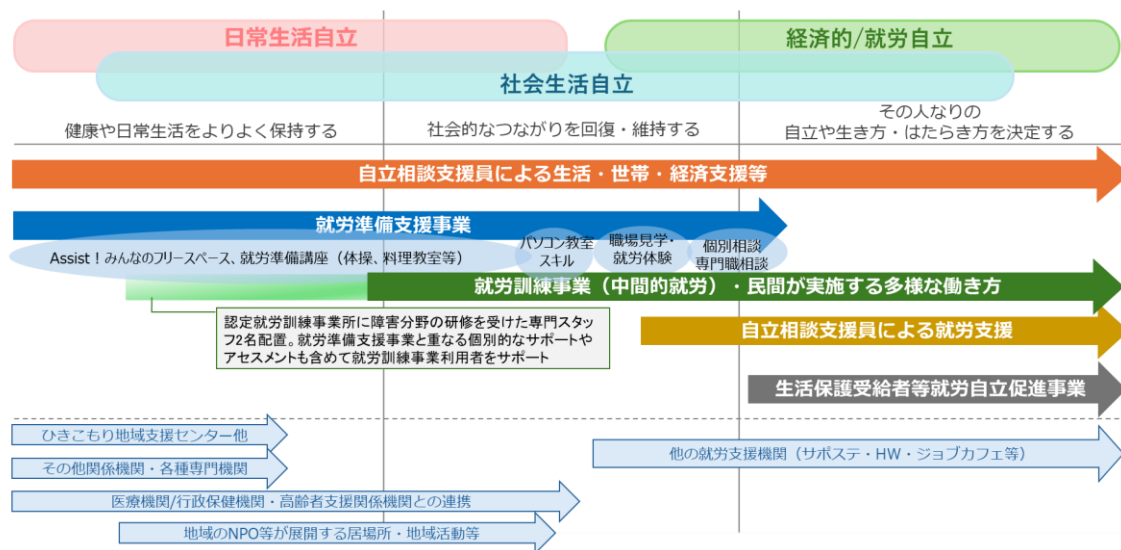
- 3自治体で大きく異なる点として、認定就労訓練事業の取り組み方があげられる。
- 松江市は、「企業組合しまね就労福祉事業団」(以下、「事業団」)が認定就労訓練事業所として認定を受けており、障害分野の就労支援に関する研修を受けた専任の職員2名を配置している。事業団が認定就労訓練先としている職場において、「まず決まっ

た時間に来る」といったことから、定期的な面談を通して対人関係での安心感や自尊心を回復するような働きかけ、生活習慣の改善などを進めており、就労準備支援事業とも重なる支援を訓練しながら一体的に進めている。

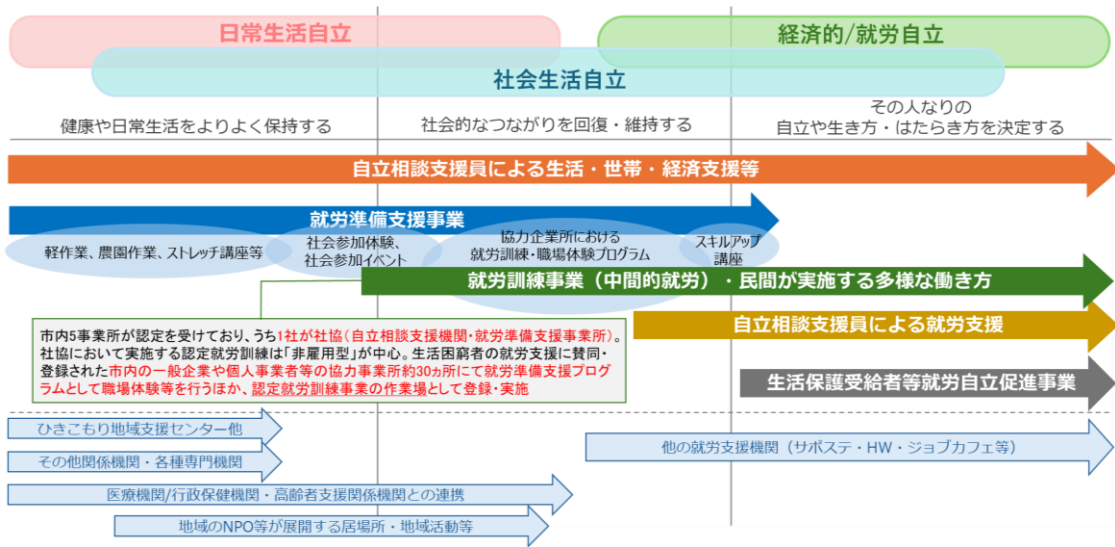
- 高知市においては社会福祉協議会が認定就労訓練事業所として認定を受けており、社協内での内職などの短時間のアルバイトを行うプログラムのほか、就労訓練の作業場所として地域の企業・協力事業所を登録し、対象者に応じた仕事を切り分けることによる就労訓練も可能である。就労準備支援事業における職場見学・就労体験先と、就労訓練の受入先とを一体的に開拓し、つながりをつくっている。
- 臼杵市は、認定就労訓練事業所の登録が現在 2 か所に限られ、うち 1 か所が受入停止の状況にあり利用が進んでいない。どちらかという、就労準備支援事業における職場見学・就労体験等の協力事業所において、就労訓練に近い形での支援を提供できるよう工夫がなされている。具体的には、地元有志による就労支援ボランティアグループと社協が協力して企業回りをを行い、就労体験等の受け入れ可能な企業を開拓、現在 16 社ほどが登録している。

図表Ⅲ-2-7 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【E】

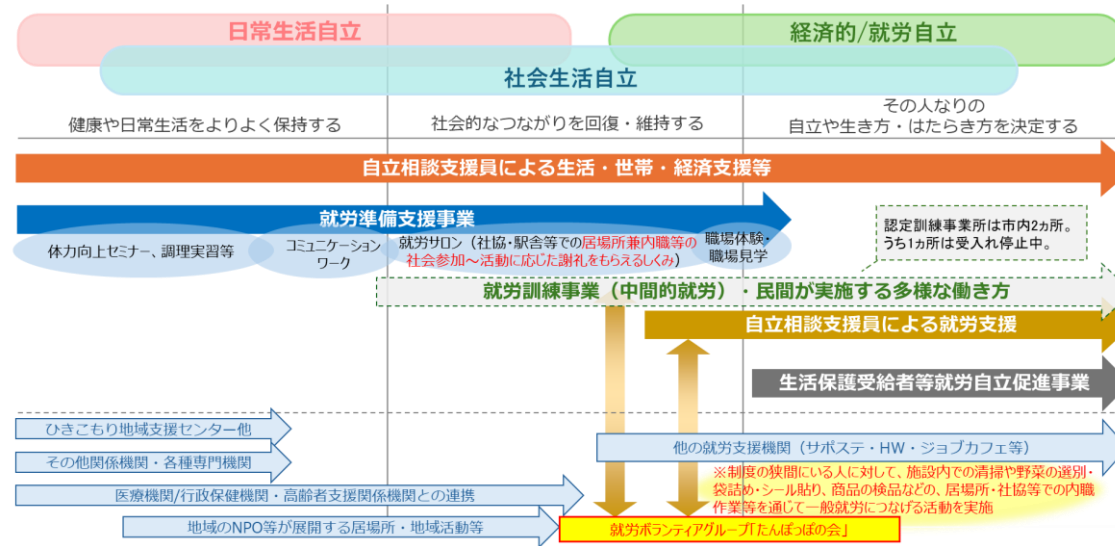
◆松江市



◆高知市



◆臼杵市



[F] 静岡県、[G] 沖縄県

- 都道府県は、静岡県（県全体と長泉町）と沖縄県（北部圏域）を対象とした。
- 両自治体とも、自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業の基本的な役割は、生活困窮者自立支援制度が定める各事業の体系と概ね合致している。

(静岡県)

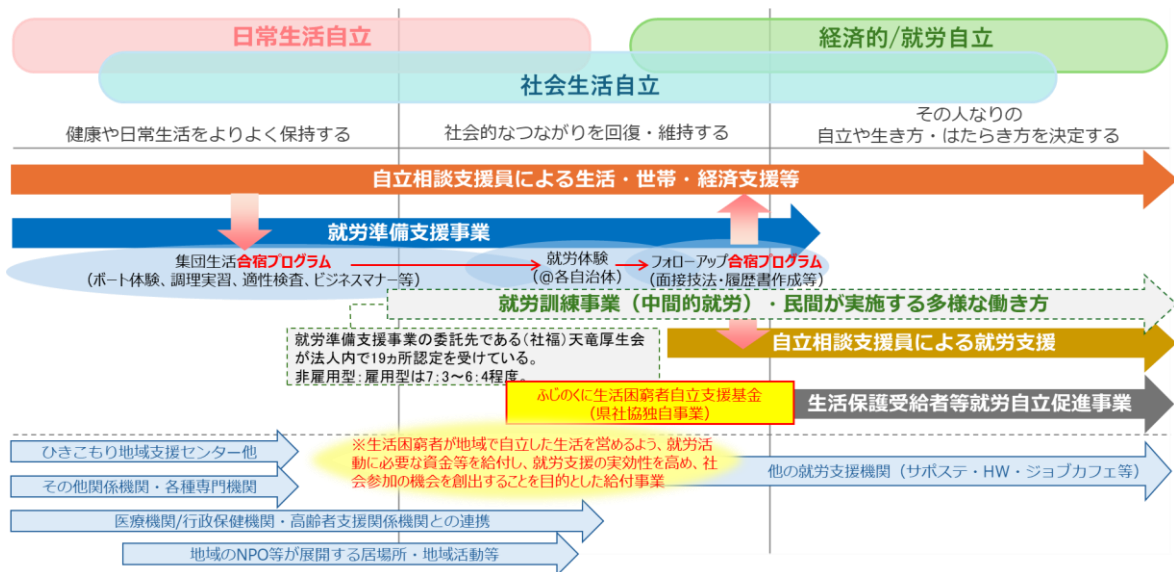
- 静岡県は、今回対象とした長泉町を含む圏域全体としては 15 団体で構成する「ふじのくに生活困窮者自立支援コンソーシアム」により自立相談支援事業が展開される。町社協に相談支援員兼就労支援員、NPO 法人に就労支援員を配置し、さらに就労準備支援事業は、圏域全体を対象に社会福祉法人に委託されている。

(沖縄県/北部圏域)

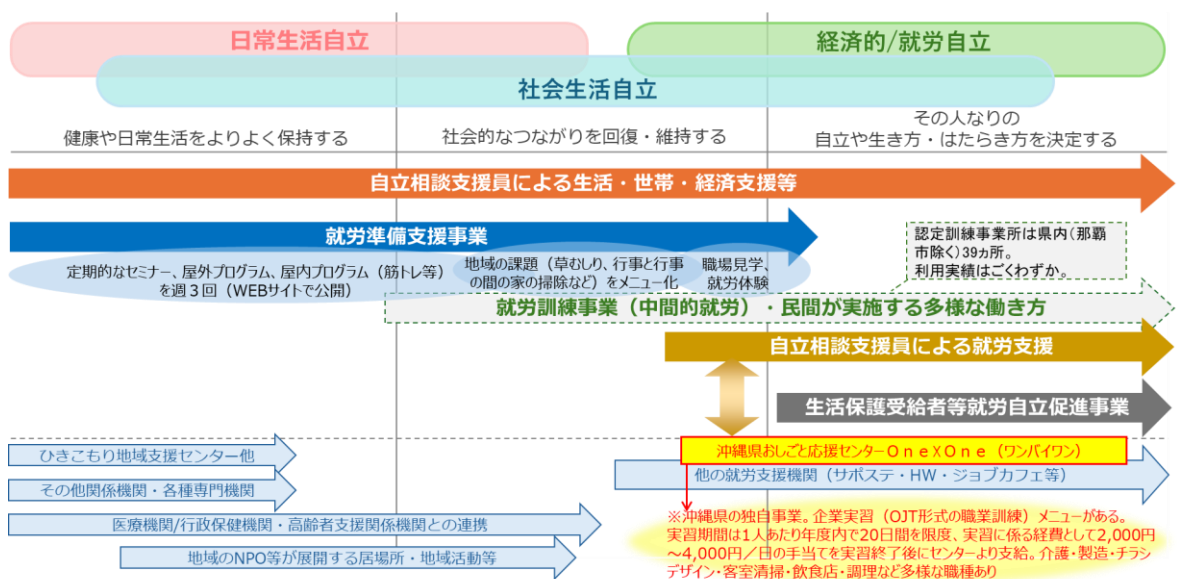
- 沖縄県（北部圏域）では、自立相談支援事業と就労準備支援事業を同一の団体が受託している。また、沖縄県による就職困難者向けの独自事業「沖縄県おしごと応援センターOne×One（ワンバイワン）」があり、生活困窮者自立支援制度による就労準備支援事業や自立相談支援事業による就労支援と、ハローワークでの求人との間、あるいは認定就労訓練の機能（企業実習等）を埋めるような位置づけを担っていることが特徴である。

図表Ⅲ-2-8 地域の実情に応じた就労支援の実践・全体像イメージ【F】【G】

◆静岡県



◆沖縄県



(2) 就労支援に関する各事業の連続性

生活困窮者自立支援制度の就労支援の主な対象は、従来の雇用・労働分野における就労支援や障害福祉サービスなどの分野別の支援だけでは「働くこと」「働き続けること」が困難な層が少なくない。ヒアリング結果からは、本制度による就労支援のほか、無料職業紹介を活用した職業あっせん、生活保護受給者等就労自立促進事業を含むハローワークによる支援などを本人に合わせて組み合わせること、具体的な就労体験やプログラムへの参加を通じて本人と一緒にアセスメントしながらスモールステップ（アップとダウン）の繰り返しに寄り添う姿勢などが共通のポイントとしてあげられた。

①ヒアリング自治体における実践からみた就労支援の展開

- 相談者の主訴にもより、本来は就労準備支援事業の利用が良いと思われる場合でも、何が何でも就労という希望が相談者からあれば、就労支援員につなぎ、支援を進めてみる。その中でうまくいかず、あらためて就労準備支援事業を利用してみる、ということもある。（小樽市）
- 本人の主訴が就労であればまずは就労でプランを立て、できるところから始め、自立相談支援事業の就労支援員も職場体験や見学等に連れて行く。実際に就労してみた上ですぐ辞めてしまう、職場の中で少しくまぐできないことがあるなどをきっかけに、課題をくみ取り再プランで就労準備支援事業を追加するということもある。（豊島区）
- 就労準備支援事業をしてから就労支援ではなく、就労準備支援事業をしながら就労し、その仕事を体験してみたことによる本人の状況や変化、わかったことなどが、また就労準備支援事業の対象になる。可逆性のある構造であることが基本。（まずは就労を経験してみることで見えてきた課題に対して就労準備支援を行う、利用者とそのストーリーを共有できるということが大切）。（豊島区）
- 自立相談支援事業の相談支援員によるインテークの後、就労支援の希望者には自立相談支援事業の就労支援員がアセスメントを実施。より就職を具体的に考えていきたい、すぐにでも就職したいという人は生活保護受給者等就労自立促進事業と、無料職業紹介事業のセットで、できるだけ早期の就職を目指す。ハローワークでマッチする求人が少ない対象者には、無料職業紹介で独自に求人開拓し対応。（倉敷市）
- ハローワークで仕事探しをしていた人がうまくいかず、自立相談支援機関につながり、就労準備支援事業を実施するケースがある。（倉敷市）
- 生活困窮者自立支援制度の事業だけが就労支援の窓口ではないため、一度利用につながった場合も、参加していただいて初めて進んでいくアセスメントもある。その中で広く視野を持って、本人の意向や適性にあう他の制度の窓口・事業につなぎ合わせをすることもある。（高知市）

(3) 就労支援の基本的な考え方

生活困窮者の就労支援において、支援員が「大切にしていること」「重要と思われる要素」について、主な回答を下記①～④にまとめた。

①本人の希望や願いを中心に支援する（本人中心の支援）

- 基礎にあるのは、本人の希望（どうなりたいか、どうしたいか、どう支えてほしいか。（小樽市）
- 支援者が「この人は生活保護が妥当ではないか」と思っても、本人の希望を尊重し、選択肢を提示しながら本人の判断を促す。（ただし、複数の選択肢を提示することで混乱する方もいる。その場合はあえて選択肢を提示せず「これしかない」と伝える場合もある）（小樽市）
- 就労準備支援事業が必要、働くことが難しい人でも、本人の主訴が就労であれば、まずはそこに寄り添い就労のプランを立てる。本人の状況に配慮しながら一緒に向き合う。（豊島区）
- 個別の対象者の状況を1人1人見ていきたいという思いがある。事業ごと・フェーズごとに分けしてしまうと、一つの固定的な道筋ができてしまう。そうすると支援員の主観的な部分が強くなってしまふことが懸念される。一番は相談者の希望がどこにあるのか。（倉敷市）
- 支援員の思い込みで誘導するようなことはなく、本人が働いてもいいかなと思えるような環境を作ることや、元気になる方法を考えて支援している。本人が「週1回ぐらいならバイトしてもいいかな」と、自ら働いてみようと言口にするまで、こちらからはあまり「働こう」とは言わない。（南アルプス市）

②強みに着目する

- いかに企業に求められる人になってもらおうかということあまり思っていない。どうしたらこの人らしさが出るのかという感覚で関わりながら、「らしさ」とはなんだろうというところを探していく。（倉敷市）
- 本人にどうしても苦手な部分がある時、その苦手な部分を一生懸命やってもついてこない。逆に得意な部分を探し出してそちらを優先して支援していく、というパターンが多い。（臼杵市）

③本人と一緒にアセスメントし、今後の暮らし方・働き方を考える

- 就労に向けた支援を進める中で、アウトリーチと伴走を大事にしている。本人が一人で内職等の作業をする時には、支援者員も一緒にやることで、徐々に信頼関係を築きながらアセスメントすることを意識している。（臼杵市）
- 結果として障害福祉サービスにつなぐ際も、やってみてからでないと本人としてその必要性が出てこないこともある。（豊島区）

- 本人はこの仕事が得意、やりたいと言いながらも不一致なケースもあり、もしかしたらこういうことができるのでは？得意なのでは？ということ伝えることもある。家計の相談も行っているため、例えば年金をもらっている人であれば、最低限どのくらいの収入があれば生活ができるのか、必ずしも就労だけではなく、ボランティアに参加することにより社会貢献を通じて生きがいを見つけ、本人の自己肯定感を高めることも選択肢として見据えながら話をしていく。(名古屋市)

④企業（仕事）や地域とつながっていくために伴走する

- 働くことで生じる不安については、就労支援員が企業との調整（代弁、交渉、働き続けるための環境調整）を担うことで払拭できるようにする。(豊島区)
- 社会参加の場としてフリースペースを活用する際、最初は担当の相談員（自立相談支援事業の就労支援員や就労準備支援事業支援員等）が一緒に参加することで、本人の思いを代弁者として伝えることや、自分の考えを聞いてもらう中で少しずつなじんでいくことを意識している。(松江市)
- 過疎地域では空き家の増加や人口減少により孤立・孤独が表面化している。孤立した人を社会とどうつながかを考えたときに、本人も「何かやりたい」という気持ちはあり、何かをやるにはどうしていくかを掘り下げていくと、居場所や社会参加に行き着く。社会とつながるための意識付け・動機付けができるものを具体的に考えた結果、内職などの軽作業からやってみようかということを考え、その仕組みを作ったところ、かなりフィットする確率が高い。(臼杵市)
- 孤立している方は、気分の浮き沈みが激しい場合もあり、頻繁にアウトリーチに入り、気持ちが上向いている時に情報提供するとスムーズに社会参加につながってくることもある。アウトリーチのタイミングは、本人の体調・リズムを考慮している。(臼杵市)
- 農業体験などの共同作業を伴うプログラムでは、「これをやっておいて」ではなく、「一緒にやろう」。利用者の家まで車で迎えに行き、車に乗せて目的地へ行き、一緒に作業をする、一緒に汗をかきながらいろいろな語り合いをする。利用者は、対人関係、コミュニケーションの準備ができていないことが多いため、いろいろな人のところに一緒に連れて行き、人に会ってもらおう。そうしているうちに自分でもコミュニケーションが取れるような状態まで持っていく。(臼杵市)
- まず話をしっかり聞く。すぐに仕事ではなく、いろいろな話を聞きながら、その方が本当に何をやりたいか。現実と希望する仕事とのマッチングが難しい場合もあるが、すぐに否定するのではなく、本人が納得できるような形でゆっくりとそちらの方向に向かっていくように促しをしながら、働きたい気持ちを大切にしている。(名古屋市)

(4) 多様な就労(準備)支援プログラムの構築

ヒアリング先より情報提供を受けた就労準備支援事業のメニューについて、主な内容を以下①～③に整理した。

①就労支援（事業）につながる前段階のプログラム

本格的に就労準備支援事業や認定就労訓練事業の利用に至る前に、相談につながりにくい人に対して居場所等の気軽に立ち寄ることができる場を紹介することや、内職のほかちょっとした地域のお手伝い（有償ボランティア活動等）に、試行的に参加してもらうなどのプログラムを作り、支援が必要な人を利用につなげる工夫がなされている。

また、プログラムへの参加を通してアセスメントを深めている。これらの活動（プログラム）は、支援を必要とする人への呼び水にもなるため、広い意味での「アウトリーチ」活動でもある。

○【参考】気軽に立ち寄ることができる場（島根県松江市）

Assist! みんなのフリースペース（月1回＋随時）

※年3回開催の「就労準備講座」よりも、気軽に参加できる形式で企画・実施。集団になかなかじめないような人へのアプローチの一つの手段として、エコクラフト、マーブリング、調理などさまざまなテーマで開催している。



松江県くらし相談支援センター 就労準備支援事業

Assist!!

～みんなのフリースペース～

開催予定日・開催内容(予定)

7月11日(木)	マーブリング
8月8日(木)	そうめん流し・ミニお祭り
9月12日(木)	ゴズ釣り
11月14日(木)	eスポーツ大会
12月12日(木)	クリスマスケーキ作り
1月9日(木)	書初め
3月13日(木)	ボードゲームカフェ

時間 14:00～16:00
場所 松江市総合福祉センター (2Fほっとスペース)

※内容により日時・会場が変更となる場合があります。

利用方法
参加をご希望の方は、当日の準備の関係がありますので、できるだけ事前に下記の連絡先までおしらせください。

問い合わせ先
松江県くらし相談支援センター
〒690-0852 松江市千鳥町70番地 松江市総合福祉センター2階
TEL: 0852-60-7575 FAX: 0852-60-7576
mail: kurashi@shikyoku-matsue.jp
受付時間: 月曜～金曜(土日祝日休み) 8:30～17:00



Assist!!新聞 9月号

◎Assist!!とは…
誰でも気軽に遊びに来れるスペースを作ろうと始めたのがAssist!!です。定期的に楽しい企画を得意としていますのでぜひ遊びに来てください!!

ハゼ釣りを行いました!
9月12日(木)晴天の中、たくさんの方に参加いただき釣りを行いました。世話を焼いては掛け作りから選りすぐった有価魚を調理をすることができたかきや各事業者の皆さんも参加がはじまり、参加者同士の少ない社歴職員と新たな繋がりができ、楽しい思い出がまた一つ増えました!!

キナーズ

次回のAssist!!
令和6年11月14日(木)
14:00～16:00
eスポーツ大会

★参加希望の方は11月1日(月)までに松江市くらし相談支援センターへご連絡ください。

問い合わせ先
松江県社会福祉協議会
松江県くらし相談支援センター (担当:伊田三子)
〒690-0852
松江市千鳥町70番地
松江市総合福祉センター2階
TEL: 0852-60-7575
Fax: 0852-60-7576
E: kurashi@shikyoku-matsue.jp

②さまざまな支援メニューの組み立て・体系化

「働く場」とつながっていくためのプロセスとして、自己理解の促進や、職業選択のサポート、就職活動に向かうセミナー等、さまざまな支援メニューが整備されている。大きくは「集団型・通所型」「オーダーメイド方式」「合宿型」などに分けられる。ヒアリング先によっては、それらのメニューを体系化して整理されている。

図表Ⅲ-2-9 就労準備支援事業のメニュー例（大分県臼杵市）

就労準備支援事業を行うにあたって	1. 「社会生活の自立」「日常生活の自立」「就労自立の3つの自立」を主とし、優先順位はあるが並行してプログラムを行っている 2. とりわけ就労準備をおこなうにあたって、信頼関係構築を大切にしている。 *伴走型支援は、支援する・支援されるという関係性ではなく、当事者が主体になるよう支援員も共に活動に参加することを大事にしている 3. 対象者の方への支援にあたり、対象者に必要であり、対象者が必要としているプログラムをその都度、就労準備会議等の中で精査し計画をたてている *対象者と一緒にプログラムも考えることで、活動が身近なものになってもらえるようにする		
	プログラム名	プログラムにおける目的（※これまで取り組んだ実践例）	社会生活自立 日常生活自立 就労自立
生活のリズムの確認	1日のタイムスケジュールの作成、日常生活の改善に向けてのアドバイスを行い、規則正しい生活のリズムを身につける		○
調理実習	買い物と一緒にすることで、金銭感覚の把握を行い、状況をふまえて簡単な家計簿の作成を行い、金銭管理方法の取得 他者と一緒に連携しながら調理実習に取り組むことで、コミュニケーション能力の向上や自己有用感の向上を図る	○	○
家事支援	必要最低限の家事アドバイス及び実践を行い、家事に対しての負担軽減および楽しく家事ができるようになる		○
体力向上セミナー	職場体験やボランティア活動を通して体力の向上を図る スポーツと一緒に楽しむことでストレス軽減や、他者との関わりへの苦手意識の克服、体力の向上を図る	○	○
コミュニケーションワーク	ありのままの自分を理解、自分をさらけ出せるようにする	○	○
スキーマチェック	自分の潜在的な考え方や価値観を知ってもらい、一つの個性であり、潜在的な考え方というフィルターを作ってもらう。	○	○
疲れないコミュニケーションセミナー	自分の体調に合わせ面談を行い、疲れるラインと疲れないボーダーラインの見極めができるようにする	○	○
カラーージュ作成	手先の運動等の把握、深層心理を把握する	○	○
心理学に基づく心理テスト	楽しく自分自身の心理を知る	○	
タイムマシーン方式	自分の将来像や目標の設定による自己啓発を図る	○	
ボランティア体験や地域行事への参加	自己肯定感や自己有用感の向上、コミュニケーション能力の向上、体力の向上を図る	○	○
定期面談	信頼関係の構築、他者との関わり方の習得、不安の解消、就労後の定着支援 等	○	○
職場体験・職場見学	多種多様な業種の理解、体力の向上、他者とのコミュニケーション能力の向上を図る	○	○
ボランティア活動・地域活動	役割を見つけて活動する中で、自己肯定感や自己有用感の向上を図る。	○	○

図表Ⅲ-2-10 就労準備支援事業のメニュー例（愛知県名古屋市）

メニュー名	日常生活自立	社会自立		就労自立
		就労距離への遠	近	
クラフト、工作	◎	△		
ウォーキング	◎	○	○	△
くらさぼサロン	◎	◎	○	
マインドフルネス講座	◎	○	○	
心の絆創膏配布		◎	○	
子ども食堂	△	◎	○	
キャッチボール	△	◎	○	
農業体験	△	○	◎	△
ピッキング練習		△	◎	○
ファイリング等事務作業	△		◎	△
PCスキルアップ講習		○	◎	○
ICT講習		○	◎	○
カードゲーム			◎	△
ビブリオバトル	△	△	◎	△
アサーション講座	△	△	◎	△
ビジネスマナー講座			◎	○
自己理解&キャリアコンサルティング				◎
就労体験	△	△	◎	◎
就職活動支援				◎
定着の支援				◎

◎ 中心となる自立項目 ○ 関連性の高い自立項目 △ ケースにより関連する

【通所方式/集団型プログラム】

就労準備支援事業所や地域の交流・社会参加の場などに利用者が通所する方式で実施されるプログラムは、多くのヒアリング先においてベーシックに整備されている。

中でも、他者との共同作業や交流を通しての気づき、グループワークなどの利用者同士のコミュニケーションが促されるような集団型のプログラムも多くみられる。また、企業側の採用担当者や外部講師（実際に働いている人、その道のプロフェッショナル等）によるセミナーのように職業理解につながるプログラムなどが整備されている。

その他、地域とのつながりを作ることや社会参加の機会、生活力の向上といった観点から、フィールドワーク、地域活動への参加等を取り入れたプログラムもみられる。

プログラムの実施にあたっては、車での送迎を含め、利用者が参加しやすいようアクセス性にも配慮している。就労準備支援事業を広域実施している場合、他地域との合同により参加者が一同に会すよう集団型のプログラムを組み立てている事例もみられる。

- 基本的には集団参加型のメニューが多い。集団生活を苦手とする人も多いため、集団の中での経験を通して自分の得意分野や苦手なところなどに気づいてもらえるように工夫している。プログラムとして、緩急をつけながら肩の力を抜いて、例えばみんなで行うスポーツや、芸術鑑賞、遠足などレクリエーションの要素をもつものも交えながら組み立てる。（小樽市）
- 就労に向けて、手先の器用さ、集中力がどれだけ続くかなどを把握（アセスメント）するためにもプログラムでの体験が重要。（小樽市）
- 無料職業紹介事業により求人開拓した企業へ、一緒に職場見学や就労体験、企業訪問等を行うことや、希望者向けに開催している就労セミナーにおいて参加者同士と話をするなど。また、企業側の採用担当の人に来てもらい話をしてもらうこともある。何か学ぶというよりそこに集まることで一つのコミュニティの中で自分自身が考え話し合うことができる。そこから本人がやりたいことが出てくることもあり、思いを引き出すためにいろいろな方法でアプローチする。（倉敷市）



【事例】男性 20 代/メンタルヘルスの不調/ひきこもり

大学卒業後、3年程度水産会社に勤めたが、メンタルヘルスの課題を抱えて退職、ひきこもりとなる。食事や睡眠が不規則。家庭内での最低限の会話はあるほか、オンラインゲームでつながっている人との関わりはある。初回面談で来所した際、自力では来られず父親の車に乗って来て、車を降りて事務所に入るのもなかなかできなかった。そのくらい対人緊張が強かった。短時間で会って話すことを何回か繰り返すうちに徐々に家族以外の人と話すことに慣れてきた。本人に提案し、まずは少人数（2、3人）のプログラムという形でボランティア活動に参加してもらった。その後少しずつ集団の力を借りて人とのコミュニケーションに慣れ、10人くらいでも参加できるようになった。

社会との関わりがほとんどなかった状態で、本人にとっての社会というのはオンラインゲームの中のコミュニティであり、インターネット空間の中がほとんど全てという考え方（オンラインゲームなどの共通の話題があるようなところでは話ができていた）。その限られた価値観の中で自分のことを相談することもあったと思うが、「やっぱりそうなんだ」と思い込んでいるようなところがあった。そこから、実際に集団の中で他者と関わることを通じて、自分と同じような悩みを持つ人は他にもいて、自分より生きづらさを抱え、悩みながら生きている人と直接関わることで、自分の悩み・人生が世界で一番不幸だと思い込んでいた時と比べ、視野がかなり広がったと思う。自分の悩みを相対化することができた。

- プログラムの実施場所として、就労準備支援事業所や受託法人の本部があるところで集まることもあるが、その他の活動場所（ボランティア等）は市内に点在している。交通の便が悪い人もいるため、現地集合のほか、スタッフが車で各地域を回って利用者に同乗してもらい、一同に集まって参加することもある。（倉敷市）
- 合併して5つの圏域があり、移動が大変なため、なるべく自力で通える地域に面談やボランティア活動など社会参加のための場所を作ってきた。（倉敷市）
- 就労準備支援事業者（ワーカーズコープ）は、県の広域実施も受託しているため、他地域と合同でプログラムを行うことで参加者の仲間意識の醸成を図っている。（臼杵市）

〇【参考】就労準備支援事業プログラムのスケジュール表（沖縄県北部圏域）

2024年1月  北部就労準備プログラムカレンダー  沖縄県就労準備支援事業

月	火	水	木	金
		1 	2	3
6	7 10:00-12:00 屋外プログラム	8 10:00-12:00 屋内プログラム	9	10 10:00-12:00 就労体験
13 	14 10:00-12:00 屋外プログラム	15 10:00-12:00 屋内プログラム	16	17 10:00-12:00 就労体験
20	21 10:00-12:00 屋外プログラム	22 10:00-12:00 屋内プログラム	23 10:00-15:00 屋内プログラム (伊江村)	24 10:00-12:00 就労体験
27	28 10:00-12:00 屋外プログラム	29 10:00-12:00 屋内プログラム	30	31 10:00-12:00 就労体験

※希望があれば、プログラム例にない活動も行えます。★参加したい日にちを電話にて教えてください。☆参加無料!! 定員あり ☆
天候により、掲載しているプログラムの内容が変更になる場合があります。
※プログラム参加時は、感染予防対策として「手洗い」「うがい」をお願いしております。
また、「マスクの着用」は任意となっております。
※プログラムの中で3つの色（参加希望・参加場所・参加希望）が重ならないよう工夫しています。

1月 プログラム概要

- 【屋内プログラム】
 - ※個別指導、グループゲーム、実習など
 - ※課題がない、何か作ってみたい料理がある、えしぷりにゲームしてみたい、一曲歌ってみたいなど、屋内で依頼をしながら一緒に楽しみましょう
- 【屋外プログラム】
 - ※ドライブ、河原り、散歩など
 - 行きたい場所へ来て行ってみたり、用や山で自然に触れたり、運動不足解消にストレッチや体操など、汗での活動を中心に活動します。ちょっとした汗を流してリフレッシュしましょう
- ※就労体験
 - 就労に向けて体験を通して自分の得意なことを試してみませんか？今まで気づかなかった自分を発見できるかも？
- ※プログラムの内容など、何かご不明な点がございましたらお気軽に担当スタッフにご質問ください

その他のプログラム（例）

カレンダーに記載のない日でも、プログラムの実施は可能です。プログラムの内容も相談可能です。あなたの好きなこと、得意なこと、やってみたい事をぜひ聞かせてください

-  ワークショップ
-  就労体験
-  社会的
-  スポーツレク
-  パソコン体験
-  小物づくり

（就職・生活支援パーソナル・サポート・センターWeb サイト/https://psokinawa.jp/より）

【オーダーメイド方式】

前述の通所方式では、「〇曜日に〇〇セミナー」といったプログラムが基本的に設定されていることが多く、メニュー化されているため対象者に伝えやすいといったメリットがあるが、本人の希望やニーズと合わないことも考えられる。そのような際、本人の興味・関心のあることをベースにオーダーメイドでプログラムを構築している。

また、小規模自治体では、通所方式を中心とする集団型のプログラムでは、参加者数が限られ一同に会うことが難しく、結果として1人1人に合わせた個別プログラムを作成・実施することが多くなっている。

- 就労準備支援事業のベースとしてあらかじめ整備しているプログラムが意向に沿わないこともあるため、そのような場合はプログラムのメニューに載っていない、本人の得意なことを一緒に考えて取り組むような形になる。（倉敷市）
- 利用者がやらされるのではなく、自分たちで考えるプログラムや、取り組むテーマとして連続性のあるプログラムを意識的に設定している。（倉敷市）
- いわゆる居場所、スペースのようなものがない。カウンターと面談室が主な活動場所になる。従来からオーダーメイドメニューの作成を一つの手法として確立してきている。利用者の数＝メニュー数。（豊島区）

【合宿方式】

合宿方式では、就労準備支援事業支援員が利用者と寝食を共にしながら支援を行うため、利用者の特性や状況を詳細に把握することができるといったメリットがある。一方、通所方式と比べ受入人数が制限されることや、合宿期間中の短期的な関わりとなるため信頼関係の構築に工夫が求められるといった面がある。

静岡県の合宿型による就労準備支援事業では、2泊3日の集団生活合宿の間に就労体験5日間を挟む形としており、可能な限り利用者の居住地の近くにある事業所において受入れを調整している。

- 一番のメリットであり、通所型と決定的に異なる点としては、支援者が対象者と衣食住を共にするという点。通所型は、自宅訪問などで生活を見る機会はゼロではないが、合宿型では、生活リズムや食事、歯磨き、洗濯、入浴など生活の基本から支援者として状況を把握することができる。就労準備支援事業は、直接的に就労を目指す事業ではないことから、生活そのものの立て直しを含め、普段の生活を見た上で、こちらから就労に向けた適性や課題等についてお伝えできることはとても大きいと思う。
- 合宿型で短期的な関わりとなるため、信頼関係の構築の難しさはある。支援者側は、就労に向けて本人に必要なことを伝えたいが、信頼関係がないと伝えにくい。そのため、プログラム時間中や合間の休憩などは、他愛もない話しながら本人の懐にいかに入り込めるかというところはかなり意識している。

(静岡県/ (社福) 天竜厚生会)

図表Ⅲ-2-11 就労準備支援プログラム例・合宿型（静岡県）

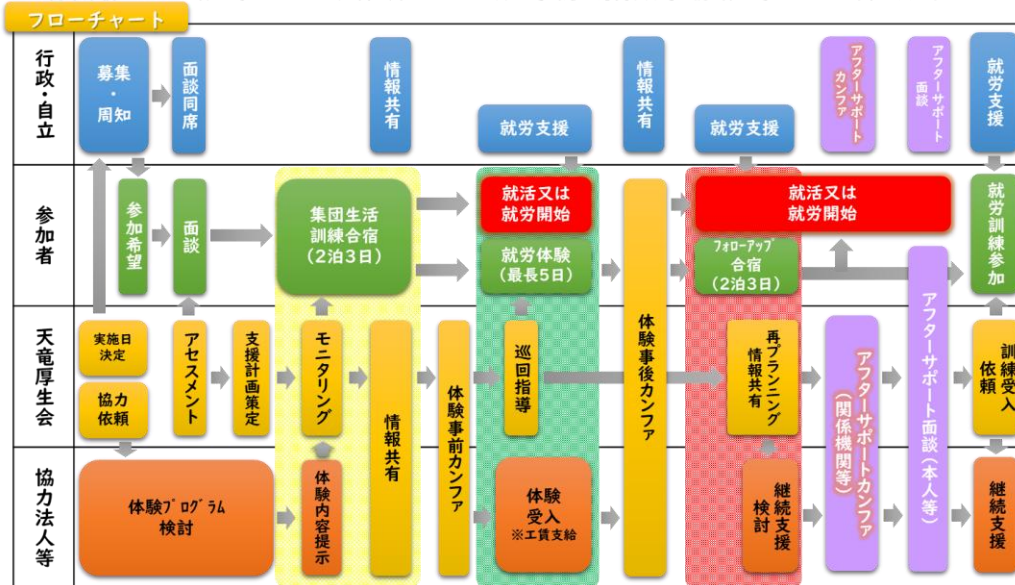
実施方針 ～生活と就労の実体験を一体的に実施～

- 集団生活合宿の中で就労に向けた自己理解・職業理解を促し、就労体験で実際に働くことで『働くこと』を理解する。
- 地域の社会福祉法人や企業等にて就労体験を行い、実践に近い形で『働く』を体験するとともに、地域でのつながりを構築する。
- フォローアップ合宿にて、実体験から得た『働くこと』で感じる様々な想いを再度合宿にて共有を図ることで、『働くこと』の意味を再確認するとともに、社会的孤立の防止や、就労意欲の低下を予防する。
- アフターサポートでは、合宿終了後速やかに地域の支援者と情報共有を行い、地域での支援にスムーズに繋げる。
- 集中型就労体験では、より具体的な『就職』を見据えた体験を提供。新規相談者には、個別事情に配慮した体験を提供。
- 生活困窮者等に関する支援は、必要な時に必要な支援が求められるため、下記フローによらず、短期的なプログラムの検討や希望するプログラムからの提供から課題を捉え、他プログラムへの参加意欲を促し、複数年かけての支援も見立てる。



事業フローについて

- 参加者の継続的なモニタリングを実施し、より適応した参加者地域の企業や認定就労訓練事業所における就労体験の実施。
- 当該合宿終了後、断ち切れることのない支援者側からのアプローチ。(就労訓練の導入など)
- 就労体験中の当法人スタッフによる巡回指導かつ就労体験参加のインセンティブとして工賃を支給。
- 就労体験一日ごとの振り返りシートへの記載を促すことによる自己達成感の感受、次週に続く振り返りにおける効果の向上。



(社会福祉法人 天竜厚生会提供資料より)

③職場見学・就労体験等

就労準備支援事業における職場見学や就労体験等のプログラムは、いずれのヒアリング先においても整備されており、受入れに対応する地域の協力事業所を一定数確保している。また、見学・体験後の「振り返り」が重視されている点が共通している。

- 就労体験はやりっぱなしではよくなく、支援員のフォロー（振り返り）とセット。 8割できていても2割の失敗の方を見ってしまう方が多い。1日の業務はほとんど問題がなかったのに挨拶でどもってしまったという点で「失敗」と思う傾向もあり、本人はそのまま家に帰ると不安感が増してしまうため、そうならないためにも振り返りは必要。(豊島区)
- 本人のニーズと実際のスキルにギャップがある場合もあり、就労体験等の後の振り返りを重視している。その中で、できること、苦手なことなどを把握し、目標の修正等を行うことで、ギャップを埋めることを目指す。(高知市)

(5) 企業・社会資源等の開拓と地域づくり

①対象者に合わせて居場所や体験活動等の社会資源開発につなげていく

- 社協が実施している有償ボランティアのサービス（※住民参加型福祉サービス有償ボランティア「こつこつ」）があり、プログラムの一環として、そうしたボランティア活動を取り入れることもあり、活用している。（熱海市）
- 対象者の特性やニーズに合わせて、地域の中に、本人にフィットするような体験先や就労先をこちらで見つけながら協力者を増やしている。（熱海市）
- 相談支援員である社協職員1名は重層事業の担当でもある。重層事業の関係で商工会議所に行き、社会参加の一環として仕事の切り出しについて相談するなどのつながりができている。（熱海市）
- 地域若者サポートステーションのほか、これまで障害者の就労支援を行っていた事業所が「生きづらさ」を抱える人向けに就労準備支援事業と重なるような支援、協力事業所をもつところもある。そうしたところも選択肢と踏まえ、本人の状況に応じてどの支援がよいか検討している。（高知市）
- 社協という組織を活かすとすると、農作業の中の大根洗いなど地域の「ちょっとしたお手伝い」を、ひきこもりの人達やもう少し働きたいというお年寄りの方が担うというような、地域のニーズ探しとマッチングが重要だと考えている。（静岡県/長泉町）

②企業（環境）に働きかける

- 一般就労で就職活動してきたがなかなか決まらない場合、その原因を相談者と一緒に探し、抱える課題を少しでも減らすことができれば長く続く可能性が高まる。なかなか一歩踏み出すことができない人の不安に寄り添っていく。つまりき
の原因をともに考え、不安が軽くなるよう企業に対して調整を働きかける。（豊島区）
- その人を支援によって「変えよう」とすることに固執するのではなく、その人に合う会社を見つけることや働きやすい就業環境を用意するという働きかけも就労支援の一つ。（小樽市）

③企業アプローチとしての定着支援

- 特に就労準備支援事業を経由した方はフォローアップが大切だと考えており、定着支援として、企業に連絡をとる、場合によっては企業と本人と三者面談することもある（人にもよる）。（小樽市）
- 定着支援はほぼ全ての対象者にしている。まず仕事がうまくいっているかも当然だが、その中でも家計が回っているかも確認している。仕事がうまくいっていても家計が回っていない場合、当然、就労支援だけではなく家計改善支援が必要かもしれない。そうした全てが取り払われた時に、本人の同意のもと支援自体の終

結が来る。定着支援を行い、投げっぱなしではないというのも企業にとってメリット。(豊島区)

(6) 認定就労訓練事業の利用状況と課題

ヒアリングから得られた認定就労訓練事業の課題に関する内容をまとめると、以下のよう整理される。

① 認定就労訓練事業所が限定的なためマッチングが難しい

- 認定を受けている事業所が介護施設など業種の偏りがある。訓練をしたいという人は、ある程度希望の職種があるはずだが、本人のニーズに合わない。(豊島区)
- 移動手段がない人が多いため、その人が住んでいるところから歩いて通える範囲に受け入れ先がないと難しい。支援が必要な人が通える範囲の事業所で受入れがあるかどうかを探し、場合によっては受け入れてくれないかと打診し、認定の申請を依頼するという調整を一件ずつ行っていく必要がある。実際には企業の負担が大きすぎて、認定が広がらない。社会貢献意識が相当高い企業でなければ受入れは難しいが、そのような企業や社会福祉法人の数が少ない北部では(相談者が住んでいるところから歩いて行けるところも少なく、そもそも一般の就労先さえないため)、認定就労訓練事業はほぼ絶望的。毎回送迎をするのは非現実的でもある。(沖縄県)
- 目星をつけた企業に飛び込みでお願いしても、なかなかすぐに受け入れてくれない、理解してくれないことが多い。最近は希望者がいてどうですか、という形で訓練事業所を増やしていくというスタンスに変えつつある。(名古屋市)

② 制度上のハードルがある

- 今後、認定就労訓練事業所を広げたいと考えているが、こちらから法人にメリットを提示することができない。Win-Win の関係で提案したいが、社会貢献の文脈でしか語れず難しい。(小樽市)
- どこをどう切り分けて何の仕事をお願いするか、有償にするのかしないのかなど、個々のケースでかなり深く話をする必要があり、書式一つとってもノウハウがないとなかなか難しい。(豊島区)
- 事業者から見ると、認定を受けるための申請がかなり手間であると聞く。「非雇用型」で何か月もという想定は、本人からすると厳しい。また、「雇用型」の場合、今度は企業が雇用形態と賃金の捻出をどうするか必ず悩む。企業の問題のため、その問題の解消は我々ではなかなかできない。(倉敷市)
- 認定就労訓練事業がなかなか利用されない課題の一つとして、書類の煩雑さ以外にも、保険加入が企業の負担になっている。企業の保険加入について、補助金の対象となったが、費用の一部を県が負担しなくてはいけないなど、予算化がなかなか難しいところが挙げられている。(沖縄県)

③訓練事業所側の受入体制の整備が十分でない

- 大きい法人の事業所となると、訓練担当の方と現場の職員との意思疎通が難しい。上層部に理解があっても、なぜ訓練生を受け入れなくてはいけないのかと感じている現場職員もあり、本人が居づらくなり傷ついて帰ってくることもあった。(豊島区)
- 最終的には生活困窮者、生活保護受給者の自立のために、もう少し自立相談支援機関と就労訓練事業者とがより一層密に連携できるとよい。(松江市)
- いろいろな背景を抱えている方が多く、単に人材確保として受入れればよいわけではなく、また、「非雇用型」から「雇用型」へ移行するケースは多くはない。訓練を実施すると担当がついて業務に関する指導や日常的なコミュニケーションなどが必要になるため、そこに対する負担感は出てしまう。(静岡県)

(7) 被保護者就労準備支援事業の一体的実施

過去のアンケート調査結果として「困窮制度による支援と保護の実施は、自立に向けた支援であるという点で共通する一方、金銭給付の有無や、指導指示等の強制力の有無、就労意欲、支援期間、支援体制等の面で相違がある」ことが指摘されている。(※)

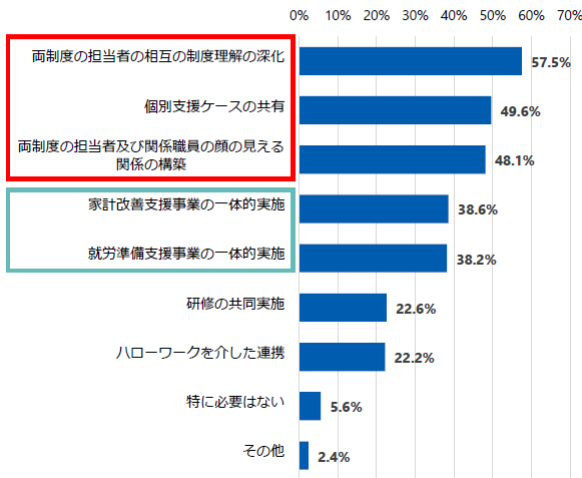
被保護者就労準備支援事業を一体実施しているヒアリング地域からも同様な意見やギャップ等が聞かれたところであるが、入口が違うだけで、同じ場所・時間でプログラムが実施されている。

(※) 社会保障審議会生活困窮者自立支援及び生活保護部会（第16回）令和4年7月8日資料4より

図表Ⅲ-2-12 被保護者就労準備支援事業を一体実施しているヒアリング先の状況・意見

<p>情報共有・支援体制等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ケースワーカーや就労指導員によるアセスメント結果は、必要な際、個人情報保護の同意書もらった上で共有している。就労準備支援事業支援員として生活保護受給者の対象者とは、概ねプログラムへの見学が初見となる。プログラムに参加していく中で、生活保護サイドで共有の場をもち、ケースワーカー、就労指導員、生活困窮者自立支援制度の支援員等で情報共有しながら進めている。(小樽市) ・ 各支所の生活保護担当に就労支援員がいるため、生活保護担当の支援員を通して、就労準備支援事業所に話ぐる流れ。アセスメント情報として、職歴の有無、移動手段などを共有している。(倉敷市) ・ 本人に働く意欲があり、医師が就労可と判断していても、実際に仕事を体験してみると明らかに就労不可ということもある。面談室以外の実践を通して詳細なアセスメントを取ることができ、根拠を持ってケースワーカーなどに情報を返していけることが生活困窮者向けの就労準備支援事業の有意義なところ。(沖縄県)
<p>生活困窮者と生活保護受給者の支援方法 (共通点・相違点)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生活保護受給世帯で育ってきたために伝わらない部分(ズレ)や培ってきた経済観念などがあり、その方向修正や上書きが生活保護受給者の支援に必要な場合がある。(小樽市) ・ 移動に係る交通費について、生活保護受給者は訓練であれば交通費を支給してもらえる。生活困窮者自立支援制度の利用者の方がシビアなため、なるべく送迎で対応できるようにしている。(倉敷市) ・ 生活保護受給者は就労意欲が低い人が多く、プログラムの参加を通していろいろなことを伝えても進まない傾向がある。(熱海市) ・ 生活困窮者では、就労に向けた準備を、時間をかけて高める余裕がない人が多い。生活保護受給者は生活費が確保されている分ゆっくりできる面がある。(南アルプス市)

連携強化に必要な取組



※ 令和3年度社会福祉推進事業「新型コロナウイルス感染症等の影響を踏まえた生活困窮者支援のあり方に関する調査研究事業」アンケート調査（北海道総合研究調査会）

困窮制度による支援と保護の実施の共通点・相違点（例）

【共通点】

- ・ 自立に向けた支援
- ・ 本人の尊厳の確保、本人の意思の尊重
- ・ 信頼関係の構築 等

【相違点】

- ・ 指導指示等の強制力の有無
- ・ 金銭給付の有無
- ・ 就労意欲（困窮制度のほうが全般的に高い）
- ・ 個人情報の把握の程度（資産調査等の有無）
- ・ 支援期間（被保護者は生活が保障されているため、時間をかけた支援が可能だが、生活困窮者はまとまった生活費が無い場合が多く、短期間で就労する必要）
- ・ 実施者（生活保護は自治体職員がケースワーカーとなるが、困窮制度は委託が多い）
- ・ 地域支援（地域づくり）や地域福祉の要素の有無
- ・ 困窮制度では医療面のフォローができない 等

（自由記入欄より主な回答を要約）

3. 調査結果（自治体別）

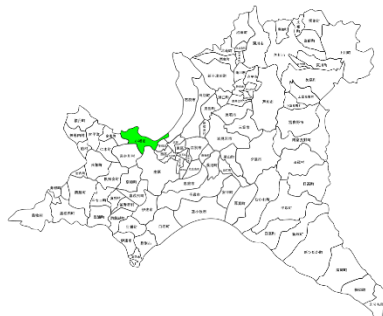
次頁以降、2024（令和6）年11月から2025（令和7）年1月にかけて実施したヒアリング調査結果について、自治体ごとに整理したものを掲載する。

なお、主な出典データは下記のとおりである。

人口・高齢化率	住民基本台帳（令和6年1月1日現在）。 静岡県については福祉事務所設置自治体として所管する12町、沖縄県については北部圏域の町村の合計。
支援状況（実績）	令和4年度厚労省提供データ。 就労・増収率以外は、人口10万人あたりの1か月平均。

(1) 北海道小樽市

①基本情報

自治体概要	人口	106,507 人	
	高齢化率	41.6%	
支援状況	新規相談受付件数	16.2 件	
	プラン作成件数	3.0 件	
	就労支援対象者数	1.8 件	
	就労・増収率(%)	91.7%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	直営+委託(小樽市社会福祉協議会)※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(キャリアバンク株式会社)※以下、「キャリアバンク」 ◎生活保護受給者向け事業と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1名(市職員・係長職) 相談支援員:2名、就労支援員:1名(※) ※相談支援員と就労支援員は兼務(生活困窮者自立支援制度以外の他事業との兼務はなし)。上記のほか管理職1名(市)	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:1名(自立相談支援機関に常駐)	
相談窓口(各事業の実施場所)		市役所内の相談窓口(福祉総合相談室「たるさぼ」)に、自立相談支援機関の職員(社協)と就労準備支援事業の職員(キャリアバンク)が常駐	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 制度施行当初、自立相談支援機関を受託していた社協は就労支援の経験が十分ではなかったため、自立相談支援事業の就労支援は別法人に委託していた。生活困窮者支援の実践を重ねる中で、就労支援だけを切り出して別法人に委託することでスムーズにいかない部分が出てきたため、社協に就労支援を含む「自立相談支援事業」を委託する現体制となった。 ● 就労準備支援事業支援員(キャリアバンク)は自立相談支援機関に常駐。 ● 無料職業紹介所を開設。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の相談支援員が就労支援員を兼務。 ● 相談者は、一般就労できる人ばかりではない。そうした人達に対し、社会参加の一つとして仕事をして収入を得ることが、自己肯定感の向上につながる。また、本人の状況に応じて業務を分解するとできる人も多い。企業に対して仕事の切り分けを働きかけ、「対象者はこういうところまでならできる」といったことを理解してもらい、対象者を受入れてもらうための調整も行う。 ● 対相談者・対企業の双方に対してのアクションが就労支援の重要な要素。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談を受けていろいろと提案する中で、すぐに就労ではなく、「少しずつ就労に向けた準備を整えながら(訓練をしながら)できますよ」といったように伝え、選択肢として就労準備支援事業を提示する。その中でやってみようかなという人には、まず見学してもらい、判断・選択してもらおう。 ● 本来は就労準備支援事業の利用がよいのではと支援員が判断しても、本人の主訴として就労を希望する場合、就労に向けた支援を進めてみる。その中でうまくいかないことが出てきた際、あらためて本人と相談しながら就労準備支援事業を利用する、ということもある。 																
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 基本的には集団参加型のメニューが多い。集団生活を苦手とする人も多いため、集団の中での経験を通して自分の得意分野や苦手なところなどに気づいてもらえるように工夫している。 ● プログラムとして、緩急をつけながら肩の力を抜いて、例えばみんなで行うスポーツや、芸術鑑賞、遠足などレクリエーションの要素をもつものも交えながら組み立てる。 ● 就労に向けて、手先の器用さ、集中力がどれだけ続くかなどを把握(アセスメント)するためにもプログラムでの体験が重要。 ● プログラムへの参加の状況、振り返りについては自立相談支援員・就労準備支援事業支援員全体で共有し、担当者が抱え込まないよう課題感の共有や助言を受けられるような環境を意識的に整備している。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="483 1010 1359 1821"> <tr> <td data-bbox="491 1021 671 1093">コミュニケーショントレーニング</td> <td data-bbox="679 1021 1359 1093">朝礼テーマトーク、ボードゲーム、コンセンサス(合意形成)ゲーム、ピプリオバトル(本紹介)、カードゲーム</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1104 671 1272">就労準備セミナー</td> <td data-bbox="679 1104 1359 1272">自己理解、見てみよう履歴書、求人票の見かた、求人検索の仕方、雇用形態って何だろう、ハローワークツアー、履歴書を書いてみよう、やってみよう面接練習、パソコンで文書作成、職場でのコミュニケーション、ビジネスマナーって何だろう、電話対応を練習してみよう、ビジネスマナー「メール編」</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1283 671 1355">ものづくり</td> <td data-bbox="679 1283 1359 1355">ペーパーモビールを作ろう、ちぎり絵、エコクラフト、立体折り紙製作・寄付、羊毛フェルトで動物作り</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1366 671 1485">生活力講座</td> <td data-bbox="679 1366 1359 1485">美文字を目指そう、七夕飾り作り、クリスマス飾り作り、作ってみよう川柳、書道、読み聞かせ、朗読、百人一首、小樽について知ろう「炭鉄港」</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1496 671 1532">共同作業</td> <td data-bbox="679 1496 1359 1532">調理実習</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1543 671 1615">フィールドワーク・社会見学</td> <td data-bbox="679 1543 1359 1615">春を探しにお花見遠足、総合博物館運河館へ行こう、市立図書館へ行こう、美術館特別展観覧、市役所お仕事見学ツアー</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1626 671 1771">就労体験・ボランティア・企業見学</td> <td data-bbox="679 1626 1359 1771">公用車洗車、農業体験、宿泊施設(おたる自然の村)部屋清掃、図書館ボランティア、総合博物館清掃ボランティア、共生カフェ清掃ボランティア、介護予防教室片付けボランティア、高齢者体操教室受付有償ボランティア、合同企業説明会参加、企業見学</td> </tr> <tr> <td data-bbox="491 1783 671 1821">スポーツ</td> <td data-bbox="679 1783 1359 1821">屋内スポーツ、ノルディックウォーキング、歩くスキー、モルック</td> </tr> </table>	コミュニケーショントレーニング	朝礼テーマトーク、ボードゲーム、コンセンサス(合意形成)ゲーム、ピプリオバトル(本紹介)、カードゲーム	就労準備セミナー	自己理解、見てみよう履歴書、求人票の見かた、求人検索の仕方、雇用形態って何だろう、ハローワークツアー、履歴書を書いてみよう、やってみよう面接練習、パソコンで文書作成、職場でのコミュニケーション、ビジネスマナーって何だろう、電話対応を練習してみよう、ビジネスマナー「メール編」	ものづくり	ペーパーモビールを作ろう、ちぎり絵、エコクラフト、立体折り紙製作・寄付、羊毛フェルトで動物作り	生活力講座	美文字を目指そう、七夕飾り作り、クリスマス飾り作り、作ってみよう川柳、書道、読み聞かせ、朗読、百人一首、小樽について知ろう「炭鉄港」	共同作業	調理実習	フィールドワーク・社会見学	春を探しにお花見遠足、総合博物館運河館へ行こう、市立図書館へ行こう、美術館特別展観覧、市役所お仕事見学ツアー	就労体験・ボランティア・企業見学	公用車洗車、農業体験、宿泊施設(おたる自然の村)部屋清掃、図書館ボランティア、総合博物館清掃ボランティア、共生カフェ清掃ボランティア、介護予防教室片付けボランティア、高齢者体操教室受付有償ボランティア、合同企業説明会参加、企業見学	スポーツ	屋内スポーツ、ノルディックウォーキング、歩くスキー、モルック
コミュニケーショントレーニング	朝礼テーマトーク、ボードゲーム、コンセンサス(合意形成)ゲーム、ピプリオバトル(本紹介)、カードゲーム																
就労準備セミナー	自己理解、見てみよう履歴書、求人票の見かた、求人検索の仕方、雇用形態って何だろう、ハローワークツアー、履歴書を書いてみよう、やってみよう面接練習、パソコンで文書作成、職場でのコミュニケーション、ビジネスマナーって何だろう、電話対応を練習してみよう、ビジネスマナー「メール編」																
ものづくり	ペーパーモビールを作ろう、ちぎり絵、エコクラフト、立体折り紙製作・寄付、羊毛フェルトで動物作り																
生活力講座	美文字を目指そう、七夕飾り作り、クリスマス飾り作り、作ってみよう川柳、書道、読み聞かせ、朗読、百人一首、小樽について知ろう「炭鉄港」																
共同作業	調理実習																
フィールドワーク・社会見学	春を探しにお花見遠足、総合博物館運河館へ行こう、市立図書館へ行こう、美術館特別展観覧、市役所お仕事見学ツアー																
就労体験・ボランティア・企業見学	公用車洗車、農業体験、宿泊施設(おたる自然の村)部屋清掃、図書館ボランティア、総合博物館清掃ボランティア、共生カフェ清掃ボランティア、介護予防教室片付けボランティア、高齢者体操教室受付有償ボランティア、合同企業説明会参加、企業見学																
スポーツ	屋内スポーツ、ノルディックウォーキング、歩くスキー、モルック																

自立相談支援事業との役割分担や情報共有等	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業支援員は、自立相談支援事業の相談員と同じスペースに常駐し、日常的に相談員間で情報交換をしている。 ● 定例ミーティングとして週1回ケースの情報共有、プランの確認等、支援調整会議も兼ねて実施しており、これに就労準備支援事業支援員も参加している。 ● ケースによっては早い段階から就労準備支援事業支援員も面談に同席。
----------------------	--

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所数: 10~20 か所程度。職場見学・就労体験先等として協力してくれる企業の業態としては製造業・加工業が多い。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 企業開拓は、基本的には相談支援員(就労支援員を兼務)が行う。これまで就労支援した人のつなぎ先の企業・事業所等を中心に、ある程度、先方も「たるさぼ」の取組を理解し、配慮してくれているところを切り口としている。 ● 広報誌である「たるさぼ通信」※を発行するたびに、メールや郵便等により企業等へ周知している。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 2023(令和5)年度企業開拓(企業数)実績: 連絡(求人問合せ等)23件、訪問(企業見学・面接同行等)15件 ● 企業開拓に取り組んではいるが、業態が偏ってしまっている。 ● 経営者・上層部は理解を示しても、現場に入った際、同僚の方とのハレーションが起きる場合もある。そこで人間関係が悪化して辞める事例が散見される。


※「たるさぼ」の活動内容などを紹介する広報誌を定期的に発行(web サイト: <https://www.city.otaru.lg.jp/docs/2020111500358/>)

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定就労訓練事業所は1社のみ受入実績がある(社会福祉法人が実施しているクリーニング業)。利用は年1件程度であり、なかなか積極的に利用できる状況ではない。 ● 事業所内に就労支援担当者はいる。担当者との連絡調整等の頻度は高くはないが、何かあったときに対応をとる連絡先の位置づけ。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● 今後、認定就労訓練事業所を広げたいと考えているが、こちらから法人にメリットを提示することができない。1社の認定就労訓練事業所も障害者の利用と混合する形で受入れてもらっている。 ● Win-Win の関係で提案したいが、社会貢献の文脈でしか語れず難しい。

(2) 東京都豊島区

①基本情報

自治体概要	人口	291,650 人	
	高齢化率	19.4%	
支援状況	新規相談受付件数	32.6 件	
	プラン作成件数	14.6 件	
	就労支援対象者数	12.8 件	
	就労・増収率(%)	46.6%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(豊島区民社会福祉協議会、NPO 法人インクルージョンセンター東京オレンヂ)※以下、「社協」「オレンヂ」	
	就労準備支援事業	委託(オレンヂ)	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1 名 相談支援員:5 名 就労支援員:3 名	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:2 名	
相談窓口(各事業の実施場所)	区役所内に、区役所職員、社協職員、オレンヂ職員が隣席で配置		

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の就労支援員は、就労準備支援事業の委託先であるオレンヂが受託。 ● 自立相談支援事業の相談支援員(主任含む)、就労支援員、就労準備支援事業支援員の全員(委託先である社協、オレンヂの職員)が区役所内にある「くらし・しごと相談支援センター」(自立相談支援機関の窓口)に常駐。 ● チームによる支援に重点を置き、事業ごとの役割分担ではなく並行して各支援員が動くイメージ。(フェーズに応じてグラデーションのある関わり方) ● オレンヂは有料職業紹介事業の許可を受けている。企業開拓を行う中で、就労体験等を受け入れてくれる企業も一体的に開拓しており、そこでそのまま就職する事例も多い。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の相談支援員は社協、自立相談支援事業の就労支援員はオレンヂと分かれている。就労支援員は企業とのパイプがあり、単に就労先となる企業を見つけるだけでなく、企業との調整(働き続けるための環境調整)ができることが強み。 ● オーダーメイドで本人の希望に合った企業を探してくるのが基本。自立相談支援事業の就労支援員として把握している企業・事業所等に合致する人もいるが、合致しないニーズもあり、その場合は新たに開拓・調整する。 ● 自らインターネット等で検索することやハローワークで仕事探しをするといった一般的な就職活動では仕事が決まらず生活に困窮した人が相談にきている。単に一般の求人紹介やハローワークにつなげるだけでは課題の解決に至らず、その困っている相談に寄り添う。 ● 働くことで感じるであろう会社や社会に対しての不安を、どのように取り除くことができるかは、プロの視点で見ないと分かりにくい。本人自らが会社と交渉することは難しいことが多いため、就労支援員がいる。

③就労準備支援事業について

事業の利用の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ● 基本的には自立相談支援員が初回相談を受け、アセスメントを行い、本人の課題やニーズを一緒に考えながらプランを立てる。 ● 自立相談支援機関に就労準備支援事業支援員が常駐しているため、特に就労準備支援事業のプランが必要と思われる方は、支援調整会議を経る前に情報共有し、就労準備支援事業支援員に相談に同席してもらう。目標を立てるところから一緒に取り組み、どのようなプランにしたらよいか協力しながら組み立てる。(就労準備支援事業のプランを立てる時はほぼ同席) ● 就労準備支援事業というメニューがあることを本人に説明し、利用の希望があれば「次から就労準備支援事業支援員も同席してもよいか」同意を取り、就労準備支援事業支援員に同席してもらう。 						
支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等	<ul style="list-style-type: none"> ● いわゆる居場所やスペースのようなものはない。カウンターと面談室、区役所の会議室が主な活動場所になる。 ● 従来からオーダーメイドメニューの作成を支援手法として確立してきている。利用者の数＝メニュー数。 ● 就労準備支援事業は、準備という言葉に抵抗を持つ人もいる。そのため、支援(事業)内容を説明する際には、「就労準備・社会参加支援事業」として伝えている。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="483 954 1359 1211"> <tr> <td data-bbox="483 954 679 1070">セミナー</td> <td data-bbox="679 954 1359 1070">面接対策メイク講座、面接・履歴書セミナー、PC 講習、接客マナー講座、賃貸物件内見体験セミナー、コミュニケーション講座、調理実習 等</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1070 679 1160">社会参加</td> <td data-bbox="679 1070 1359 1160">ゴミ拾い&映画鑑賞ボランティア、ふくし健康まつり、にゅ～盆踊り、子供服仕分けボランティア 等</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1160 679 1211">その他</td> <td data-bbox="679 1160 1359 1211">ひきこもり交流ノート、部活動 等</td> </tr> </table>	セミナー	面接対策メイク講座、面接・履歴書セミナー、PC 講習、接客マナー講座、賃貸物件内見体験セミナー、コミュニケーション講座、調理実習 等	社会参加	ゴミ拾い&映画鑑賞ボランティア、ふくし健康まつり、にゅ～盆踊り、子供服仕分けボランティア 等	その他	ひきこもり交流ノート、部活動 等
セミナー	面接対策メイク講座、面接・履歴書セミナー、PC 講習、接客マナー講座、賃貸物件内見体験セミナー、コミュニケーション講座、調理実習 等						
社会参加	ゴミ拾い&映画鑑賞ボランティア、ふくし健康まつり、にゅ～盆踊り、子供服仕分けボランティア 等						
その他	ひきこもり交流ノート、部活動 等						
自立相談支援事業との役割分担や情報共有等	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員や就労準備支援事業支援員として本人との関係性を築いていくことが重要だが、その前に、まず相談支援員がしっかり相談者の困りごとをつかんでいないと事業の利用につながらない。 ● 就労支援員は、就労準備支援事業を利用しないケースであっても就労準備支援事業のような関わりをすることもある。自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業の線引きは難しい。 						

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所数:約 30 か所。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の就労支援員が企業開拓を担う。就労支援員は本人と繰り返し面談を行うため、希望に沿った体験・見学先があれば調整し、個別に準備していく。 ● 就労体験を受け入れてもよいという会社を予め集めていても、本人の希望と合うかどうかはわからない。紹介して本人が「行ってみたい」と意欲を示し、いざ行ってみると、はまらないこともある。 ● 個々の希望に合ったところを探してくるのが基本。また、自分たちが抱える求人ストックの中に本人の要望に沿った職場見学・体験ができそうなところがあれば提案し、希望があれば調整する。場合によっては業務内容をあらかじめ調整することや、職場見学・体験を行う担当者を指定させてもらうこともある。


	<ul style="list-style-type: none"> ● 満員電車に乗ることが難しい方であれば、(混雑時でも空いている)下り路線で見学先を考える、現場で高圧的な人がいないかなど雰囲気を見させてもらうなど。企業とのやり取りを密にしている。 ● 自分たちのストックに合致しないニーズもある。その時は新たに企業開拓に動く。例えば、相談者と一緒に商店街を歩いて「出ていた求人が面白そうだね」、「ちょっと今聞いてくるよ」と飛び込みで開拓することもある。 ● 就労体験はやりっぱなしではよくなく、支援員のフォロー(振り返り)とセットであるべき。8割できていても2割の失敗の方を見ってしまう方が多い。1日の業務はほとんど問題がなかったものの挨拶でどもってしまったという点で「失敗」と思ってしまうこともある。本人はそのまま家に帰ると不安感が増してしまうため、そうならないためにも振り返りは必要。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人の状況・ニーズにあわせて紹介先を作っていくのが豊島区の特徴。 ● ハローワークの方が圧倒的に求人は多いが、求人数が多いことが重要なのではなく、その人に合った一個の求人が重要。ハローワーク側が企業側にコンタクトし、「求人情報にもっとこういう条件をつけられないか」といった調整を行うことは難しい。しかし、条件一つ違うだけで、働き続けられたり、あるいは働き続けられなかったりする。 ● 一般就労で活動してきたがなかなか決まらない場合、その原因を相談者と一緒に探し、抱える課題を少しでも減らすことができれば継続就労の可能性が高まる。なかなか一歩踏み出すことができない人の不安に寄り添い、つまずきの原因をともに考え、不安が軽くなるよう企業に対して調整を働きかける。 ● 企業が求人を出すと不特定多数の応募がくるが、その全てに対応することは困難である。就労支援員は、本人との信頼関係も構築しており、その特性も把握しているため、企業側の採用ニーズともマッチングしやすい。個別求人開拓の内定率は90%以上である。 ● 実際に働いてみると、入社前後で企業に対するイメージが変わることも多い。職場内での人間関係が就労継続に及ぼす影響は大きいため、指導担当者となる人と可能な限りお話をさせていただく。また、座席や電話の位置、本人が持病や身体障害を抱えている場合は床の素材や段差等も確認する。

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 2022(令和4)年度は認定就労訓練事業の利用が1件。相談者のニーズとして、一つの企業に何か月か長期に就労体験したいということであった。普段協力してもらっている(認定就労訓練事業所ではない)企業では、体験する期間が長くなることで、受入れの趣旨と合わず、当該企業の負担が大きいと、認定就労訓練事業の方が使いやすいのではないかということで、一覧から選んでもらった。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定を受けている事業所が介護施設など業種の偏りがある。就労訓練をしたいという人は、ある程度希望の職種があるはずだが、本人のニーズに合わない。 ● 大きい法人の事業所となると、担当の方と現場の意思疎通が難しい。上層部に理解があっても、現場としては「どうして(対象者を)受け入れなくてはいけないのか」と両者の意識に乖離があることも多く、結果として訓練を利用した本人が居づらくなり傷ついて帰ってくることもあった。 ● 業務のどこをどう切り分けて、どのような仕事をお願いするか、有償か・無償か、個々のケースでかなり深く話をする必要があり、書式一つとってもノウハウがないとなかなか難しい。

(3) 岡山県倉敷市

①基本情報

自治体概要	人口	475,914 人	
	高齢化率	27.9%	
支援状況	新規相談受付件数	208.2 件	
	プラン作成件数	68.4 件	
	就労支援対象者数	61.6 件	
	就労・増収率(%)	57.2%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(社会福祉法人めやす箱)※以下、「めやす箱」	
	就労準備支援事業	委託(NPO 法人 One)※以下、「One」 ◎生活保護受給者向け事業と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1 名 相談支援員:5 名 就労支援員:3 名(キャリアコンサルタント、社会福祉士の有資格者)	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:3 名	
相談窓口(各事業の実施場所)		倉敷駅近隣に自立相談支援機関の窓口、就労準備支援事業所は倉敷駅から1駅離れたところに立地(市役所庁舎とは別に立地)	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援機関の窓口「倉敷市生活自立相談支援センター」において、無料職業紹介所を開設。 ● 就労準備支援事業の委託先事業所は、1駅ほど離れているため、自立相談支援機関との行き来は車。相談者を乗せることもある。 ● 距離が離れているが、担当者同士での情報共有は電話などで密にしている。 ● これまでの支援の積み重ねから、行政、自立相談支援機関、就労準備支援事業所の上に壁がなく、本人に対し、どのような支援を展開していくかを一緒に考え、連携しやすい雰囲気ができている。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員は、キャリアコンサルタントや社会福祉士等の有資格者。 ● 就労支援員の業務として、無料職業紹介による事業所の開拓を含め、こちらから企業に出向き、今ある仕事を切り分けてもらう。この部分であればこの人はできるかもしれないなど、訪問・提案しながら企業にアプローチしている。 ● 相談者が就職した企業も多く、そうしたところに定着支援として状況を聞きに行くなど企業とのつながりは常に作るようにしている。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業から就労準備支援事業につなぐ際は、自立相談支援事業の支援員がインタビュー・アセスメントし、就労準備支援事業の利用が必要ではないかと思われる場合、Oneより事業説明をしてもらう。本人がそれを聞いた上で興味を持ち、利用したいということであればつなぐ。また、自立相談支援事業の支援員によりチェックリストをつけていく。 ● 自立相談支援機関と就労準備支援事業所が少し離れていることもあり、初回面談のアセスメントの時に、就労準備支援事業支援員が同席することはない。就労準備支援事業の利用提案に対して本人が興味を持った場合、2回目以降同席をお願いする。 ● Oneは、自主事業としてひきこもり支援センターを開設していることもあり、直接の相談もある。そこから自立相談支援事業につなぐケースもある。 ● エリアが広いと、アクセス性を考慮し、対象者がより身近な場所で相談できるよう、市役所の支所や公民館などで面談室を借りることもある。 				
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 今月のプログラムという形で。プログラム名やボランティア活動の予定などが書かれたスケジュール表を配布して参加希望を確認し、翌月の予定を立てる。 ● プログラムの実施場所として、就労準備支援事業所や受託法人の本部があるところで集まることもあるが、プログラムの活動場所(ボランティア等)は市内に点在している。交通の便が悪い人もいるため、現地集合のほか、スタッフが車で各地域を回って利用者に同乗してもらい、一同に集まって参加することもある。 ● 合併して5つの圏域がある(エリアは大小さまざま)。移動が大変なため、なるべく自力で通える地域(各エリア)に面談やボランティア活動など社会参加のための場所を作ってきた。 ● 利用者がやらされるのではなく、自分たちで考えるプログラムや、テーマとして連続性のあるプログラムを意識的に設定している。 ● 自信を失っていたり非常に傷ついたりするような人が多く、既存のハローワークや各種相談機関でうまくいかなかった経験をしており、就労を前面に押し出していくと難しい。 ● それよりも、その方がどうしたら元気になるのか、何に関心があるのか、何に興味があるのかをできるだけ一緒に考えてそれを教えてもらうというスタンス。本人と一緒にその体験をしてみる、その場所に行ってみるなど。例えば料理を作るのが好きということであれば一緒に料理を作ってみるなど、就労とはあまり関係ないと言われるところもあるが、その人が何に関心があって、何にどのような価値観があるのかを知ろうとするためには会議室で面談しているだけではわからないものが多い。そういうものをやればやるほど時間がかかる。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="483 1570 1359 2027"> <tr> <td data-bbox="483 1570 676 1653">個別支援</td> <td data-bbox="676 1570 1359 1653">出張相談、関係機関との連携、企業開拓・見学体験同行、病院受診同行、食料提供支援、職場定着支援 等</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1653 676 2027">ベーシックプログラム</td> <td data-bbox="676 1653 1359 2027"> <ul style="list-style-type: none"> ○ビジネス(面接練習や履歴書の書き方など仕事に必要な基礎を身に付ける) ○フィールド(行ったことのないところへ行ってみる) ○やってみよう(やったことのないことをやってみる) ○コミュニケーション(グループワークなどを通じてコミュニケーション能力を高める練習をする) ○外部講師(その道のプロフェッショナルに触れてみる) ○体力(仕事に必要な体力を身に付ける) </td> </tr> </table>	個別支援	出張相談、関係機関との連携、企業開拓・見学体験同行、病院受診同行、食料提供支援、職場定着支援 等	ベーシックプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ○ビジネス(面接練習や履歴書の書き方など仕事に必要な基礎を身に付ける) ○フィールド(行ったことのないところへ行ってみる) ○やってみよう(やったことのないことをやってみる) ○コミュニケーション(グループワークなどを通じてコミュニケーション能力を高める練習をする) ○外部講師(その道のプロフェッショナルに触れてみる) ○体力(仕事に必要な体力を身に付ける)
個別支援	出張相談、関係機関との連携、企業開拓・見学体験同行、病院受診同行、食料提供支援、職場定着支援 等				
ベーシックプログラム	<ul style="list-style-type: none"> ○ビジネス(面接練習や履歴書の書き方など仕事に必要な基礎を身に付ける) ○フィールド(行ったことのないところへ行ってみる) ○やってみよう(やったことのないことをやってみる) ○コミュニケーション(グループワークなどを通じてコミュニケーション能力を高める練習をする) ○外部講師(その道のプロフェッショナルに触れてみる) ○体力(仕事に必要な体力を身に付ける) 				

	企業訓練	<p>○ボランティア・公民館や神社での清掃、竹割り、ホームセンター駐車場清掃 等</p> <p>○有償活動・デリーパーキング(コインパーキングの違反車両の確認及び清掃)、コマッチング(特定地域の高齢者の困りごとをサポート。草取り、清掃、ゴミ捨て等)、洗車(介護施設の公用車を洗車)、チラシ配り(企業から請負)</p>
自立相談支援事業との役割分担や情報共有等		<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業における企業開拓は、無料職業紹介事業でのマッチング先としての企業を増やしていく趣旨で行っており、就労準備支援事業の見学・体験先の企業とはあまり被らない。

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

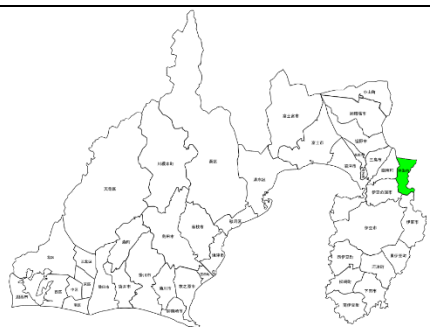
就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所数:約 380 か所(就労準備支援事業内の累積、現在受け入れしていない事業所等も含む。主な職種は製造業、倉庫内作業、介護、清掃、販売等。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● (自立相談支援事業の就労支援として)企業側に仕事を切り出してもらおうという意図で、就労支援員が企業側へアウトリーチしていく。 ● 就労準備支援事業のメニューの中でほとんどの人が利用するプログラムは「職場見学」。企業への見学の後、中には体験もしたいという人もあり、長年取り組んできた中で蓄積された。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 体験してから就労する人が半数。かなりブランク期間がある人もいるため、会社としても面接だけで本人を採用するかどうか判断することが難しい。企業側には実際に働いている姿を見て判断できるというメリットの部分をお伝えし、利用者にはブランク期間を埋めるために何日間か体験してみることが可能ということや、履歴書では書ききれないような部分を企業側に評価してもらい、その上で就職する方が安心につながるのではないかと、といったことを提案する。 ● 企業と本人の双方が合意の上で就職する方が、その後も長く働き続けられる可能性があり、これをスタンダードな方法にしている。

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内に 34 か所の認定就労訓練事業所があるが、利用はあまり伸びていない。 ● 就労準備支援事業が充実しているため訓練を使うという選択肢があまりない。自立センターに仕事の相談に来る人には、困窮しているからすぐお金が欲しいという人と、仕事探しに何らかのハードルを抱えている人に分かれ、後者の場合、就労訓練事業も選択肢にあがってくるが、就労準備支援事業の支援メニューが充実しているため就労準備支援事業を選択することが多い。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● 企業から見ると認定を受けるための申請が大変。また、非雇用型で何か月も訓練するという想定は、本人からすると経済的に余裕がなく厳しい。雇用型の場合、今度は企業が雇用形態と賃金の捻出をどうするか必ず悩む。企業側に一部委ねられる面もあり、その問題の解消は我々ではなかなかできない。 ● そのため、体験や実習を受け入れてくれる企業を、就労訓練事業ではなく就労支援や就労準備支援事業の一環として探していく方が、就労訓練事業の計画作成や、非雇用型・雇用型それぞれで確認や契約するなどの手間を省くことができる。 ● 中間的就労として積極的に推進できていないことが課題だが、自立相談支援事業の就労支援や就労準備支援事業である程度カバーができていて、いろいろなメニューがあり、現状のもので間に合っているということが大きい。

(4) 静岡県熱海市

①基本情報

自治体概要	人口	33,934 人	
	高齢化率	48.7%	
支援状況	新規相談受付件数	34.4 件	
	プラン作成件数	23.2 件	
	就労支援対象者数	18.2 件	
	就労・増収率(%)	5.3%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(熱海市社会福祉協議会)※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡) ※以下、「ネットワーク静岡」 ◎生活保護受給者向け事業と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:3 名 相談支援員:2 名 就労支援員:2 名 ※明確に区別して支援をしているわけではない	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:1 名(他地域の就労準備支援事業の支援員も兼務)	
相談窓口(各事業の実施場所)		市役所に隣接する庁舎に社協・自立相談支援機関の相談窓口があり、そこに就労準備支援事業支援員が毎週金曜に勤務	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協の中に相談窓口を設置し、就労準備支援事業支援員は原則週1回自立相談支援機関に勤務。ただし、ケースに応じて柔軟に対応している。(定例の曜日以外も来訪するほか、随時電話で相談等) ● 自立相談支援事業の相談支援員によるアセスメントの結果、就労支援が必要な人のうち概ね 8 割は就労準備支援事業につながり、残りの 2 割は自立相談支援事業の就労支援で対応している。自立相談支援事業による就労支援は、介護分野での経験が長かった職員のネットワークを活かした支援が中心であるが、マッチングにあたっては職員のネットワークをフル動員する。 ● 行政の担当課(社会福祉課生活保護室)が、ある程度任せてくれ、また、委託先の各機関と市とが相談しやすい環境を作ってくれている。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業が個別的な就労の相談に対し、求人開拓やマッチング、職場見学・体験等の受入れ調整を担い、企業開拓や介護分野での就労支援に関しては自立相談支援事業の就労支援(相談支援員兼就労支援員)も担当しているが、役割を厳密に区分しているわけではない。 ● 社協と就労準備支援事業者が異なるが、制度創設時以来からの連携であり、時間をかけてチームが醸成されてきている。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 熱海市では支援を受ける側からは「就労準備支援事業」を利用しているという認識がないと思われる。就労を主訴として、ハローワークにつなぐだけでは仕事に就くことが難しい人に対しては、「仕事の相談に乗ってくれる方がいるから金曜日に来てみませんか」といったことをお伝えし、就労準備支援事業の利用につなげている。 ● インテークの面談を踏まえて就労準備支援事業の利用がよいと思われる場合には、2回目の面談を金曜日に合わせて設定するケースが多い。金曜日まで待てないようであれば支援員と連絡をとり、金曜日以外に面談ができるよう調整することもある。 ● 生活の困りごとが就労により解決される部分があれば、就労準備支援事業につないでいくイメージ。
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 支援メニューの一覧を用意しているわけではなく、個別に提案している。 ● 就労準備支援事業支援員は、就労体験等を受入れてくれる企業の開拓や企業との直接のやり取りを担い、それをもとに本人や企業、自立相談支援機関との連絡のハブになっている。 ● 相談者は、慣れない社協や市役所に来ること自体が不安なため、まず話を聞いてその人のことをよく理解して寄り添い、安心させることを心がけている。 ● 就労準備支援事業であってもアセスメントを重視している。自宅に訪問し、部屋の整理状況を含めて観察することもある。 <p>【主なプログラム内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 就労体験、ハローワークへの同行、関係団体、ボランティア等のネットワークにつなぐ、履歴書の作成支援、面接の練習、就労面接への同行、就労セミナーの開催(年2回、所属団体主催のもの)。就労セミナー以外は、個別に対応するものがほとんど。 ● ハローワーク同行、面接同行なども積極的に行っている。
<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の相談支援員によるアセスメントの結果、就労支援が必要な人のうち概ね8割は就労準備支援事業につながり、残りの2割は自立相談支援事業の就労支援で対応している。自立相談支援事業による就労支援は、介護分野での経験が長かった職員のネットワークを活かした支援が中心であるが、マッチングにあたっては職員のネットワークをフル動員する。(再掲)

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

<p>就労体験等の協力事業所</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内のスーパー、ホテル等15か所程度。
<p>取組方法/工夫点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所の中には派遣会社もあり、その派遣会社を通じてさらに多くの事業所(登録企業)ともつながっている。 ● (就労準備支援事業に限らず協力事業所の開拓については)生活困窮者自立支援制度の担当に限らず社協職員に対し、「こういう利用者がいてこういう作業をもらえるところはないか」と呼びかけて探す。利用者がどのくらい手際がよくできるか分からないため、こちらから納期を厳密に設定しないことや、質は担保できないことなどある意味「わがままなお願い」が前提となる。あくまでも、対象者の特性が見えてから募集する。
<p>企業開拓とマッチング</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 個々の特性に合わせて熱海市内でその方にフィットするような体験先や就労先を少しずつ見つけていく。 ● どこまで本格的に企業開拓してよいか、バランスが難しい。以前、ある企業から清掃の仕事の相談があった際、そのタイミングで就労体験につながるような

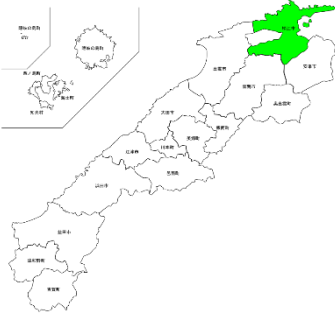
	<p>人がいなかった。開拓すればいいわけではなく、逆に迷惑をかけてしまうこともある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 相談支援員である社協職員 1 名は重層事業の担当でもある。重層事業の関係で商工会議所に行き、社会参加の一環として仕事の切り出しについて相談している。
--	---

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協が認定就労訓練事業所の認定を受けており、非雇用型(報酬の財源は赤い羽根共同募金)により、内職などの軽作業を行っている。訓練という趣旨のほか、すぐにお金が必要な人で、独自の給付では足りないような場合において活用している。市内の業者から、例えばケーキの箱折の仕事をもらい、1時間 500 円、4時間で 2,000 円程度。それで電気代を払うということもある。 ● 商工会議所経由で焼き鳥屋の就労訓練から一般就労に至ったケースも1件あった。 ● 就労準備支援事業の前に就労訓練事業を実施するケースの方が多い。例えば、ひきこもり期間が長かった人に、少し内職の作業をしてもらい、訓練の場で観察するという使い方。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● どこまで本格的に企業開拓してよいか、バランスが難しい。以前、ある企業から清掃の仕事の相談があった際、そのタイミングで就労体験につながるような人がいなかった。開拓すればいいわけではなく、逆に迷惑をかけてしまうこともある。(再掲)

(5) 島根県松江市

①基本情報

自治体概要	人口	196,021 人	
	高齢化率	30.5%	
支援状況	新規相談受付件数	20.3 件	
	プラン作成件数	4.8 件	
	就労支援対象者数	1.8 件	
	就労・増収率(%)	60.5%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(松江市社会福祉協議会) ※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(社協) ◎生活保護受給者向け事業と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1名 相談支援員:4名、就労支援員:1名(※) ※相談支援員と就労支援員は兼務	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:1名 ※自立相談支援事業の相談支援員と兼務	
相談窓口(各事業の実施場所)		市役所から車で数分の社協の相談窓口(松江市暮らし相談支援センター)	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の相談支援員と就労支援員とは役割を明確に分けていない。就労準備支援事業支援員とも同様に明確な区別はない。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 一足飛びに就労に向かう人は少なく、本人の状況を見ながらスタッフ間の意識合わせを行い、支援方針を立てている。 ● 貯蓄も当座の生活費もなく生活に苦しいということになれば、生活保護を含め、本人の状況や仕事・暮らしに関する意向等を確認しながら対応していく。 ● 働きたいという明確な目標が見えると、就労に向かっていくこともあるが、その人の特性(ひきこもり、就労していない期間が長い、意欲のみが先行している等)に応じて、地域の社会参加の取組やボランティア活動等につなぎながら、就労支援のプランを組み立てるということもある。

③就労準備支援事業について

事業の利用の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の就労支援員と就労準備支援事業支援員の役割を明確に分けていないが、相談員同士で意識合わせをしながら対象者の特性を踏まえて支援メニューを組み立てていく。 												
支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等	<ul style="list-style-type: none"> ● 他者との交流を通じた集団型のプログラムや居場所などの社会参加の場などを就労準備支援事業のメニューに位置づけている。 ● 「就労準備講座」は年に3回実施。紹介するタイミングでその時期に講座がなければすぐに参加することはできないが、より気軽に立ち寄り、いつ帰ってもいいような形で Assist！（アシスト）を開催。少人数で、集団になかなかなじめないような人へのアプローチの一つの手段としている。 ● 個別支援プログラムでは、例えばバスの乗り方がわからない人に同行してバスの乗り方を覚えてもらうといった活動を試行錯誤中。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1"> <tr> <td>就労準備講座</td> <td>①体操講座 ②パステルアート講座 ③コミュニケーション講座 ④ビジネスマナー講座 ⑤調理教室 を実施</td> </tr> <tr> <td>職場体験</td> <td>半日×5日間程度実施</td> </tr> <tr> <td>くらしパソコンルーム</td> <td>Excel、Word、PowerPoint の学習(自習)、賃貸物件、地図情報の検索 など</td> </tr> <tr> <td>個別支援プログラム</td> <td>就労に向けた生活スキル獲得の為に各種プログラムを個別に実施</td> </tr> <tr> <td>Assist！みんなのフリースペース（月1回＋随時）</td> <td>就労準備講座への参加ステップとして用意、エコクラフト、マーブリング、調理などを実施</td> </tr> <tr> <td>専門職相談</td> <td>外部の臨床心理士相談(個別/ケース検討)、キャリアコンサルタント相談(個別)など(年10件程度)では自己理解の促進を図る</td> </tr> </table>	就労準備講座	①体操講座 ②パステルアート講座 ③コミュニケーション講座 ④ビジネスマナー講座 ⑤調理教室 を実施	職場体験	半日×5日間程度実施	くらしパソコンルーム	Excel、Word、PowerPoint の学習(自習)、賃貸物件、地図情報の検索 など	個別支援プログラム	就労に向けた生活スキル獲得の為に各種プログラムを個別に実施	Assist！みんなのフリースペース（月1回＋随時）	就労準備講座への参加ステップとして用意、エコクラフト、マーブリング、調理などを実施	専門職相談	外部の臨床心理士相談(個別/ケース検討)、キャリアコンサルタント相談(個別)など(年10件程度)では自己理解の促進を図る
就労準備講座	①体操講座 ②パステルアート講座 ③コミュニケーション講座 ④ビジネスマナー講座 ⑤調理教室 を実施												
職場体験	半日×5日間程度実施												
くらしパソコンルーム	Excel、Word、PowerPoint の学習(自習)、賃貸物件、地図情報の検索 など												
個別支援プログラム	就労に向けた生活スキル獲得の為に各種プログラムを個別に実施												
Assist！みんなのフリースペース（月1回＋随時）	就労準備講座への参加ステップとして用意、エコクラフト、マーブリング、調理などを実施												
専門職相談	外部の臨床心理士相談(個別/ケース検討)、キャリアコンサルタント相談(個別)など(年10件程度)では自己理解の促進を図る												
自立相談支援事業との役割分担や情報共有等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業と一体で行っており、明確な区分はない。 												

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● スーパーマーケット(品出し等)、社会福祉法人(掃除等環境整備)、農園など職場体験等の企業60か所(累計)。 ● 社協として企業ボランティアが60社程度あり、事業を説明している。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 例えば、相談者が車関係の仕事を希望する場合には、顔のわかるディーラーのところをお願いする、保育士になりたいと言えば保育所に行き話をするなど、飛び込みというより、もともとつながっているところをお願いに行く。 ● これまでにつながりのある企業に相談することが多く、つながりが全くなければ新たに飛び込みで開拓に行くということもある。 ● 就労体験などを受入れてもらう際には、対象者の情報を伝えプロフィールシートや計画書、日誌、評価書などを作成しており、それらに基づいて、自立相談支援機関と受入企業とのやり取りをしている。職場体験の受入先事業所からも報告書を提出してもらっている。(認定就労訓練事業とは別のものとして位置づけている)

※フォーマット(職場体験計画表・評価表)																																																																																																																																								
	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p style="text-align: center;">職場体験日誌</p> <p>月 日 () 氏名: _____</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th>時間</th> <th>体験内容</th> </tr> <tr> <td><午前></td> <td></td> </tr> <tr> <td><午後></td> <td></td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">振り返りシート</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th>項目</th> <th>達成状況</th> <th>感想</th> </tr> <tr> <td>選別・検査・包装ができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>包装状況が業務への変更をきたさなかったか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>包装に合わせた身だしなみが出来たか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>相手や職に合わせた挨拶ができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>指示通りに仕事をすることができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>必要時に自分から質問や連絡・報告ができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>作業(作業開始時間、休憩時間等)を守ることができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>他の人と協力しながら作業ができたか</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">署名</p> <p style="text-align: right;">担当部署サイン</p> </div> <div style="width: 50%;"> <p style="text-align: center;">職場体験評価票</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th>体験先</th> <th>事業所名</th> <th colspan="4">企業用</th> </tr> <tr> <td>ご担当者様</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>体験者氏名</td> <td></td> <td>期間</td> <td>～</td> <td>年 月 日</td> <td></td> </tr> <tr> <td>体験内容</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <td>本人目標</td> <td colspan="5"></td> </tr> <tr> <th colspan="2">チェック内容</th> <th colspan="4">チェック欄</th> </tr> <tr> <td>正当な理由なく遅刻・早退・欠勤をしなかったか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>身体前・精神的な健康状態が業務への変更をきたしていないか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>服装に合わせた身だしなみができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>相手や職に合わせた挨拶ができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>指示通りに仕事をすることができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>必要時に自分から質問・連絡・報告ができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>時間(作業開始時間、休憩時間等)を守っていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> <tr> <td>作業を協力して共同作業ができていたか</td> <td>4</td> <td>3</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> </tr> </table> <p style="font-size: small;">* 4: できた、3: ほぼできた、2: ややできた、1: できなかった、0: 評価しない</p> <p>できたこと</p> <p>気になったこと</p> <p>その他</p> </div> </div>	時間	体験内容	<午前>		<午後>		項目	達成状況	感想	選別・検査・包装ができたか			包装状況が業務への変更をきたさなかったか			包装に合わせた身だしなみが出来たか			相手や職に合わせた挨拶ができたか			言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができたか			指示通りに仕事をすることができたか			必要時に自分から質問や連絡・報告ができたか			作業(作業開始時間、休憩時間等)を守ることができたか			どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか			他の人と協力しながら作業ができたか			体験先	事業所名	企業用				ご担当者様						体験者氏名		期間	～	年 月 日		体験内容						本人目標						チェック内容		チェック欄				正当な理由なく遅刻・早退・欠勤をしなかったか	4	3	2	1		身体前・精神的な健康状態が業務への変更をきたしていないか	4	3	2	1		服装に合わせた身だしなみができていたか	4	3	2	1		相手や職に合わせた挨拶ができていたか	4	3	2	1		言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができていたか	4	3	2	1		指示通りに仕事をすることができていたか	4	3	2	1		必要時に自分から質問・連絡・報告ができていたか	4	3	2	1		時間(作業開始時間、休憩時間等)を守っていたか	4	3	2	1		どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか	4	3	2	1		作業を協力して共同作業ができていたか	4	3	2	1	
時間	体験内容																																																																																																																																							
<午前>																																																																																																																																								
<午後>																																																																																																																																								
項目	達成状況	感想																																																																																																																																						
選別・検査・包装ができたか																																																																																																																																								
包装状況が業務への変更をきたさなかったか																																																																																																																																								
包装に合わせた身だしなみが出来たか																																																																																																																																								
相手や職に合わせた挨拶ができたか																																																																																																																																								
言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができたか																																																																																																																																								
指示通りに仕事をすることができたか																																																																																																																																								
必要時に自分から質問や連絡・報告ができたか																																																																																																																																								
作業(作業開始時間、休憩時間等)を守ることができたか																																																																																																																																								
どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか																																																																																																																																								
他の人と協力しながら作業ができたか																																																																																																																																								
体験先	事業所名	企業用																																																																																																																																						
ご担当者様																																																																																																																																								
体験者氏名		期間	～	年 月 日																																																																																																																																				
体験内容																																																																																																																																								
本人目標																																																																																																																																								
チェック内容		チェック欄																																																																																																																																						
正当な理由なく遅刻・早退・欠勤をしなかったか	4	3	2	1																																																																																																																																				
身体前・精神的な健康状態が業務への変更をきたしていないか	4	3	2	1																																																																																																																																				
服装に合わせた身だしなみができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
相手や職に合わせた挨拶ができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
言葉、上声と円滑な会話・挨拶ができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
指示通りに仕事をすることができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
必要時に自分から質問・連絡・報告ができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
時間(作業開始時間、休憩時間等)を守っていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
どんな作業にも自分から積極的に取り組めたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
作業を協力して共同作業ができていたか	4	3	2	1																																																																																																																																				
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 企業開拓については対象者の希望や特性に応じて、支援員や社協としてのネットワークを活用している。 																																																																																																																																							


⑤認定就労訓練事業

利用状況	<p>(企業組合しまね就労福祉事業団)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 企業組合しまね就労福祉事業団(以下「事業団」)は 2016(平成 28)年より認定を受け、昨年度で 48 名受け入れている。8 割が生活保護受給者で、2 割が生活困窮者自立支援制度からの紹介。多くの人が、訓練後、就労につながり、離職率も低い。 ● 自立相談支援機関からの就労訓練事業の依頼は断らないことをモットーとしている。 ● 事業団として市内の総合病院の清掃等の業務を請け負っており、65 名の職員が従事、そこに清掃や警備など7つ程度のプログラムを設定し、訓練を受け入れている。基本的に病院からの委託は民間契約であり、訓練の受け入れに関する補助金はなく、事業団が本人の報酬等を支払っている。その他病院以外では行政からの委託もある(古墳発掘など)。 ● 受け入れに関する事業団の支援員は、障害者職業センターでの就労支援に関する研修を受講した 2 名(うち1名が所長)が担当。訓練中にも訪問を行い利用者とは話をしながら個々に対応した就労先を選ぶ。相手に話をさせるのが支援員の仕事と認識しており、過去に振り返って、実際に楽しく本音を喋ってもらい、初めて聞くようなことを引き出していく。また、現場で本人を見るメンター的な人もいる。 ● 家計表をつくるなど家計改善に向けてのサポートや、相続手続きのため司法書士や税理士との情報提供を行うこともある。 ● 支援期間としては、短い人は1週間程度で、中には2年以上の人もおり、そのまま事業団に就職する人もいる。 ● 訓練に先立って本人のプロフィールシートを事前にもらう(支援調整会議前のこともある。そのときは本人同意を得る)。社協と福祉課と本人の三者で共有できるスキームができていく。 ● 県内の企業はつながりのあるところも多く、就労訓練を受けた後に、事業団以外の企業・事業所に一般就労するところまでフォローしている。 ● フードバンクと協力し、必要に応じて食料支援も実施している。
------	--

課題等	<p>(事業団)</p> <ul style="list-style-type: none">● 信頼関係を構築するためには、本人との会話が重要と認識している。ただし、会話のキャッチボールができない人や、対人関係にネックを持つ人の場合、信頼関係を築くのが難しく、そうした人との対応が課題。● 最終的には生活困窮者、生活保護受給者の自立のために、もう少し自立相談支援機関と認定就労訓練事業者がより一層密に連携できるとよい。
-----	---

(6) 山梨県南アルプス市

①基本情報

自治体概要	人口	71,660 人	
	高齢化率	28.2%	
支援状況	新規相談受付件数	20.1 件	
	プラン作成件数	1.6 件	
	就労支援対象者数	0.9 件	
	就労・増収率(%)	25.0%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	直営＋委託(南アルプス市社会福祉協議会)※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(株式会社アシストエンジニアリング) ※以下、「アシストエンジニアリング」 ◎生活保護受給者向け事業と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1名 相談支援員:3名、就労支援員:3名(※) ※相談支援員と就労支援員は兼務(実質3名対応) ＋インテークワーカー(初回聞き取りの専門員)	
	就労準備支援事業	5名(携わっている複数の職員の中からニーズに合いそうな人が担当。キャリアコンサルタント2名)	
相談窓口(各事業の実施場所)		就労準備支援事業の事務所は市外(車で20分程度の距離)だが、月1回開催している居場所事業(通いの家)などは市民活動センター等市の公共施設も利用	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 2023(令和5)年度までは自立相談支援事業は直営だったが、2024(令和6)年度より自立相談支援事業を一部社協に委託(直営＋委託)。2025(令和7)年度からの重層事業の本格実施や社協の地域福祉行動計画との整合性を図る。社協職員1名が福祉総合相談課に常駐。 ● 自立相談支援事業の担当職員は全員社会福祉士または保健師の有資格者。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談支援員と就労支援員が兼務、境目はあまりない。 ● 本人が口にするまで、就労や「働こう」ということは口にしないようにしている。なるべくこちらからは誘導はせず、本人が働いてもいいかなと思えるような環境を作ることや、元気になれるようにということに力を入れている。これまでも、最初は働くというのは考えられない、というような人も多かったが、自尊心や自己肯定感を回復する場を工夫して作ることや、面談を大事にしていると、週一回ぐらいならバイトしてもいいかな、と考えが変わる人もでてきた。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業を開始するには本人の同意が必要だが、プログラムに参加してみたい気持ちになるまでに、課題を解きほぐすことや、他者との関わりの中で気づきを得ること、本人が「働きたい」「参加したい」という意欲をもつところまでは自立相談支援機関において支援を行う。 ● 場合によっては就労準備支援事業のメニュー（通いの家等）をテスト的に利用することもある。その場合、就労準備支援事業者がプラン作成前に関わりを持つこともある。
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業として大事にしていることは、次の2点。①支援対象者の考え・希望をくみ取ること、②スタッフも一緒に楽しむこと。 ● 例えば、桃狩りや流しそうめんなどのイベントは、通いの家で、次回何しようか、何かやってみようか、参加者に聞き、興味のある人が集まってくるほか、定期的な外出の機会や話題づくりとしてソバ打ちをして地域の方と交流することもある。 ● 通いの家にはいろいろなボードゲームもあり、職員も一緒に楽しんで取り組んでいる。本人と、アシストエンジニアリング、市役所、社協職員などみんなで大笑いしながら行う中で、次第にストレンクスが見つかる。また、できる限りさまざまな人と会う機会にもなる。 ● 手芸が得意であれば、週一回、二週間に一回など、その人ごとに好きなことに取り組む場を設定し、似たような趣味を持っている人に市役所から声をかけてもらいフリースペースとして集まってもらう。アシストエンジニアリングや市役所、場所はどちらかが用意し、集まったいろいろな人とみんなで好きなこと・得意なことをやりながら交流してみるといったこともある。 ● 面と向かって面談すると緊張するため、リラックスしながら話せる環境を意識している。そのような中で、会社研究など本人の希望に沿ったプログラムを優先して行う。これらは、その人ごとのオーダーメイド型の支援となる。 ● オーダーメイドによる就労準備支援事業のメニューについて、相談者にわかりやすく伝える方法を検討中である。 <p>【主なプログラム内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 一般的なレベルのパソコン教室(3か月～5か月など中長期的なカリキュラムを用意)＋履歴書作成や面接対策 ※到達レベルを個別に設定 ● 料理教室や家事の講習会 ● SNS 練習会 ● 社会保険や雇用形態の説明 ● 社会人のちょっと先輩として話をしてもらう(職歴や今の仕事について) ● 一人暮らしの始め方と生活のこと相談会や体験会 <p>※ニーズに合わせて随時追加</p>
<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業と就労準備支援事業の役割を明確に分けてはいないが、まずは自立相談支援事業の相談支援員が対応し、必要に応じたタイミングで就労準備支援事業支援員も一緒に面談に同席するなどして信頼関係を構築しながら就労に向けた課題を解きほぐしていく。その中で、この人は就労準備支援事業が必要ではないかと思われる人を利用につなげる。 ● どの課からつながるとしても必ず自立相談支援機関においてアセスメントしてからつなぐため、知らない間につながっているということはない。

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等


<p>就労体験等の協力事業所</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業者が県内有数の人材派遣会社ということもあり、グループ企業として数多くの体験先を持っている(農業(いちご農園等)、B型就労アシスト、製造業、PC操作その他)
<p>取組方法/工夫点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 上記以外にも、人材派遣会社のネットワークにより、相談者のニーズに応じた就労体験先を随時調整する。
<p>企業開拓とマッチング</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談者の特性やニーズを踏まえ、市職員の個人的なつながりの企業(電子製品の製造業等)や、派遣会社でもある就労準備支援事業者のネットワークの中で、マッチングを調整している。 ● 面談の中で、通勤範囲や勤務条件等の希望が見えてきた場合、アシストエンジニアリングの営業担当者とも情報を共有し、候補があれば営業担当者が一緒に企業へ同行し、職場見学を行うこともある。 ● アシストエンジニアリングのグループ会社の一つに機器事業部(南アルプス市役所から車で約5分)があり、そこに通所してもらい、スタッフと一緒に業務を行ってもらうこともある。グループ会社のため、就業時間や勤務日数などの就労条件の調整もしやすく、受入れ先にもよく理解してもらっている。

⑤認定就労訓練事業

<p>利用状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内に1件あるが、利用がほとんどない。 ● 事業説明に行くことや意見交換することはあるが、まだ利用実績がない。
<p>課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● アシストエンジニアリングのネットワークを活用した就労体験等が可能であることや、認定就労訓練事業のあり方がなかなか現場に伝わっていない状況。

(7) 静岡県

①基本情報

自治体概要	人口	219,686 人*	
	高齢化率	32.4%*	
支援状況	新規相談受付件数	18.6 件	
	プラン作成件数	7.7 件	
	就労支援対象者数	3.5 件	
	就労・増収率(%)	52.7%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(ふじのくに生活困窮者自立支援コンソーシアム(12 町社協+NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡+株式会社エステートケア沼津(居住支援法人)+県社協))	
	就労準備支援事業	委託(社会福祉法人天竜厚生会)	
支援体制	自立相談支援事業	県内各町社協に相談支援員兼就労支援員 2~3 名程度ずつ配置(兼務) NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡に専任の就労支援員を配置	
	就労準備支援事業	管理者含めて7名。(+1名は業務委託で、キャリアコンサルタント1名、合計8名)	
相談窓口(各事業の実施場所)		自立相談支援機関は12町の社協。 就労準備支援事業(合宿型)の実施場所は、天竜厚生会の法人本部(浜松市天竜区)	

※人口・高齢化率は、県管轄の12町(東伊豆町、河津町、南伊豆町、松崎町、西伊豆町、函南町、清水町、長泉町、小山町、吉田町、川根本町、森町)の合計

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業としての就労支援は主に NPO 法人青少年就労支援ネットワークが担当。自立相談支援機関としては県内大きく3つのエリアに分かれるが、一部賀茂町は NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡ではなく、コンソーシアムとアドバイザー契約をしている障害者就業・生活支援センターの社会福祉士に入ってもらっている。 ● 社協が受けた相談の中で、働きたい意欲のある人を就労支援員につなぎ、時間をかけて対応する。 ● 自立相談支援機関から就労支援員に電話で打診し、対象となる人の概略を伝え相談する。2 回目以降に就労支援員が同席することが多いが、初回から同席することもある。詳しいことは直接本人に会った時に聞かせてもらう。 ● 就労支援員による相談は、毎週固定した日に巡回するといった方式ではなく、随時の電話対応により訪問日程等を決める。 ● 町ごとに支援調整会議を開催、必要に応じて就労支援員も参加する。
-----------------	--

就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人の意思を大事にする。本人の意識の状態を探りながら、押し付けないう情報提供する。自己理解を深めてもらいながら、どのような仕事があるかを知ってもらい、自分のやりたいことを見つけてもらいたい。 ● 病気で体調が優れない人や、精神面で鬱の状態の人の場合、面談を重ねることにより、少しずつ回復しながら求人票を見せて紹介し、そこから興味を持ったものについて一緒にハローワークに同行し、相談してみる。 ● さまざまな話を聞き、支援者側でこういう仕事が合うのではないかと思い求人票を調べて提案しても、あまり本人にフィットすることはなく、自分で「これやってみたい」と見つけたものに応募することが多い。 ● 押し付けないように、あくまで参考例として紹介し、本人も、自分は何がしたいか明確に分かっているとは限らないため、それを見つけてもらうために紹介している。自己理解を深めながら、どのような仕事があるかを知ってもらい、自分のやりたいことを見つけてもらう。 ● 面談室や会議室で話を聞くだけでなく、その人の動く行動範囲の中から次に何か動ききっかけがないかを見たり、一緒に出かけたりしながら本人の関心を探る。
---------------------	--

③就労準備支援事業について

事業の利用の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業は、全県で一か所天竜厚生会に委託し、合宿型(年 2 回)で実施。 ● 自立相談支援機関から就労準備支援事業者側に対象者に関して電話で打診があり、状況を簡単に聞いて、本人に書いてもらうフェイスシートと、支援者用のアセスメントシートの作成をお願いし、対象になり得るかどうか検討する。 ● プログラム実施の概ね1か月前から本人のところに出向き、本人と現地の支援者を交えて面談を行う(直前に申し込みがあることもある)。参加となれば、研修当日に、浜松市から迎えに行く(2回目のコンタクト)。
支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等	<ul style="list-style-type: none"> ● 合宿型を年 2 回実施。集団合宿プログラム(2泊3日/浜松市研修施設)→就労体験 5 日(各参加者の居住地近く)→フォローアップ合宿プログラム(2泊3日/浜松市研修施設)が一連の流れ。1回あたりの定員は 5 名で年によって参加者数の増減がある。 ● 参加者の自宅から法人所有の研修施設(浜松市)まで直接送迎をする。 ● 合宿型が通所型と決定的に違うのは、支援者が参加者と衣食住を共にすること。生活リズムや食事、歯磨き、洗濯、入浴など生活状況の基本を把握することができる。就労準備支援事業は直接的に就労を目指すというよりは、働くことを通して生活そのものを立て直すことでもあるため、日々の生活の状況からわかる本人の強みや適性、課題等について伝えられることは大きい。 ● 1日目は 4 人 1 組のボートに参加者と支援者が一緒に乗り、アイスブレイクとして体を使い、みんなで協力してボートをこぐ中で打ち解ける。その後、職業適性検査を実施。宿泊は天竜区にある法人所有の研修施設。食堂のキッチンを利用し、調理実習も実施している。 ● 2 日目はこども園の園児が使うサイズのテーブルとベンチを作る。地元の家具職人に講師を依頼し指導してもらい。木工は共同作業として一緒に作ることで手先の器用さ、作業能力なども確認することができ、仲間と目的を達成する感覚を培ってもらい。 ● 3 日目は 2 日目に作ったベンチをみんなで子ども園に持っていき、園児に集まってもらいプレゼントする。実際に園児たちと顔をあわせて完成品を手渡し、褒めてもらうことやお礼を伝えてもらうことにより、自己肯定感や自己有用感を高める意味合いで実施している。 ● プログラムの内容は参加者に応じて多少変更することはあるが、目的やベースは変わらない。 ● 就労体験の受け入れ先は、リストの中から原則居住地の近くで選択してもら

	<p>う。福祉関係の事業所が多く、必ずしも本人の希望する業種に応えられていない面もあるが、基礎的な体力やコミュニケーションなどのアセスメントが目的の一つであり、体験を通して働くイメージづくりや仕事への理解を深めてもらう。社会福祉法人であれば、そうしたことに理解を得やすい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● フォローアップ研修は、キャリアコンサルタントとSST(ソーシャルスキルトレーニング)を行うことや、面接練習、革細工で財布や名刺入れを製作するなどのプログラムで構成している。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="478 526 1361 846"> <tr> <td data-bbox="478 526 670 683">【集団合宿】</td> <td data-bbox="670 526 1361 683"> 1日目:4人1組のボート体験、職業適性検査、調理実習 2日目:地元家具職人を講師として呼びテーブルとベンチの作製 3日目:法人運営のこども園園児に作製したものをプレゼントする </td> </tr> <tr> <td data-bbox="478 683 670 761">【就労体験】</td> <td data-bbox="670 683 1361 761">参加者の住まいの地域の法人または天竜厚生会の関連施設等で実施</td> </tr> <tr> <td data-bbox="478 761 670 846">【フォローアップ合宿】</td> <td data-bbox="670 761 1361 846">キャリアコンサルタントと SST やストレングス研修の実施、革細工で財布・名刺入れ・ベンチケースを作製</td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> ● 合宿型で短期的な関わりとなるため、信頼関係の構築の難しさはある。支援者側は、就労に向けて本人に必要なことを伝えたいが、信頼関係がないと伝えにくい。そのため、プログラム時間中や合間の休憩などは、他愛もない話もしながら本人の懐にいかに入り込めるかというところはかなり意識している。 ● 最初の2泊3日ではなかなか伝えられない。本人との信頼関係を構築し、本人のことをよく知ることが最初の2泊3日。就労に向けて必要なことを伝えるのはフォローアップ合宿のタイミングであり、3週間にわたり実施する意味合いはそこにある。 ● アフターフォローの面談のタイミングで求人をいくつか準備し、本人の希望があれば、その場で電話して面接の調整をすることもある。また、就労体験等の協力事業所において、体験の延長線上で就職する人もいる。就労準備支援事業では、就職に直結することだけが成果ではないが、プログラムに参加した結果、就職支援のように動くこともある。 ● 一部の町の自立相談支援機関からは、合宿型のプログラムではなく「就労体験」だけを特出して展開してほしいという声もあり、前後の合宿は実施せず、就労体験だけを調整するというケースもあった。 	【集団合宿】	1日目:4人1組のボート体験、職業適性検査、調理実習 2日目:地元家具職人を講師として呼びテーブルとベンチの作製 3日目:法人運営のこども園園児に作製したものをプレゼントする	【就労体験】	参加者の住まいの地域の法人または天竜厚生会の関連施設等で実施	【フォローアップ合宿】	キャリアコンサルタントと SST やストレングス研修の実施、革細工で財布・名刺入れ・ベンチケースを作製
【集団合宿】	1日目:4人1組のボート体験、職業適性検査、調理実習 2日目:地元家具職人を講師として呼びテーブルとベンチの作製 3日目:法人運営のこども園園児に作製したものをプレゼントする						
【就労体験】	参加者の住まいの地域の法人または天竜厚生会の関連施設等で実施						
【フォローアップ合宿】	キャリアコンサルタントと SST やストレングス研修の実施、革細工で財布・名刺入れ・ベンチケースを作製						
<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 昨年度までは、静岡県の音頭で、事業受託後に各町の自立相談支援機関の関係者にスタートアップの打合せ、事業説明、プログラム内容の説明をする機会があり、そこで最低限の対象者像等は伝えていた。 ● 3週間経過した後、自立相談支援事業を担当する町社協や生活保護ケースワーカーに対し、アフターサポートとして合宿の状況を伝えている。事業実施後、本人の様子を写真付きでまとめ、記録として提供している。その中に、生活面の様子、プログラムでの様子、本人からこういう言葉が聞けたといったことをすべて落とし込む。各地域の支援者と情報共有の場を設けた後、本人も一緒に振り返りを行い、今後の希望するプログラムや就労に向けた意向などを確認する。 						

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

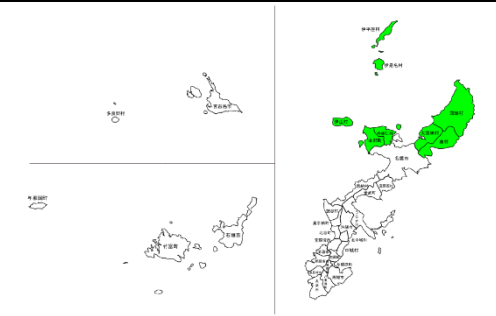
<p>就労体験等の協力事業所</p>	<p>(自立相談支援事業の就労支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 独自に企業開拓を行うことや、その方に合う仕事探しなどを、就労準備支援事業者としてこれまで関わってきた企業のネットワークを活用し、必要な時に相談することはある。ただし、そのような個別の求人開拓で対応する対象者は限られるため、ほとんどの人は、ハローワークに同行し、一緒に仕事を探すことが多い。 <p>(就労準備支援事業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本人の居住地の近くの社会福祉施設等において就労体験を行う。通える場所での体験・参加が難しい場合、就労準備支援事業者の法人事務所がある浜松市まで来てもらい実施することもある(その場合は同じく研修施設に宿泊)。 ● 就労準備支援事業のアフターフォローとして求人開拓に行く場合もあるため、協力事業所になってもらう企業へのアプローチを進めようと動いている。
<p>取組方法/工夫点</p>	<p>(自立相談支援事業の就労支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 本人から希望があれば、就労支援員としてこれまで関わってきた中で、つながりのある企業に連絡・相談することはある。 ● 働く場所の開拓ということでは、社協という組織自体が社会資源の開拓ということをしていかなければならないという問題意識を持っている。そのため、就労支援員とともに地域福祉を担っていきたい。 <p>(就労準備支援事業)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 合宿型の2週目の就労体験を、月曜日から金曜日の5日間で実施する場合、少なくとも月・水・金は現地に行く。受入れ先が社会福祉法人の場合は、理解があり法人の担当スタッフがつくことが多いが、一般企業では常に職員をつけられないこともある。場合によっては1週間、就労準備支援事業のスタッフが対応することもある。 ● 基本的に全施設お手伝いの報酬として 500 円/時を本人に支給している(委託費からではなく協力先からの支払い)。
<p>企業開拓とマッチング</p>	<p>(自立相談支援事業の就労支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 就労を希望されている方のスキルとやりたい仕事とがマッチするという人は稀。多様な方がいるため、求人母数の多いハローワークやアルバイト情報誌等を活用することが多い。ハローワークで探してマッチしない、就労準備支援事業に近いような時間をかけてゆっくり関わる中で仕事を探すという方は、これまで関わってきた企業のつながりの中から個別に求人開拓を試みる。

⑤認定就労訓練事業

<p>利用状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業を展開している天竜厚生会が、法人内で19か所の就労訓練事業所の認定を受けている。非雇用型：雇用型が7:3～6:4という割合。 ● 就労訓練の受入れの際は、必ずプランを作成する。その中でモニタリング時期(2～3か月に一回、半年に一回など)を設定する。 ● 同じ法人内において、県内の一部の自治体から自立相談支援事業の委託を受けているため、そこから認定就労訓練事業につながるケースや、障害者相談支援機関から紹介を受けてつながることもある。 ● 認定就労訓練事業所として生活困窮者等を受入れてよかったこととしては、週半日くらいの訓練から始めて徐々に期間を伸ばし、「雇用型」に移行した後、そのまま企業に就職する人もいるなどの成果が見られること。 ● どの業界でも人手不足と言われる中、人材確保の一つの解決方策としても活用できる点では一般企業にもメリットがあると思われる。
<p>課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労訓練を利用したいという相談が年々減ってきている。 ● 最近では、本人に認定就労訓練事業の説明をした際、「非雇用型」の場合、「お金をもらえないのであれば就職活動をして別のところを探す」と言われることが多い。 ● 複合的な生活課題を抱えている人が対象となるため、うまく仕事に結びつくケースはそれほど多くはない。訓練として実施するとなると、企業側で担当者を配置し、業務に関する指導や日常的なコミュニケーションなどが必要となるため、そこに対する負担感が出てしまう。

(8) 沖縄県 (北部圏域)

①基本情報

自治体概要	人口	38,247人※	
	高齢化率	35.7%	
支援状況	新規相談受付件数	163件	
	プラン作成件数	66件	
	就労支援対象者数	27件	
	就労・増収率(%)	44.4%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(公益財団法人沖縄県労働者福祉基金協会)	
	就労準備支援事業	委託(公益財団法人沖縄県労働者福祉基金協会) ◎被保護者と一体実施	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1名 相談支援員:2名(うち非常勤1名)、就労支援員:1名(※) ※相談支援員と就労支援員は兼務(生活困窮者自立支援制度以外の他事業との兼務はなし)	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:2名 (自立相談支援機関に常駐)	
相談窓口(各事業の実施場所)		名護市内に事務所を設置、自立相談支援機関の職員と就労準備支援事業者の職員が同じ事業所に在籍	

※人口・高齢化率は、県管轄の町村のうち、北部圏域(国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村、本部町、伊江村、伊平屋村、伊是名村)の合計

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 沖縄県の生活困窮者の就労支援の場合、生活困窮者自立支援制度における就労支援(自立相談支援事業の就労支援・就労準備支援事業・就労訓練事業)と、ハローワークによる就労支援に加え、その両制度の間の対象者像を想定する沖縄県おしごと応援センターOne×One(以下、「ワンバイワン」という独自事業があり、それらを組み合わせて就労支援を行っている。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の就労支援として、明確なものを位置づけているわけではなく、相談支援をメインとして就労準備支援事業、ハローワーク、ワンバイワンとが関わりながら支援を行う。

③就労準備支援事業について

事業の利用の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ● 新規相談受付後、相談支援員によるアセスメントの結果、就労準備支援事業が必要と判断されれば、就労準備支援事業支援員も一緒に相談に入る。
支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等	<ul style="list-style-type: none"> ● 北部圏域では、集合型のプログラムでも1～2名しか参加できないため、結局は本人に合わせて個別プログラムを展開している。 ● シルバー人材センターがない地区の相談者が多く、センターに頼めないという作業にスポットを当てて、その作業を就労準備支援事業で対応することでwin-winになるような形を目指している。就労準備支援事業支援員は、前職が地域包括支援センターの職員で、当該地域の高齢分野に精通しており、地域の課題から就労準備支援事業のプログラムを組み立てることが定番化しつつある。 ● 離島の場合、訪問する頻度が限られてしまうため、地元の相談員で実践を行い、就労準備支援事業の支援に近いような社会資源や活動を把握し、そこに参加させてもらえるように調整していくという個別支援にならざるを得ない。 ● 理解のある町村社協の協力を得て、障害者の地域活動支援センターと共同プログラムを実施することも検討している。 <p>【主なプログラム内容】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 定期的なセミナー、屋外プログラム、屋内プログラム(筋トレ等)を週3回(WEBサイトでプログラムを公開) ● 地域の課題(草むしり、家の掃除など)、小さなニーズを役場の方と相談して拾い上げ、相談者の特性に応じて個別に支援メニューとして位置づけている。
自立相談支援事業との役割分担や情報共有等	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談支援員が中心となって聞き取りする中で、就労準備支援事業が必要と思われる場合、ケースによっては就労準備支援事業支援員も面談に同席する。(年10～20件程度)

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等


就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 島の名物の加工を行う工場や社協等。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協で実施している障害の地域活動支援センターの作業の一部で、菊を梱包する新聞紙を一定のサイズに切って分ける作業がある。 ● 菊の出荷で忙しい時期に、沖縄県花卉園芸農業協同組合の協力を経て作業させてもらったこともある。 ● 伊江島では島名物のラッキョウを加工する物産センターや海産物、ラム酒の工場などで実習したこともある。季節限定だがシークアワソー工場で人手が必要なときに2、3人参加したこともある。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人が歩いていける距離で体験できる企業を開拓していくことが難しい。

⑤認定就労訓練事業

<p>利用状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 沖縄県の認定就労訓練事業所は、那覇市を除くと約 40 件あるが、活用されているのは少ない。特に北部では、担当者が常駐していないこともあり、細かい調整が難しく実績はほぼない状態。 ● 認定就労訓練事業とワンバイワンによる企業実習は利用者層としては近い部分はあるが、認定就労訓練事業は実際に受入れ可能な事業所がほとんどない。
<p>課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 公共交通機関が限られ、車などの移動手段がない人も多いため、その人が住んでいる場所から歩いて通える範囲に受入れ先がないと難しい。 ● 支援が必要な人が通える範囲で受入れがあるかどうかを探し、場合によっては受け入れてくれないかと打診し、認定の申請を依頼するという調整を一件ずつ行っていく必要があるが、実際には企業の負担が大きすぎて、認定が広がらない。社会貢献意識が相当高い企業でなければ受入れは難しいが、そのような企業や社会福祉法人の数が少ない北部では(相談者が住んでいるところから歩いて行ける事業所が少なく、そもそも一般の就労先さえもないため)、認定就労訓練事業はほぼ絶望的。毎回送迎をするのは非現実的でもある。 ● 沖縄県の独自事業であるワンバイワンであれば、企業実習という形での実習手当が本人にも企業にも少し入り、人材の確保ができるメリットがあるが、認定就労訓練事業はそれ以上の手間を感じると思われる。 ● 認定就労訓練事業がなかなか利用されない課題の一つとして、書類の煩雑さ以外にも保険加入が、企業の負担になっている。企業の保険加入について、補助金の対象となったが、費用の一部を県が負担してなくてはいけないなど、予算化がなかなか難しいところが挙げられている。

(9) 大分県臼杵市

①基本情報

自治体概要	人口	35,620 人	
	高齢化率	42.0%	
支援状況	新規相談受付件数	227 件	
	プラン作成件数	30 件	
	就労支援対象者数	10 件	
	就労・増収率(%)	60.0%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(臼杵市社会福祉協議会)※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(社協、労働者協同組合ワーカーズコープ・センター事業団)※以下、「ワーカーズコープ」	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1 名 相談支援員:2 名 就労支援員:2 名 ※相談支援員と就労支援員は兼務(メインの担当はある)	
	就労準備支援事業	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉協議会:1 名(自立相談支援事業と兼務) ・ワーカーズコープ:就労準備支援事業支援員:3 名(他非常勤のアドバイザーとして2 名) 	
相談窓口(各事業の実施場所)		社協に総合相談窓口を設置。社協の職員は全員同じフロアに在籍。ワーカーズコープは大分市内(車で約1時間)に事業所がある	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協が自立相談支援事業と就労準備支援事業を受託しており、就労支援準備事業はワーカーズコープも受託。 ● ワーカーズコープは臼杵市以外にも大分県全域において(市部・郡部)就労準備支援事業を受託し、支援メニューによっては他地域と合同によるプログラムを展開することもある。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協内での相談支援員と就労支援員の役割や、自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業の区別は、当初は明確にしていたが、現在は課題が複合化するなど困難な事例も多く、明確に切り分けをせず横断的に関わる体制となっている。 ● 社会的に孤立している対象者も多く、就労支援においてはアウトリーチと伴走を大事にしている。例えば、本人が内職の作業をする際、支援員も一緒にやってみることで徐々に信頼関係を築いていくことを意識している。長く一緒に作業する時間は取れないこともあるが、なるべく現場に足を運び、休憩時間や作業の終了後等に本人と話をするようにしている。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 複雑な事例やひきこもりの事例などが増えてきており、外に出てくるのが難しい人に対して、「困っていませんか？」という聞き方ではなく、まずは外に出てもらうために「人手がなく困っているので少し手伝っていませんか？」と居場所を情報提供して来てもらい、内職のような軽作業をしてもらいながらアセスメントを行っている。面談室以外の場所で、実際の作業状況も見ながら話をすることは、本人の特性を理解する上でも有効。 ● そのような軽作業を通して就労準備支援事業が必要と思われる人に対し、社協またはワーカーズコープの就労準備支援事業につないでいる。 ● 孤立・孤独の状況にある人を社会とどうつなぐかということ考えた結果、上記のようなアプローチが有効であることがわかった。 ● 地域で長く孤立している人は、メンタル面でのアップダウンが激しいため、頻繁にアウトリーチに入り、気持ちが上向きな時に情報提供すると、スムーズに社会参加につながることもある。本人に直接会えなければ、自宅に訪問し、まずは家族と顔を合わせるほか、手紙やチラシを置いておく、携帯がつながる場合はショートメールを送るなど、さまざまな手法により支援につながるようアプローチしている。 										
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 農業やボランティアなど活動・体験場所等が遠い場合は、必要に応じて利用者の自宅まで迎えに行き、車で送迎する。また、支援員も一緒に作業しながらいろいろなことを語り合う。面談室での会話だけでなく、プログラムを通して利用者とコミュニケーションをとりながら信頼関係を構築している。 ● 就労準備支援事業者であるワーカーズコープは、県の広域実施も受託しているため、他地域と合同でプログラムを行うことで参加者の「仲間意識」の醸成を図っている。 ● コミュニケーションワークやスキーマチェックなどのプログラムについては、心理相談に長けているアドバイザーの助言に基づきながら実施。 <p>【主なプログラム内容】</p> <p><社協></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 就労サロン事業 ● 就労体験事業 <p><ワーカーズコープ></p> <table border="1" data-bbox="483 1435 1359 1919"> <tr> <td data-bbox="483 1435 675 1518">定期面談</td> <td data-bbox="683 1435 1359 1518">信頼関係の構築、他者との関わり方の習得、不安の解消、就労後の定着支援</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1529 675 1608">体力向上セミナー</td> <td data-bbox="683 1529 1359 1608">スポーツを一緒に楽しむことでストレス軽減や他者との係わりの苦手意識の克服、体力の向上を図る</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1619 675 1697">コミュニケーションワーク</td> <td data-bbox="683 1619 1359 1697">ありのままの自分を理解、自分をさらけ出せるようにする</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1709 675 1843">調理実習等</td> <td data-bbox="683 1709 1359 1843">買い物と一緒にすることで、金銭感覚の把握を行い、状況をふまえて簡単な家計簿の作成を行い金銭管理方法の取得を行う。また、他者と一緒に調理実習に取り組むことでコミュニケーション能力や自己有用感の向上を図る</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1854 675 1919">職場体験・職場見学</td> <td data-bbox="683 1854 1359 1919">多種多様な業種の理解、体力の向上、他者とのコミュニケーション能力の向上を図る</td> </tr> </table>	定期面談	信頼関係の構築、他者との関わり方の習得、不安の解消、就労後の定着支援	体力向上セミナー	スポーツを一緒に楽しむことでストレス軽減や他者との係わりの苦手意識の克服、体力の向上を図る	コミュニケーションワーク	ありのままの自分を理解、自分をさらけ出せるようにする	調理実習等	買い物と一緒にすることで、金銭感覚の把握を行い、状況をふまえて簡単な家計簿の作成を行い金銭管理方法の取得を行う。また、他者と一緒に調理実習に取り組むことでコミュニケーション能力や自己有用感の向上を図る	職場体験・職場見学	多種多様な業種の理解、体力の向上、他者とのコミュニケーション能力の向上を図る
定期面談	信頼関係の構築、他者との関わり方の習得、不安の解消、就労後の定着支援										
体力向上セミナー	スポーツを一緒に楽しむことでストレス軽減や他者との係わりの苦手意識の克服、体力の向上を図る										
コミュニケーションワーク	ありのままの自分を理解、自分をさらけ出せるようにする										
調理実習等	買い物と一緒にすることで、金銭感覚の把握を行い、状況をふまえて簡単な家計簿の作成を行い金銭管理方法の取得を行う。また、他者と一緒に調理実習に取り組むことでコミュニケーション能力や自己有用感の向上を図る										
職場体験・職場見学	多種多様な業種の理解、体力の向上、他者とのコミュニケーション能力の向上を図る										

<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協としては明確に自立相談支援事業と就労準備支援事業とを切り分けているわけではないが、就労準備支援事業において、ワーカーズコープとは対象者の状況に応じて役割分担している。 ● 支援調整会議において、就労準備支援事業が必要と判断したケースは、社協とワーカーズコープとで連携しながら支援する。 ● ワーカーズコープは基本、月2回臼杵市内に訪問することを想定しているが、相談者の状況に応じて対応しており、月2回以上訪れることがほとんどである。
-----------------------------	--

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

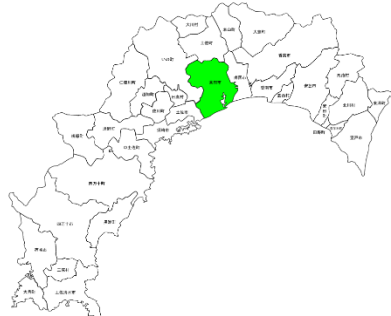
<p>就労体験等の協力事業所</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 社協として 16 か所、ワーカーズコープとしては 10 か所以上の協力事業所がある。 ● 社協として2か所の居場所サロンを展開しており(社協内と上臼杵駅)、市内 16 社から内職のような軽作業を請け負い、相談者に作業(体験)してもらっている。
<p>取組方法/ 工夫点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 企業に対してまず 3 日間の就労体験を依頼する。(ワーカーズ) ● 3年前ほどから、社協職員と、社協の就労支援に関心がありサポートしてくれる住民ボランティアとともに企業訪問し、協力事業所の開拓を行ってきた。現在、協力が得られることになった事業所が 16 か所。ボランティア、企業、社協の3者が協力して生活困窮者向けの就労体験や内職に関する仕組みをつかった。(社協) ● 就労体験を受け入れる事業所側のメリットもあるようで、従業員の考え方が変わってきたということも聞く。生活困窮者等を受け入れるために仕事内容をわかりやすく説明するために工夫したことが、外国人など他の従業員にとっても仕事をしやすい環境につながったという事例もある。受入れした人が成長する姿を見て、他の利用者を受けたいと言ってくれる企業もある。(ワーカーズ) ● ワーカーズが利用者同士の交流のために開催したたこ焼きパーティーに、就労体験先の企業担当者が参加することもあり、事業に関する理解や交流の輪が広がりつつある。(ワーカーズ)
<p>企業開拓とマッチング</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 基本的に地場産業のどの事業所も人手不足。生活困窮者の就労先として、知り合いの伝手もあれば、本人のニーズに合わせて飛び込みで求人交渉をすることもある。 ● 社協からの紹介を受けて、職場見学・就労体験等の受入れを行った企業の中には、多様な人材確保や労働環境の改善等の企業側のメリットを理解してくれるところもある。そうした企業が、他の企業・事業所等に口コミで就労支援の事業の良さを伝えることにより、新たな受入れ先が開拓されることもある。

⑤認定就労訓練事業

<p>利用状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内 2 か所あったが、うち1件が停止中。
<p>課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 訓練事業者側にメリットがないということで苦戦している。 ● 認定就労訓練事業は使わず就労準備支援事業による就労体験を選択することが多くなっている。

(10) 高知県高知市

①基本情報

自治体概要	人口	316,410 人	
	高齢化率	30.8%	
支援状況	新規相談受付件数	739 件	
	プラン作成件数	139 件	
	就労支援対象者数	48 件	
	就労・増収率(%)	40.0%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(高知市社会福祉協議会)※以下、「社協」	
	就労準備支援事業	委託(社協)	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1 名 相談支援員:5 名 就労支援員:1 名 ※相談支援員と就労支援員の業務内容はほぼ同じ	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:1 名	
相談窓口(各事業の実施場所)		自立相談支援機関「高知市生活支援相談センター」のある社協は市役所から徒歩5分程度の距離に位置し、内線で市役所ともつながっている。自立相談支援員、就労準備支援事業支援員は同じ事業所	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の相談支援員と就労支援員、就労準備支援事業支援員は同じフロアで業務を行い、日常的な情報共有が密に行われている。 ● 支援の方針については、週 1 回のエリア別の支援会議で協議し、チーム体制により支援を進めている。 ● エリアは当初 4 か所に分けていたが、今年度から、3 人 1 組で複数のエリアを担当する体制にしている。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員は、基本的な相談支援業務は相談支援員と同様に対応しており、就労を主訴とする対象者については、インテークから就労支援員も同席することがある。 ● 就労準備支援事業に関しては、対象者としてひきこもりや 8050 で長期に家から外に出られない人も多いため、来所した際には、居心地がいい環境であるよう心がけている。まず来てくれたことをほめる。軽作業をするにしても、否定的なことを伝えるのではなく、本人の自己肯定感を上げるような心遣いが重要。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 事業の利用に至る経緯としては、自立相談支援機関からつながるほか、関係機関からの紹介や保護者からの相談によりつながるケースが多い。 ● 市内の生活困窮者支援団体の実務者同士の顔の見える関係づくりと包括的な支援の実施を目的に平成25年から始まった「こうちセーフティネット連絡会」等において就労準備支援事業について周知してきた。 ● 就労準備支援事業の利用を検討するケースについては、毎週開催されるエリア別の支援会議において、対象者ごとの支援方針を協議する。その後、本人に対して支援内容を説明し、希望を確認しながら具体的な支援プログラムの提案、プランの作成を行う。 ● 概ね1～3か月のタイミングで目標の達成状況を確認し、それ以外にも大きな変化や課題、世帯の状況などはモニタリングを行い週1回の会議で共有する。 																
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 赤い羽根共同募金を活用し、「社会参加応援プロジェクト」として、本人への報奨金も用意しており、就労のみならず幅広く支援している。 ● 本人のニーズと実際のスキルにギャップがある場合もあり、就労体験等の後の振り返りを重視している。その中で、できること、苦手なことなどを把握し、目標の修正等を行うことで、ギャップを埋めることを目指す。 ● ここに来るのがプログラムへの参加だけでなく、自分の近況を知ってもらい、他者とのコミュニケーション、就労自立を目指して支援を受ける場所だけでなく、居場所として参加している人も多い。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="483 1021 1361 1525"> <tr> <td data-bbox="483 1021 675 1104">スキルアップ講座</td> <td data-bbox="683 1021 1361 1104">ソーシャルスキルトレーニング(SST)講座(年4回開催)、働くときに知っちゃきたいこと講座(年3回開催)、ストレッチ講座等</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1115 675 1198">社会参加イベント</td> <td data-bbox="683 1115 1361 1198">事業卒業者との交流を目的に公共機関を利用し公共施設等を見学</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1209 675 1238">軽作業</td> <td data-bbox="683 1209 1361 1238">カレンダー製作、各部署からの切り出し作業など</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1249 675 1279">農園作業</td> <td data-bbox="683 1249 1361 1279">きずな農園、介護施設の中庭など</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1290 675 1319">洗車作業</td> <td data-bbox="683 1290 1361 1319">法人内2部署において送迎車等の洗車・清掃作業</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1330 675 1413">清掃作業</td> <td data-bbox="683 1330 1361 1413">市内の旅館施設で大浴場の清掃作業、市内の病院施設で除菌作業やシーツ交換作業を体験</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1424 675 1453">包装作業</td> <td data-bbox="683 1424 1361 1453">期間限定で市内の菓子製造工場において商品の包装作業を体験</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1464 675 1494">社会参加体験</td> <td data-bbox="683 1464 1361 1494">住んでいる地域の社会資源を利用して社会活動等へ参加</td> </tr> </table>	スキルアップ講座	ソーシャルスキルトレーニング(SST)講座(年4回開催)、働くときに知っちゃきたいこと講座(年3回開催)、ストレッチ講座等	社会参加イベント	事業卒業者との交流を目的に公共機関を利用し公共施設等を見学	軽作業	カレンダー製作、各部署からの切り出し作業など	農園作業	きずな農園、介護施設の中庭など	洗車作業	法人内2部署において送迎車等の洗車・清掃作業	清掃作業	市内の旅館施設で大浴場の清掃作業、市内の病院施設で除菌作業やシーツ交換作業を体験	包装作業	期間限定で市内の菓子製造工場において商品の包装作業を体験	社会参加体験	住んでいる地域の社会資源を利用して社会活動等へ参加
スキルアップ講座	ソーシャルスキルトレーニング(SST)講座(年4回開催)、働くときに知っちゃきたいこと講座(年3回開催)、ストレッチ講座等																
社会参加イベント	事業卒業者との交流を目的に公共機関を利用し公共施設等を見学																
軽作業	カレンダー製作、各部署からの切り出し作業など																
農園作業	きずな農園、介護施設の中庭など																
洗車作業	法人内2部署において送迎車等の洗車・清掃作業																
清掃作業	市内の旅館施設で大浴場の清掃作業、市内の病院施設で除菌作業やシーツ交換作業を体験																
包装作業	期間限定で市内の菓子製造工場において商品の包装作業を体験																
社会参加体験	住んでいる地域の社会資源を利用して社会活動等へ参加																
<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談支援員が対象者の生活全般の支援を行い、就労準備支援事業支援員が具体的な就労体験や実習等の調整を担当する。 ● 定期的なケース会議を開催し、各支援の進捗状況を共有しながら役割を調整している。 																

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

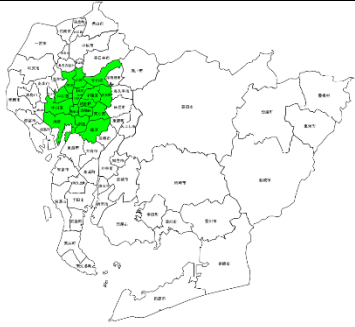
就労体験等の協力事業所	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内 32 か所の協力企業がある。農園、高齢者介護施設、旅館施設、病院、菓子工場など。
取組方法/工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所は、生活支援相談センターの就労支援について理解をいただいた企業に「協力事業所登録届」(作業内容等を記載)を記入してもらい、対象者の受入れを検討する際に相談できる関係を作っている。 ● 体験を受け入れてもらうためには、事前に相談者の特徴に応じて、受入れ先の事業所での作業の切り出しなどを調整している。 ● 菓子工場の場合は請負契約となり、包装作業等に関して個数あたり単価を設定した上で社協から請求し、歩合により報奨金として対象者に支給する。 ● 旅館施設については、コロナ禍において影響を受けた観光産業に関して、行政の産業政策・観光分野の部署から話をつないでもらい、人手不足への対応と、センターが求める就労体験プログラムのニーズを win-win で対応することができた。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会福祉協議会内の別の部署で福祉教育などを行っている「地域協働課」が、地域住民とともに企業の現状に沿った社会貢献の取組を一緒に考える事業に取り組んでいるため、その協力企業にアプローチすることもある。 ● その他本人のニーズを踏まえて相談員同士でそれぞれが持つ企業情報等を情報共有しながら探している。

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 市内5つの事業所が認定を受けており、うち1か所が社協。ワーカーズコープ、高齢者事業団など福祉関係が多い。 ● 社協が認定就労訓練事業として利用者を受け入れる場合は、「非雇用型」が多い。 ● 認定就労訓練の作業場所として協力事業所を登録することにより、協力事業所において訓練を行うことも可能である。 ● 認定就労訓練事業は、就労の手前として、実際の仕事の内容に近く、就労体験よりも負荷が大きいものとして位置づけており、3か月間までの期間で、社協の運用規定に基づき報奨金を支払う。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人の希望や状況に応じたマッチングがうまくいかず、受入れが進まないこともある。 ● 受け入れる側も人員不足で余裕がないと言われる事が多い。 ● 就労訓練を経てスムーズに一般就労や雇用につながっていくことが難しい。就労訓練や職場体験を経て、就労準備支援事業の支援でつながりを再開していくこともあり、アップダウンを繰り返すことも踏まえて支援している。

(11) 愛知県名古屋市

①基本情報

自治体概要	人口	2,297,745 人	
	高齢化率	25.0%	
支援状況	新規相談受付件数	6,984 件	
	プラン作成件数	1,015 件	
	就労支援対象者数	826 件	
	就労・増収率(%)	42.0%	
実施(運営)方法	自立相談支援事業	委託(名駅、金山、大曾根の3か所)	
	就労準備支援事業	委託(名駅、金山、大曾根の3か所)	
支援体制	自立相談支援事業	主任相談支援員:1名 相談支援員:7名 就労支援員:7名、就労訓練事業の支援員:1名 ※相談支援員兼就労支援員として実人数7名配置	
	就労準備支援事業	就労準備支援事業支援員:2名(うち1名非常勤) ※自立相談支援機関に常駐	
相談窓口(各事業の実施場所)		地下鉄等交通機関結節点3か所で開設。自立相談支援員、就労準備支援事業支援員は同じ事業所。	
備考		本調査においては名駅を対象にヒアリング調査を実施 委託(名古屋くらしサポートコンソーシアム) 構成法人:名古屋市社会福祉協議会、社会福祉法人芳龍福祉会、NPO法人ICDS	

②就労支援の体制・取組内容

就労支援における体制面・特徴等	<ul style="list-style-type: none"> ● 3団体で構成されるコンソーシアムで自立相談支援事業や就労準備支援事業を受託しており(①自立相談支援事業:社会福祉協議会、②就労準備支援事業:NPO法人ICDS、③住まい系:芳龍福祉会)、お互いの強みを活かしながら支援を展開。
就労支援員の役割/考え方	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人は早く働きたいという気持ちで来る人が多いが、実際には働く前に体調を整えることが必要な場合もある。まずは本人の状況、背景にある課題を確認することも重要である。 ● 本人の強み、得意なこと、長所に着目するように意識している。 ● 就労支援は気持ちの支援でもあって思っている。本人の覚悟や決意、前向きな気持ちが出てくると、かなりのことは解決する。 ● 現状に合わせた働き方の提案をしながら見守るが、すぐにうまくいくわけではない人も多く、例え失敗したとしても「いい経験をされましたね」と、否定的な言葉を使わないようにしている。全て肯定し、その人の自尊心や肯定感を向上させながら就労につなげていけるとよい。

③就労準備支援事業について

<p>事業の利用の流れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 相談を受け、定期的に通いながら少しずつ就職に向かっていった方がよいケースについては、就労準備支援事業支援員に相談し、事業の利用につなげる。利用開始にあたってチェックリストも用意しているが、明確な基準に基づいて判断するケースは少なく、アセスメントの参考にしている。 ● チェックリストは、本人を知る手がかりとして位置づけており、それを基に、家庭環境や過去の生い立ち等を把握し、支援プログラムに反映することもある。 								
<p>支援メニュー/プログラムの方式・内容・工夫等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 面談ブースの中に、就労準備支援事業の全体像や一連の流れを示したラミネートをかけたパネル(A3・1枚)があり、対象者の状況に応じてメニューの中からプログラムを提案し、説明しながら本人の希望を聞くこともある。 ● プログラムの実施(活動する)場所は、自立相談支援機関内のほか、管轄エリア外の他センターの社会資源を活用することもある。 <p>【主なプログラム内容】</p> <table border="1" data-bbox="483 734 1359 1108"> <tr> <td data-bbox="483 734 671 853">日常生活自立</td> <td data-bbox="678 734 1359 853">「就労準備チェックリスト」を用いた生活リズムの改善等。定期面談による外出の機会の創出。ウォーキング、子ども食堂・農業等のボランティア活動。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 862 671 936">社会自立</td> <td data-bbox="678 862 1359 936">マナー・コミュニケーション等の各種講習。コミュニケーションゲーム。PC講習。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 945 671 1064">経済的自立</td> <td data-bbox="678 945 1359 1064">適性等を見出す各種検査(TEG3・GATB・VRT 検査・OHBY カード等)。これまでの職歴の棚卸を行い「職務経歴書」の作成支援。面接の練習。インターネット等を用いての会社研究の支援。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="483 1072 671 1108">その他</td> <td data-bbox="678 1072 1359 1108">就労準備プレ講習</td> </tr> </table>	日常生活自立	「就労準備チェックリスト」を用いた生活リズムの改善等。定期面談による外出の機会の創出。ウォーキング、子ども食堂・農業等のボランティア活動。	社会自立	マナー・コミュニケーション等の各種講習。コミュニケーションゲーム。PC講習。	経済的自立	適性等を見出す各種検査(TEG3・GATB・VRT 検査・OHBY カード等)。これまでの職歴の棚卸を行い「職務経歴書」の作成支援。面接の練習。インターネット等を用いての会社研究の支援。	その他	就労準備プレ講習
日常生活自立	「就労準備チェックリスト」を用いた生活リズムの改善等。定期面談による外出の機会の創出。ウォーキング、子ども食堂・農業等のボランティア活動。								
社会自立	マナー・コミュニケーション等の各種講習。コミュニケーションゲーム。PC講習。								
経済的自立	適性等を見出す各種検査(TEG3・GATB・VRT 検査・OHBY カード等)。これまでの職歴の棚卸を行い「職務経歴書」の作成支援。面接の練習。インターネット等を用いての会社研究の支援。								
その他	就労準備プレ講習								
<p>自立相談支援事業との役割分担や情報共有等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回相談において主訴が就労であっても、実は背景に他の生活課題を抱える人もいる。また、住居確保給付金に関する相談を受ける中で、よく話を聞くと就労支援が必要ということもある。相談支援員兼就労支援員という体制で必要に応じて役割分担をしている。 ● 自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業における支援は、グラデーションがありつつ重複している。就労準備支援事業支援員が自立相談支援事業の就労支援員のような役割を担う側面もあり、逆に自立相談支援事業の就労支援員が就労準備支援事業支援員のような役割を担うこともある。各事業間で重なり合いながら就労支援を実施している。 								

④就労体験・就労訓練等の協力事業所、企業開拓等

就労体験等の協力事業所 取組方法/ 工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ● 職場見学・就労体験等の協力事業所は約 200 か所(A・B 型事業所等の障害福祉サービス事業所、特別養護老人ホーム、デイサービス等高齢者福祉サービス事業所、製造業、清掃業等) ※名古屋仕事・暮らし自立サポートセンター名駅。市全体としては約 300 か所 ● 元々キャリア教育に強い ICDS(構成団体)がすでに類似の事業を実施しているため、生活困窮者の就労体験等においてその社会資源を活用している。
企業開拓とマッチング	<ul style="list-style-type: none"> ● 利用者のニーズに合わせ、求人情報誌やハローワークの求人票等を見ながら、この求人はあの人に合いそうだということで、飛び込みに近い形で連絡を取るケースもある。 ● 企業側が、ロコミや名古屋市役所から教えてもらったということで自立相談支援機関に訪ねて来ることもあり、さらに受入れた協力事業所による伝手で他事業所につながるなど。さまざまな組み合わせの中で蓄積されている。

⑤認定就労訓練事業

利用状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定就労訓練事業につなぐための支援員を専任で1名配置。企業とのマッチングだけではなく本人への個別支援と企業支援の両方を行う。 ● 名古屋市の登録が 340 社・事業所。コロナ禍で音信不通になっている企業もあるため、現在受け入れ可能ではないところも含まれる。 ● 既存の認定就労訓練事業所の中では相談者のニーズに合う仕事がない場合、あるいは本人が自転車や徒歩で通うことを希望するが近くに該当する事業所がない場合などは、ハローワークと協力し、求人情報を見ながら認定就労訓練事業所への登録を打診し、求人開拓と並行して進めることもある。 ● 訓練開始した初日にどうだったか振り返りを行い、様子を見ながら何らかの課題があれば、本人と事業所と話をしながら調整する。利用者の仕事へのやりがいや、職場での人間関係も意識しながら振り返りを行う。場合によっては企業側に環境改善の働きかけを行うこともある。 ● 本人が辞めない限り最低3か月は寄り添う。 ● 9割が雇用型を希望する。
課題等	<ul style="list-style-type: none"> ● コロナで認定を受けた企業との交流が疎遠になってしまったが、全ての企業を訪問することや連絡をとることが難しい中、何かアクションをとということで、登録事業者宛てに「就労訓練たより」を作成・配布している。 ● 目星をつけた企業に飛び込みでお願いしても、なかなかすぐに受け入れてくれない、理解してくれないことが多い。最近は希望者がいてどうですか、という形で就労訓練事業所を増やしていくというスタンスに変えつつある。認知度が高くないため、今後どのように開拓していくかを、市内の他の自立相談支援機関の就労支援員と検討している。

第Ⅳ章 「手引き」改訂に向けて

生活困窮者自立支援制度の就労支援に関する現状やヒアリング調査から得られた各地域の実践、検討会における議論等を踏まえ、今後の就労支援に関する「手引き」改訂に向けて反映・検討すべき主な事項を整理した。

本章は、【総論編】と【実践編】に分け、総論編では、「手引き」改訂に向けた基本的な方向性・考え方を、実践編では、具体的にどのように取り組むことができるかについてのヒントを、現場の実践事例を交えながら示している。

本章の構成

【総論編】

1. 「手引き」改訂の基本的な方向性
 - (1) 「連続性のある一体的な就労支援」の必要性
 - (2) 地域の「参加する場・働く場」とつながるプログラムの重要性
 - (3) 多様な働き方の実現を通じた「地域づくり」の可能性

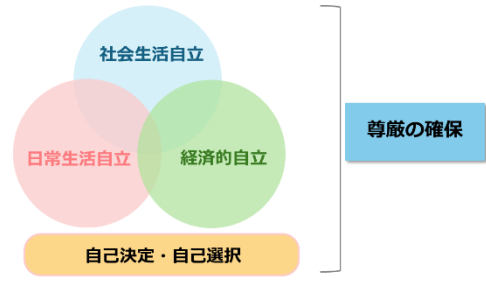
【実践編】

2. 生活困窮者自立支援制度が目指す就労支援の実践に向けて
 - (1) 地域の就労支援体制をデザインする
 - (2) 本人と一緒に、今後の暮らし方・働き方を考える
 - (3) 本人の希望やニーズに応じたプログラムを組み立てる
 - (4) 地域の企業との関係をつくる
 - (5) 認定就労訓練事業を活用する
 - (6) 被保護者の就労（準備）支援を一体的に進める

1. 「手引き」改訂の基本的な方向性【総論編】

(1) 「連続性のある一体的な就労支援」の必要性

生活困窮者自立支援制度の就労（準備）支援における自立の概念は、「日常生活自立」「社会生活自立」「経済的自立」があり、この3つの自立は「段階」ではなく並列の関係で、相互に関連し合っているものと示されている。



「就労」は、3つの自立につながる営みであり、「支援対象者一人一人に働きかけて、よりよい形でそれぞれにとっての就労を実現させていく」*1ため、本人の願いや希望を中心に支援を実施していくことが重視されている。

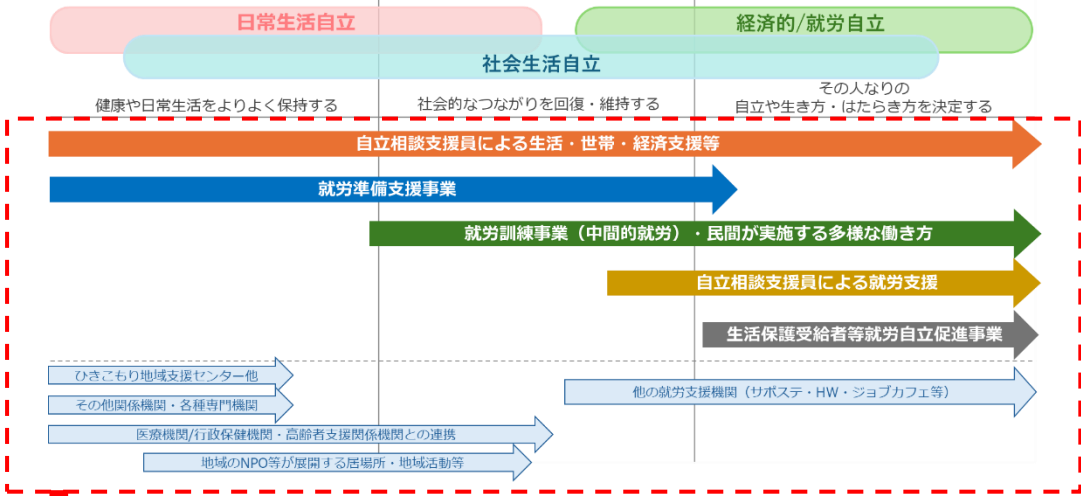
また、本人の自立の状況は、「段階」（クリアしたら次のステップ等）ではなく、具体的な支援によって気持ちや状態の変化（ステップアップとダウン）を繰り返しながらそれぞれの自立（就労）につながっていくため、就労支援のプロセスも「行ったり・来たり」することを前提に考える必要がある。

さらに、2025（令和7）年4月からは、法改正により、生活保護受給者（特例被保護者）が生活困窮者向けの就労準備支援事業等を一体的に利用することが可能となる。

そのため、事業・制度ベースではなく、本人の希望やニーズに応じた支援を一体的に提供できる体制を整えること、支援プロセスが事業（制度）間や支援員間で分断されないよう連続性を確保することを基本として就労支援に取り組むことが重要である。

（※1）令和4年度就労支援員・就労準備支援事業者養成研修【行政説明】生活困窮者自立支援制度における就労支援について (<https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/001092853.pdf>) p 25

図表IV-1-1 生活困窮者自立支援制度における就労支援のイメージ図（再掲）



本人の希望やニーズ・状況に応じて、必要な支援プログラムが選択肢として提供できれば、制度的な事業の枠組みにとらわれ過ぎず、地域の創意工夫による支援を柔軟に展開できるとよい。

考え方

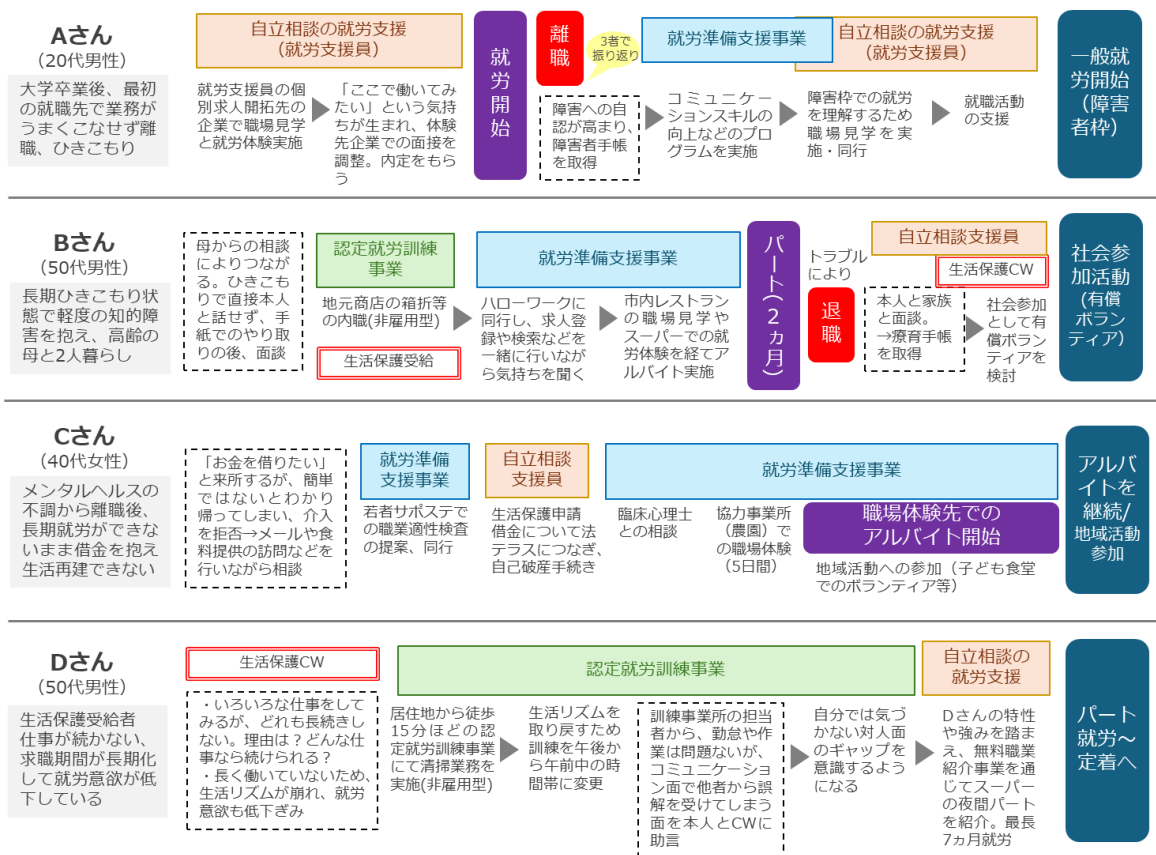
■ 本人を中心に支援（就労支援等の各事業・プログラム）を組み立てる

- ・ その人 1 人 1 人に合った支援（自立相談支援事業による就労支援、就労準備支援事業、認定就労訓練事業等の各事業・プログラム）を選択し、組み立てる。
- ・ 就労の準備性を整えてから次の支援を行うといった段階的・固定的な支援方法にとらわれないよう留意する。（例えば、職場体験や就労訓練をすることで日常生活自立・社会生活自立等の改善につながる場合もある）

■ 事業間で役割を柔軟に調整し、地域の就労支援体制をデザインする

- ・ 生活困窮者自立支援制度における就労支援のそれぞれの事業がカバーする領域（支援内容）は重なり合う部分もある。
- ・ 事業ごとの役割を限定し過ぎず、実施機関・団体等の得意分野や社会資源の多寡等の地域の特性を活かして柔軟に展開する。

図表Ⅳ-1-2 本人の状況に応じた就労支援等の各事業・プログラムの実施イメージ（例）



(2) 地域の「参加する場・働く場」とつながるプログラムの重要性

就労支援を主訴に自立相談支援機関等の相談につながった生活困窮者の背景には、収入や所得以外のさまざまな背景・困難要因が複合化していることが多い。

ヒアリング先から提供を受けた個別事例においても、疾病により離職し長期のブランクを抱えて仕事への復帰が難しい中高年齢者や、高卒・大卒等で就職したものの仕事をうまく続けられず離職し、親元で長期にわたりひきこもりになるケースなどがある。就労経験がない（少ない）、比較的短期で離職転職を繰り返す、背景に障害や家族関係の課題があるといった傾向もみられる。

このような対象者は、ハローワークなどの「求人につなぐ」のみでは自力で「働く」「働き続ける」ことが難しい。また、制度の狭間にあるため、対象別・分野別に特化した就労支援のみでは対応ができないことも考えられる。生活困窮者自立支援制度においては、雇用システムや福祉サービスの狭間にある層への新しい就労支援として、就労準備支援事業、認定就労訓練事業、自立相談支援事業による就労支援などが整備されたが、地域によっては体制の問題や、事業デザインが困難なことから、当事者への支援が進んでいない実態もみられる。

考え方

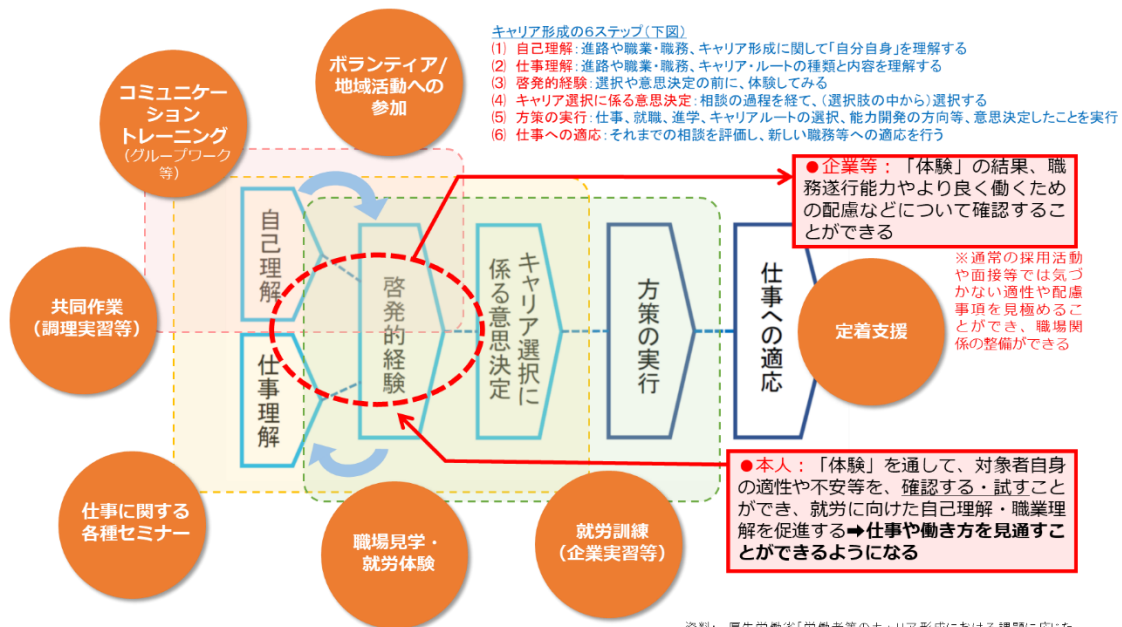
■ 就労準備支援事業や認定就労訓練事業により「参加する場・働く場」とつながる

- ・ 就労準備支援事業では、本人が「自分の興味・関心や価値観、強み、適性などを理解する」「具体的な仕事に対応するスキル等を理解する」といったプロセスを支援する。
- ・ 自己理解を促進する上では、他者との交流を通しての気づきが得られるグループワークや参加者同士の共同作業を行うなどの事業所内で実施するプログラムに加え、地域の中でのボランティア体験、地域活動等の「参加する場」とつながるプログラムを育てることも重要である。
- ・ また、就労準備支援事業や認定就労訓練事業による職場見学や就労体験、就労訓練は、実際の「働く場」において、自らが思う適性や不安等を確かめる・試すことができ、本人にあった仕事の内容や働き方の理解を促進する啓発的経験^{※2}を提供する役割として重要である。（※2）次頁図表IV-1-3 参照
- ・ なお、事業を進めていく上で本人に対する支援と同時に環境への働きかけ（就労体験先等に対する業務内容や就労時間等の調整、企業などの社会資源への支援）も留意する必要がある。

■ 企業との関係づくりから「働く場」とつながるプログラムを広げる

- ・ 職場見学や就労体験、就労訓練等のプログラムは、その人の適性や強みを発揮できる仕事や働き方、職場環境等について、本人と企業の双方において見極めることができるため、ミスマッチを防ぐことや、より良く働くために必要な支援・配慮等を確認することができる。
- ・ 就労支援の各事業の支援員は、企業との関係性を築き、就労体験・訓練等の「働く場」とつながるプログラムを意識的に作り出していくことが重要である。
- ・ 受け入れ先の企業や団体も、就労体験等の取り組みを通じて働きづらさを抱える人の存在を知り、ともに働く経験をするには、当事者が孤立せず、地域の中で暮らし続けるための「地域づくり」とつながる取組でもあることを意識する。

図表IV-1-3 キャリア形成のステップを参考にした社会参加や就労体験・訓練等の役割



資料: 厚生労働省「労働者等のキャリア形成における課題に応じたキャリアコンサルティング技法の開発に関する調査研究」から作成

(3) 多様な働き方の実現を通じた「地域づくり」の可能性

生活困窮者自立支援制度における就労支援の対象者像が複雑化することに伴い、その支援ニーズもより個別対応が必要となっている。その人に合った働き方を実現していくためには、支援プログラムとともに就労の選択肢を増やしていくことが必要となる。

また、本人の意向や障害の特性等によって、必ずしも就労のみの自立をゴールとしないう方針で支援を必要とする対象者もいるため、地域の居場所やボランティア活動等の社会参加を目指す場合の「出口」も活用・開拓することとなる。

少子高齢化の進展により、人材・労働力不足や生活の困りごと等は、全国どの地域でも拡大してきている。求人を募集しても人が集まらず、人手不足に悩む中小企業や地元商店等にとっては、支援を利用しながら働きたい人とのマッチングが人材確保につながるほか、受入れを調整するプロセスを通して地域における多様な働き方への変化が生じることも期待される。また、高齢や障害、病気などの理由により、制度を利用するまでもいかな生活の困りごと等を抱える人をサポートするような仕事をプログラムとして開発することにより、対象者が地域とつながるきっかけとなる。

地域の居場所やボランティア活動等の社会参加の場を含め、本人の個別ニーズに合わせた社会資源の活用・開拓を重ねることが、地域づくりにつながっていく。

考え方

■ 本人のニーズと、企業（地域）の人材ニーズの高い仕事等を結びつける

- ・ 1人1人の希望やニーズに合わせて、企業（地域）の人材ニーズの高い仕事（活動）にアプローチし、プログラム化する。
- ・ 対応する企業や社会資源がなければ、他の分野において活用・代替できないか検討した上で、新たに作り出すことを繰り返し、プログラムの選択肢を増やす。

■ お互いに地域の仲間として助け合える関係を作っていく

- ・ プログラムを通して本人が徐々に企業や地域とつながっていくように伴走する。
- ・ 企業や地域において、本人が能力を発揮しながら活躍できる場ができることにより、「ともに（職場で）働く仲間」、「ともに（地域で）暮らす仲間」として、相互に助け合える関係性を構築する。
- ・ ただし、「働く」価値観は多様である。仕事にアイデンティティを求める人もいれば、仕事以外の場にアイデンティティを見出す人がいることも忘れてはならず、一方的な就労観の押し付けにならないよう留意する。

個別事例から



メンタルヘルスの不調から離職後、対人恐怖や仕事に対しての不安のため家から出ることができず、家賃の支払いが滞り借金もある中、生活再建に向けて動くことができなかったCさん。

自立相談支援事業による生活支援とともに、就労準備支援事業を利用し、就労体験として農園での職場体験、子ども食堂でのボランティア活動等を行う。職場体験以降も、定期的に入入れ農家のもとへ通い、手伝いや野菜の購入など自ら関わりを続け、アルバイトを始める。子ども食堂での活動も通して、「いつか自分で軽食の提供とワークショップを行うようなお店をもちたい」と目標を話してくれている。

※詳細は資料編【事例7】p25～29参照

協力事業所や認定就労訓練事業所の声から

訓練内容を考え、伝えるためにマニュアルを作成する過程で、自分たちの業務を整理する機会となった。

外部から来る訓練者の存在が、職員にも利用者にも刺激になる。

訓練者が、自信をつけて、居場所ができて、話せるようになるといった変化の過程に関われ、やりがいを感じた。



■協力事業所の声

対人面での不安が強い方など、さまざまな生活困窮者を受けれる中で、その人に仕事を教えるために従業員が一生懸命工夫する。そうすると、言葉のコミュニケーションが難しい外国人の方にもスムーズに理解されるようになり、みんなで助け合う仲間意識ができた。

(ヒアリング調査より)



(資料：横浜市就労訓練事業支援センター「ニュースレター」vo121) ※認定就労訓練事業所の声

2. 生活困窮者自立支援制度が目指す就労支援の実践に向けて 【実践編】

(1) 地域の就労支援体制をデザインする

地域において、連続性のある一体的な就労支援を実践する上で、就労支援の各事業の役割を柔軟に調整し、就労支援体制をデザインすることが考えられる。

□ 実践のポイント

①各事業の実施機関・団体等の得意分野を活かせる体制を組む

- ◇ 企業との関係づくりを通して、より多くの中小企業等が生活困窮者などの働きづらさを抱える人を受入れ、就労体験・訓練等から雇用に至る多様な働き方を開発していくためには、労働需要側への働きかけが欠かせない。
- ◇ 就労支援の各事業の実施機関・団体が、それぞれの得意分野を理解し、協働してアプローチしていくことが必要である。特に自治体はそうした協働体制を作る主体的な役割を担う。
- ◇ 自治体は、事業実施主体として、産業・企業振興の観点から商工労働部局や、障害者雇用でのノウハウや社会資源を共有する観点から福祉担当部局を巻き込むなど、庁内の実行体制を検討する。また、地域の経済団体（商工会議所、同友会等）を含め、庁内・庁外の体制整備に関わることが期待される。
- ◇ 認定就労訓練事業の活用・開拓にあたっては、必要に応じて中間支援組織の設置や専任担当職員の配置などにより推進・普及していく方法も考えられ、各事業の実施機関等が自治体に相談や提案をしながら取り組むことも重要である。

- 横浜市就労訓練事業支援センターは、複数の民間団体によって構成された「横浜市における中間的就労検討会」（2013年～）による政策提言なども踏まえ、新法（当時）で新たに位置づけられた就労訓練事業の円滑な実施に向けて横浜市において事業化された。
- 政策提言には、横浜市における中間的就労の量的質的拡充を図るために、①各分野の中間的就労を促進する中間支援組織の設置運営、②対象者が参加できる条件整備、③生活困窮者自立支援事業相談窓口のアセスメント力を向上する取り組み、④受け入れ事業所の支援員と雇用創出を支える条件整備等が盛り込まれている。
- また、中間支援機関の設置運営にあたっては、市の生活保護行政、障害者行政、青少年育成行政、教育行政等各分野の横断的で継続的な協働を提案しており、これに基づき、事業所・企業を対象にした講座・研修の実施などの認定就労訓練事業の推進に向けた各種取組を進めている。

（資料：横浜市就労訓練事業支援センターweb サイト）

https://youthport.jp/activity/img/pdf/chukanshurouteigen_201312.pdf

②事業間で支援プロセスにおける役割を柔軟に調整する

- ◇ 就労支援体制の組み方は地域の実情に応じて多様なため（参考：図表IV-2-1、第Ⅲ章(1)p18～27）、社会資源の状況や各事業の実施機関・団体の得意分野を踏まえ、支援プロセスにおける役割を事業間で柔軟に調整する。
- ◇ 体制整備にあたっては、自治体職員をはじめ、就労支援に関する各事業のスタッフが日頃から意見交換ができる関係性を構築していくことも重要である。
- ◇ そのためにも、各支援員は、幅広い関係者と調整することができるファシリテーションスキルを獲得していくことが求められる。このようなスキルは、支援プロセスにおいて事業間でのスムーズな情報共有にも役立ち、就労支援全体の質の向上につながる。

図表IV-2-1 参考：ヒアリング自治体の実践に基づく就労支援体制の枠組み(例)
※事業間の調整等の詳細は本報告書 p18～27 参照

人口規模等	自立相談 (就労支援)	就労準備 支援事業	認定就労 訓練事業	就労支援体制の 特徴・工夫	モデル 事例
政令市	社協	NPO法人	認定就労訓練担当(配置) 事業所開拓 企業支援 340事業所	・就労支援員、就労準備支援事業支援員、認定就労訓練担当の支援員(専任)が定期的に協力事業所・企業の開拓や就労訓練の利用を促進	名古屋市 →p21～
	直営	労協組合	無料職業紹介 株式会社 79事業所 事業所・企業支援、マッチング 中間支援団体	・事業ごとに強みを活かせる団体に委託 ・認定就労訓練事業は中間支援団体によりきめ細やかに推進	横浜市 ※有識者 ヒアリング
中核市 特別区 約30～50万人	社福	NPO法人	34事業所	・無料職業紹介事業による独自求人開拓とハローワークとの連携 ・就労準備支援事業の協力事業所を蓄積、就労体験から雇用にもつなげる	倉敷市 →p21～
	社協	社協	5事業所 協力量業所(32カ所)	・社会資源開拓は自立相談支援事業と就労準備支援事業で一体的に行う ・(高知市) 社協が認定就労訓練事業所の認定を受け、作業場所として協力量業所を登録。就労体験や就労訓練をゆるやかに展開 ・(松江市) 企業組合のノウハウを活かし認定就労訓練事業を推進	高知市 →p24～ 松江市 →p24～
	社協	NPO法人	4事業所 企業組合 事業所内に研修を受けた専任スタッフ	・就労準備支援事業の受託団体より専任で配置された就労支援員が、企業とのパイプ役となり企業支援を推進	豊島区 →p21～
中規模市 約10万人	社協	株式会社	1事業所 ※南アルプス市はHW先と連携 ※現状の利用は限定的	・就労支援員と人材派遣等のノウハウのある就労準備支援事業所が共同で就労支援のプログラムを構築 ・企業・協力量業所等の開拓は人材派遣業のネットワークも活用が可能	小樽市 →p20～ 南アルプス市 →p20～
小規模市 約3万人	社協	労協組合	2事業所 協力量業所(16カ所)のほかボランティアグループと連携	・就労準備支援事業者の協力量業所のほかボランティアグループと協働して地域の居場所・就労体験先や企業開拓等を推進	臼杵市 →p24～
	社協	NPO法人	社協	・社協が認定就労訓練事業所 ・事業間・支援員間の役割が柔軟 ・就労支援ノウハウをもつNPOにより、就労体験や実習を幅広く展開	熱海市 →p23～
都道府県 (町村部) ※広域	社協	NPO法人	社福 合宿型 19事業所	・就労準備支援事業は合宿型 ・認定就労訓練事業は社会福祉法人の公益事業として展開するほか、各町の就労体験先(協力量業所)とあわせて就労訓練事業所を開拓	静岡県 →p26～
	社協	労福協	40事業所 ※那覇市除く 限全体 プログラムは離島を含む地域ごとに社会資源を活用して展開 ※独自の企業実習等の事業と連携	・アウトリーチ活動や就労準備支援プログラム、企業開拓等は、地域ごとの既存の社会資源(障害、高齢、地域活動等)を活かして展開 ・県独自の企業実習制度等と連携	沖縄県 →p26～

(※ヒアリング結果に基づき HIT が独自に作成)

(2) 本人と一緒に、今後の暮らし方・働き方を考える

アセスメントは、支援プログラムを組み立てるために、必要なプロセスである。生活困窮者自立支援制度の就労支援におけるアセスメントは、本人の過去、現在の状況や周辺の環境から現在の働きづらさの要因を紐解いていくこと、そして、将来を検討する上で、本人のストレングス（強み、得意なこと、好きなこと等）がどこにあるのかを、本人とともに検討していくプロセスそのものである。

就労支援では、さまざまな支援プログラムの経験を通して本人が大きく変化していくため、アセスメントも初期、支援中期、支援後期と柔軟に修正していくことが必要となる。特に、将来を検討する上では、ただ単に就職活動の方向性を決めることだけではなく、働き方を含めた暮らし全体のイメージを持ってもらうことが重要であるため、幅広く将来像を話し合うことを意識する。

また、アセスメントの具体的な場面は、面談のほか、集団プログラムでの他者との関わり、ボランティア活動、就労体験、職場実習（訓練）等、あらゆる場面で可能である。

アセスメントの結果は、強みを伸ばすことや、課題に挑戦するための支援方針を本人とともに策定し、支援プログラムに反映させる。また、就労に向けて、本人の適性にあわせた職種・業務とのマッチングや、企業側の配慮や工夫によって、本人が働き続けられるような職場の環境調整等に活かす。

□ 実践のポイント

①その人の力を引き出せるよう、強み（ストレングス）に着目する

- ◇ 就労上の課題のみに着目するのではなく、本人の本来のニーズや就労の可能性に着目してアセスメントを実施する。働く環境によって求められる能力やスキル等は異なり、必要な支援や配慮（人的支援+環境整備）によって対応し得ることを踏まえておく。
- ◇ 例えば、他者とのコミュニケーションが苦手な人でも、本人の職業能力特性（例えばパソコン作業が得意、単純作業であれば正確に早くこなすことができる等）によって、企業が人手不足で困っている仕事を切り出し、マッチングすることにより能力を発揮できる可能性がある。
- ◇ 上記のように業務を見える化し、その中から適した作業を組み立てあらかじめ業務として再設定をするには、受入れ企業や事業所との関係性が重要である。支援員側の「受入れ依頼」で進めるのではなく、支援員が職場見学をしながら、どのような業務なのかを知り、具体的な切り出し例を提案していく視点が求められる。

②本人の強みや適性を活かせる仕事情報・知識を把握しておく

- ◇ 本人の強みは、自分では気づいていない、強みとっていないこともあるため、支援員は、就労の観点から本人の強みや適性に着目し、「この人の強みは、

こういう仕事や環境で活かせるのではないか」といった具体的な仕事内容と結びつけられるよう、地域の企業が求める職務等の情報を知識として持つておくことも重要である。

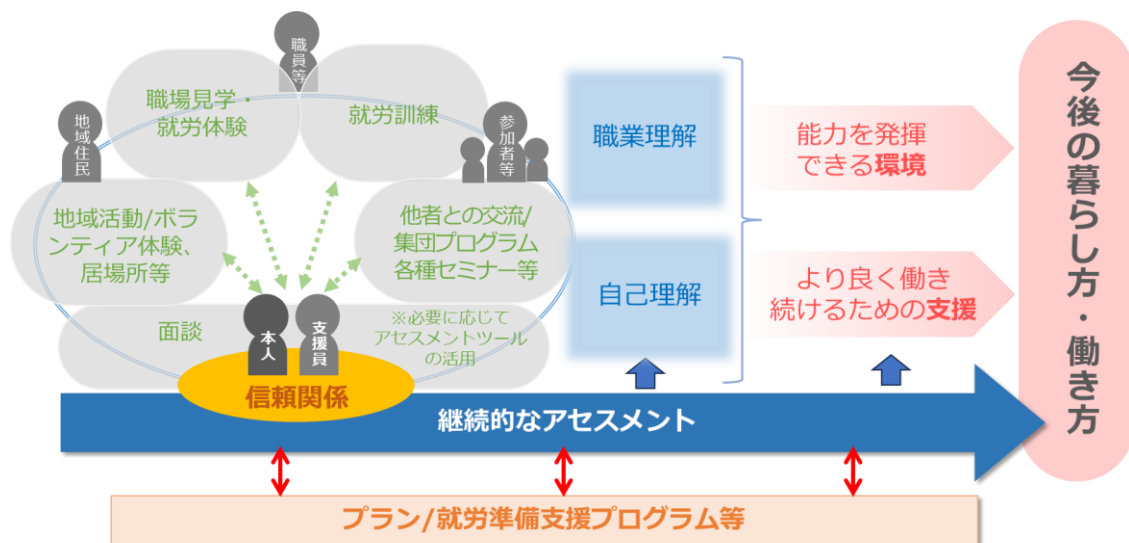
- ◇ 支援員は多様な経歴や背景を持っているため、企業経験がない支援員等も多く配置されている。そのため、まずは支援員自身の社会経験を振り返り、経験や視野が不足しているようであれば、企業見学を含め、支援員自身が地域に出て経験する場、働く場を実際に見ること、話を聞くことが必要である。

③本人の希望やニーズを理解しながら、今後の暮らし方・働き方を見通す

- ◇ 中には本人の希望が現実離れしていることや、就労に向けた準備が必要と思われるが「早く仕事をしたい」と本人が主張することなどもある。そのような場合にも、まずは本人の希望や思いを見出し、くみ取っていくことが必要である。
- ◇ その際、就職活動支援を行うのと同時に、うまくいかない場合の対応や就労準備支援事業に切り替えることができるように準備をしておくことも重要である。
- ◇ 支援員は、就職活動や本人が希望した取組がうまくいかない場合でも、失敗と捉えるのではなく、また、本人が失敗したという思いを引きずったままにならないよう、その経験にどのような意味があったのかをともに考え、適切な振り返りを実施し、支援方針を組み立て直すことが必要である。
- ◇ このようなプロセスを重ね、就労の可能性や課題等について客観的に理解していく中で、本人の思い描く暮らし方・働き方を一緒に考える。

→【参考】資料編「就労支援の実践から学ぶ個別事例集」：
事例2 (p7~9)、事例3 (p10~13)、事例4 (p14~17)

図表IV-2-2 今後の暮らし方・働き方を考える継続的なアセスメント



(3) 本人の希望やニーズに応じたプログラムを組み立てる

アセスメントを踏まえたプランを作成し、プログラムを実施する。

生活困窮者の多くが自尊感情や自己肯定感を損失し、自らのキャリア形成に向かうことができなくなっている状況にあることを踏まえ、その回復・醸成を図りながら、働きたいと思う気持ち、意欲を引き出し、1人1人に合った働き方の可能性を広げていく。

□ 実践のポイント

①アウトリーチ型のメニューで、対象者を支援につなげる

- ◇ 対人関係への不安などにより相談や社会とつながることが難しい人に対しては、まず「定期的な面談により外出する」「(興味のある) 場所に通う」「少しずつ他者とふれあう (慣れる)」などのプログラムが考えられる。
- ◇ 対象者にとって、「相談窓口」というと敷居が高く感じられることや、「生活困窮者支援」「ひきこもり支援」など名称でアクセスを躊躇してしまうこともある。すぐ仕事につきたい、就労に向けて取り組みたい人にとっては、短時間のアルバイトを行うプログラム等が社会参加の動機付けになることもあるため、多様なアプローチを用意しておくことが支援につながる。
- ◇ 居場所やフリースペース等における活動や内職のような軽作業自体もアセスメントの一環として、本人の強みや課題の把握につながるため、就労準備支援事業等の利用 (プラン同意) 前であっても「まず参加・体験してもらう」ことが重要である。

- もともと「就労準備講座」を年3回開催することから始めたが、講座という固いイメージがあることや、座学により集団で受けることが難しい方もいたため、プレ的なものからやってみよう、ということで、もう少し気軽に立ち寄って、いつ帰ってもよいフリースペースの要素をもったものを2022(令和4)年から始めたところ。(松江市)

- 複雑な事例やひきこもりの事例が増えてきており、「困っていませんか?」と相談につなげようとするのではなかなか外に出てくるのが難しい人に対して、「人手がなくて困っているから少し手伝ってくれませんか?」とお願いすることで外に出てきてもらうきっかけになる。その場に来てもらって内職などの軽作業を通してアセスメントも深まる。面談室で話をするだけでなく実際の作業の様子を見ることも大事。(臼杵市)。

②自尊感情を回復させながら本人の意欲を引き出す

- ◇ 多くの支援メニューを作っても、これまでの生育歴の中での挫折や失敗経験から、自尊感情や自己有用感を失っているために、本人の意欲が一定の水準に達しないと利用につながりづらく、丁寧なアプローチが必要である。
- ◇ 対象者が関心をもちそうなレクリエーションやイベントの要素を織り交ぜるなどの工夫や、本人が何に関心があり、どのような価値観を持っているか、どうしたら元気になれるのかといったことを支援員も一緒に行動しながら考え、自尊感情や自己有用感を育む「場づくり」が大切である。
- ◇ 本人の希望を尊重したり、支援員も一緒に動いたりしていくことで、自分自身が否定されず受け止められ、支援員が見守るという安心感の中で経験を重ねるうちに自信を取り戻し、結果として社会参加しようとする意欲や就労意欲を引き出すことにつながる。
- ◇ 支援員との関わりや出会いが、本人の社会参加への第一歩であることを意識する。

- その人がどうしたら元気になるのか、何に関心があるのか、それをできるだけ一緒に考えながら教えてもらうというスタンス。料理を作ることが好きであれば一緒に料理を作ってみるなど。就労とはあまり関係ないと言われるところもあるが、どんな価値観があるのか知ろうとするためには会議室での面談だけではわからないものもある。(倉敷市)
- 自己肯定感が低い方が多い。「これをしたい」「これが好き」というと、これまでは否定されることが多かった。それを我々が「いいじゃん！」と一緒に支援者も楽しんで。そうすると、みんなが苦戦してなかなかできないパズルなどを(対象者が)5秒で解いたりする。自信がついて楽しくなった、というところから、自分が得意なことに気づくこともあった。(南アルプス市)

③本人の参加意識を高めるため、支援（プログラム）の目的を明確にする

- ◇ 漫然とプログラムに参加してもらうだけでなく、本人の参加意識や意欲を高めるためにも、各支援を利用した先に、対象者それぞれに合った働き方での社会参加や自己実現につながるよう、プログラムの目的を明確にする。

※次ページ事例等参照

- ◇ 上記の目的を見える化するためにも、プラン兼事業等利用申込書や就労準備プログラム計画書を本人と共有しておくことが重要である。

【事例】男性・20代/就職活動困難/両親と同居

小・中・高校と新しい環境ではいじめにあっていた。高校卒業後、学校からの紹介でコンピューター関係の職場に就職するが、約1年で体調を崩し離職し、その後、製造請負業に就職するも半年で退職。スマートフォンなどでアルバイトを探し、web応募しても面接に至らず、自立相談支援機関に来所。

主な支援プログラムの目的と結果

目的	本人の状況	プログラム内容	結果
職業適性や対人関係の課題を見極める	面談で人との関わりの苦手さを言葉にする一方、接客をやってみたい	地域のお祭りで子どもに風船を渡すアルバイトに参加	⇒ なかなか声を出すことができなかったが小さい子の目線で風船を渡すなどの配慮ができた
	自分の特性を知りトラブルの原因について考えたい	若者サポートステーションに紹介(セミナー等に参加)	⇒ 担当者から、社会性の乏しさは感じられるが、聞かれたことには丁寧に答えられるとのこと
自分の強み等の適性を発見する	どんな仕事ならできるのか、自分に向いているのか知りたい	就労準備支援事業の就労体験に参加する	⇒ 同年代の参加者と穏やかに過ごし、クリーニング工場でタオルをたたむ作業をもくもくと取り組むことができた
職業経験を通して就労への自信をつける	決められた作業をできることについて満足、賃金がもらえる仕事を希望	認定就労訓練事業所で、高齢者入所施設の環境整備の仕事に挑戦する	⇒ 清掃や洗濯たみなど丁寧な作業が評価されたが、作業ペースが遅いことも指摘された
就労体験と生活習慣の改善等を一体で進める	これまでの経験や振り返り、医療受診等の結果、障害手帳の取得を決める	障がい者日中生活支援事業での就労体験に参加、外出機会を生活リズムを整える	⇒ 本人の人となりはよいが、作業ペースが遅いことで就労にはつながらなかった。その後、自分で見つけたアルバイトに応募

④本人の状況やニーズに合わせた社会資源を活用・開拓する

◇ 気軽に立ち寄ることができる居場所やフリースペース、職場見学・就労体験等の協力事業所、ボランティア活動等、本人に合わせたプログラムを考え、活用・開拓していく。

➔ **【参考】資料編「就労支援の実践から学ぶ個別事例集」：事例7 (p25~29)**

◇ 小規模自治体や離島・僻地などの地域では、訪問する頻度が限られることもあり、個別ケース(ニーズ)ごとに地域の既存の社会資源の中で活用できるものはないか、あれば一緒に参加させてもらうなどの工夫が必要である。

- 3年ほど前から、障害者の就労支援や高齢者の介護保険では届かない狭間にいる方を支援したいという意欲のあるキーパーソン(地域住民)とともに、社協職員と一緒に企業回り(訪問)をしながら企業開拓を行ってきた。そこで協力が得られることになった事業所が現在の16か所。この就労支援ボランティアグループと企業、社協の3者で就労体験や内職のプログラムの仕組みを作った。(臼杵市)

※就労支援ボランティアグループ「たんぼっぼの会」。令和元年8月に発足、会員30名・スタッフ5名で運営、制度の狭間にいる方に対して、施設での掃除や社協での作業等を通じて一般就労につなげる活動を行っている。『2年前から活動を始め、「内職作業募集」のチラシを片手に、地元企業を一軒一軒まわりました。その甲斐あって、最近では、カボスやトマトなどの野菜の選別や袋詰め、シール貼りや、商品の検品作業など、少しずつ色々な注文が来るようになってました。』(代表 麻生さん)。

<大分県社会福祉協議会地域福祉部発行「あなたの町にも地域共生の取組を! vol.1 より>

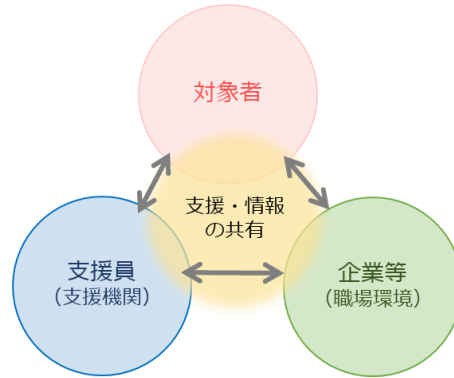
- 離島の場合、どうしても訪問する頻度が限られてしまうため、地元にある就労準備支援事業に近いような活動や企業といった社会資源を把握し、参加させてもらえるように調整していくという個別支援にならざるを得ない。（沖縄県）

例) 社協で実施している障害者の地域活動支援センターの作業で、菊を梱包する新聞紙を一定のサイズに切って分けるという作業。菊の栽培が出荷で非常に忙しい時期に、花卉園芸農業協同組合の方に協力してもらい、作業させてもらった/伊江島では島名物のラッキョウを加工する物産センターや海産物、ラム酒の工場などを当たって実習。季節限定だがシークワワーサー工場で人手が必要なときに2、3人が参加。等

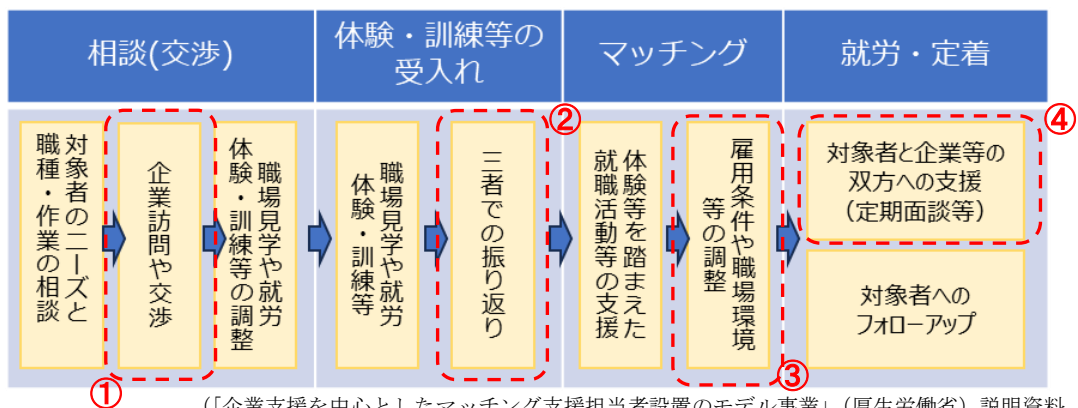
(4) 地域の企業との関係をつくる

働きづらさを抱える生活困窮者等が、それぞれに合った働き方や社会参加を実現するためには、支援プロセスにおいて、対象者・企業等の多様な働く場・支援員（支援機関）の関係構築が必要である。具体的な取組としては、次の①～④などがあげられる。

図表IV-2-3 対象者・企業等・支援員（機関）の関係イメージ



図表IV-2-4 企業との関係づくりのプロセス（例）



（「企業支援を中心としたマッチング支援担当者設置のモデル事業」（厚生労働省）説明資料、西岡正次氏（A⁺ワーク創造館（大阪地域職業訓練センター）資料を参考に作成）

□ 実践のポイント

①地域の中での人手不足感・ニーズを拾い、企業・協力事業所等を開拓する

- ◇ 企業・協力事業所等との関係性の構築にあたっては、地域に出向き、労働需要側のニーズを把握すること、人手が少なく困っているという声を拾いながら、顔の見える具体的な「誰か」とつながることからスタートする。
- ◇ 「就労体験に協力してください」「求人はありませんか」といった漠然とした問いかけではなく、就労体験・訓練等を活用した人材確保や仕事の切り出しを通じた業務・職場環境等の見直しにつながることを、受入れに伴う企業サポートなどについて具体的に伝えることが重要である。（認定就労訓練事業も同様）

- 病院でも作業の切り出しをしていただき、医療事務の仕事に関わりたいという利用者ができるプログラム（就労体験～就労訓練）を調整してもらった。看護業界の人員不足など病院として課題意識をもち、コンサルタントを入れながら勤務環境改善に取り組んでいるところに話がつながった。就労訓練から切り出した仕事が将来的に就労（雇用）につながる可能性もある。（高知市）

- 大手の企業は大人数を短い時間で使いたいという企業が増えている。そういう面では、レジ打ちなどは随時募集している。企業としても数はほしい。皿洗いも若者はこない。客室清掃も4、5時間の作業だが、大変なので若者はこない。
- 一方、どこまで本格的に企業開拓してよいか、バランスが難しい。ある企業から清掃の求人をいただいたが、そのタイミングでできそうな人がいなかったこともある。「今は該当する人がないので、できたら連絡します」といった将来につながるやり取りも重要である。（熱海市）

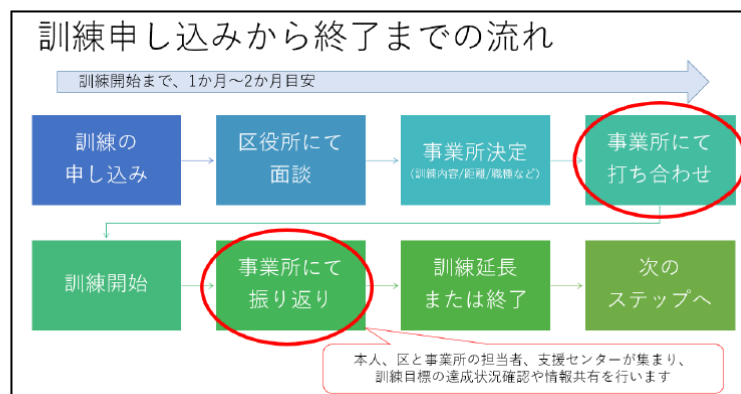
②就労体験・訓練後の「振り返り」

- ◇ 職場見学・就労体験や就労後では、成功・失敗体験を本人がどのように受け止めているのか、新しい気づきがあったのか、また新しい課題や強みが見えたのかを言語化するためにも、「振り返り」のプロセスが重要である。体験したままにならないよう、時間を置かずに面談を実施することが望ましい。
- ◇ 支援員が、受入れ先の担当者から意見を聞いた上で、それを踏まえて本人と支援員とで面談を行う方法、本人と支援員、受入れ先の3者を交えて行う方法などが想定される。

➔【参考】資料編「就労支援の実践から学ぶ個別事例集」：事例4 (P14~17)

- 訓練中は、1か月に1回程度、4者（本人・自立相談支援機関・受入れ事業所・横浜市就労訓練事業支援センター）で振り返りを行う。そこで、良かったところや次はどこを目指そうかといったことを話し合うようにしている。このプロセスは非常に大事にしている。（認定 NPO 法人ユースポート横濱 熊部委員ヒアリング/2024年8月、ヒアリング時拝受資料より）

b 訓練実施のフロー ※横浜市作成の「利用のてびき」冊子もあり



③ともに働くための環境整備

- ◇ 就労体験・訓練先から直接雇用となる場合（認定就労訓練事業における非雇用型から雇用型への移行を含む）では、本人と企業がお互いの得意と不得意を理解した上で働くことができるメリットがあり、職場定着しやすい。
- ◇ 支援員は、面談や体験・訓練、その他さまざまなプログラムを通じた本人とのアセスメント結果の共有をもとに、「こう工夫すれば能力を発揮できる」、「こういう業務・状況は配慮が必要」、など、体験先や企業に働きかけて具体的な環境整備を行うことにより、よりその人らしく働き続けられる可能性を高めることにつながる。その際、こちら側の一方的な要求にならないよう、職場環境等をよく理解した上で提案する。

④企業アプローチとしての定着支援

- ◇ 企業アプローチのひとつとして、定着支援が重要である。定着支援とは、就労後の様子を本人に電話連絡で確認をする等の手段があるが、それだけではなく、職場側にも就労した後の本人の状況について確認を取ることや、新たな課題に対して職場と本人の間に入って調整することも含む。
- ◇ 上記のような支援は、独自に企業開拓や求人開拓をし、直接企業との関係性を持っていることにより実現することができる。
- ◇ 定着支援により「投げっぱなし」ではなく、受入れに伴い本人側の生活面や心理面でのサポートを行うことができる点が、企業側のメリットとなる。また、本人が職場で能力を発揮して働き続けることができれば、ひとつのモデルとなり、他の求職者の受入れや雇用を相談する際の信頼にもつながる。

→【参考】資料編「就労支援の実践から学ぶ個別事例集」：
事例3 (p10~13)、事例10 (p36~39)

- ◇ なお、本人に対する定着支援の方法としては、事業を利用した卒業生にプログラムの講師として経験談を話してもらうなど、事業を活用して活躍してもらうといった方法で実施される例もある。
- ◇ 採用によりつながった企業に対して生活困窮者自立支援制度による就労支援の取組状況を定期的な通信等により発信し、事業に対する理解の促進や他の対象者の受入れ等の相談ができるような関係づくりなども考えられる。

- 支援につながるまでの社会的孤立が長い方が対象者として多く、一旦、就労などにより支援が終結した後も、ゆるくつながりを持ち続けていく。仕事にはつながったものの、社会や地域から孤立しないよう、年に1~2回は葉書や手紙を送り、就労準備支援メニューの一つである「社会参加イベント」などへの参加を呼びかけている。このプログラムでは、事業卒業者との交流を目的に、公共機関を利用して公共施設等を見学する。どこどこに行くとこのくらいかかる、という経験から金銭感覚を養う趣旨も含めたプログラム。（高知市）

- 広報誌である「たるさぼ通信」を発行する度にメールや郵便等により企業等へ周知している。（小樽市）
→「第三章 ヒアリング調査結果」p43 参照

(5) 認定就労訓練事業を活用する

全国的に、認定を受けたものの受入の実績がない事業所も多く、地域によっては利用が進んでいない状況がある。

認定就労訓練事業は、「受入れ側の企業・事業所にも余裕がないと難しい」「どこも人員不足で就労訓練を受入れできる体制を作ることが難しい」など、受入れに関するマンパワー不足も指摘されている。

一方で、受入れた企業・事業所からは、訓練に来る中で「挨拶ができるようになった」、「目に見えて表情が豊かになった」「笑顔が増えて明るくなった」などの声もあり、利用者の変化に対してやりがいをもって取り組んでくれている状況もある。

地域に今ある認定就労訓練事業所を中心に、就労訓練を希望する対象者のニーズに沿う形で事業所側の受入体制や人手不足にある業務、職場環境等に向き合いながら、利用を促進することが重要である。

□ 実践のポイント

① 認定就労訓練事業において従事する業務の切り出しを提案する

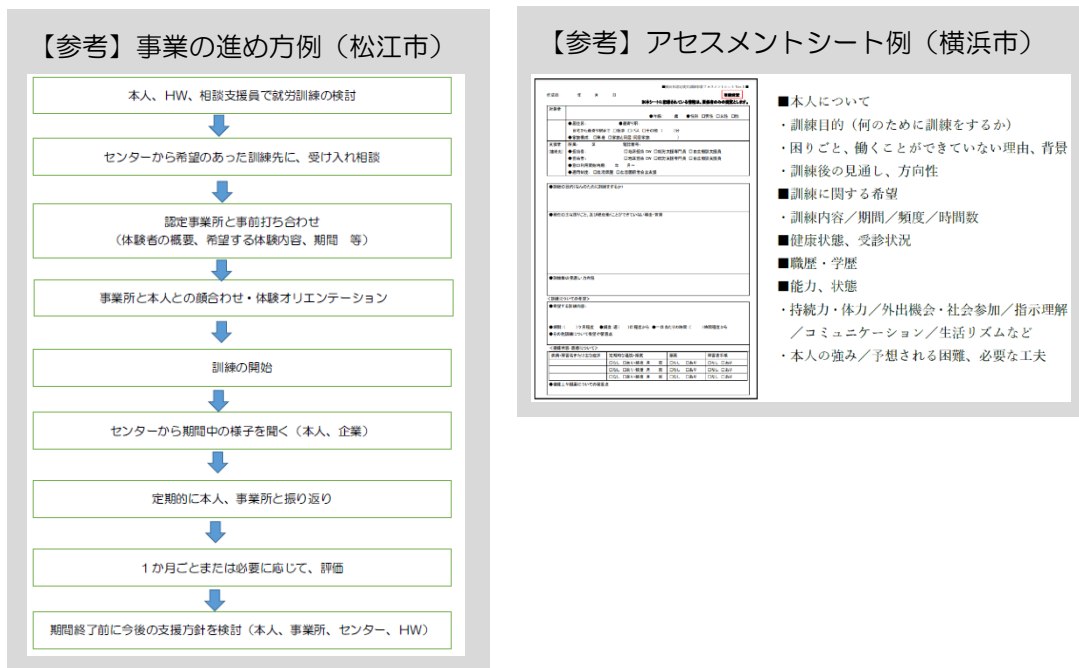
- ◇ 就労訓練では、本人の状況に合わせて仕事の内容や労働時間、職場環境等の配慮事項などを調整・カスタマイズすることが求められる。
- ◇ 必要に応じて、既存の業務を分解すること等により、訓練における業務の切り出しについて提案する。
- ◇ 現在の業務をさまざまな視点で整理し、分解した業務の中から認定就労訓練事業の利用者に合った業務を組み合わせる。
- ◇ 認定就労訓練事業の受入れのためだけでなく、日頃の業務内容の見直しや効率化につながるよう、業務の切り出しの例として、以下のような方法も考えられる。

- 1) 人材ニーズの高い職務・タスクを聞き取る
- 2) 「本務」と「周辺業務」に分け、担当スタッフ（現行体制）では「残業になってしまう」「後回しになってしまう」「重要だが手がつけられていない」といった業務を抽出する
- 3) 2) で抽出した業務について、タイムスケジュールに沿って整理・分析し、作業内容・職務の情報をとりまとめる
- 4) 本人の希望や状況、就労訓練事業における就労形態（非雇用型・雇用型）に応じた作業を割り当てる

②認定就労訓練事業の進め方（利用プロセス）を整える

- ◇ 訓練の具体的な進め方について、認定就労訓練事業所と確認ができるように、個別の受入れを行う中で軌道修正しながら整理する。
- ◇ 認定就労訓練事業の利用が多い自治体では、「アセスメントシート」「プロフィールシート」等を独自に作成しているところもある。本人との面談等によるアセスメントシートの作成を通して、候補の事業所を思い浮かべ、事業所側へも聞き取りを行った上で、具体的に受入れを進める。
- ◇ 受入れる側（認定就労訓練事業所）において、訓練内容や職場環境等について事前の準備・態勢を整えられるよう、認定事業所との事前の打合せ等を行い、アセスメントシート等を踏まえた本人の状況や希望等を共有することが重要である。

図表IV-2-5 ヒアリング自治体等における訓練事業の進め方・アセスメントシート（例）



認定就労訓練事業所の声から

「本人と訓練内容・環境との間に体力面や、対人面などでミスマッチが生じてしまうことがある。事前に訓練生の特徴や困りごとを詳しく理解できると、事前準備ができ、受入れる態勢が整えやすい。」

「丁寧に話を聞きながら対応したいが、繁忙期には受入れ担当者の時間を十分に確保することが難しいときがある。」



（資料：横浜市就労訓練事業支援センター「ニュースレター」vol21）

③就労支援担当者等とのコミュニケーションを大切にする

- ◇ 認定就労訓練事業開始後の支援状況は、受入れ事業所側に委ねる面も一部生じることから、自立相談支援機関の就労支援員等が「振り返り」の実施を含め、本人と企業に伴走していく体制を確保することが重要である。
- ◇ 訓練事業所には「就労支援担当者」を配置することとされている。特に一般企業においては福祉関係や就労支援の知識等を有する職員がいない場合も想定されるが、訓練を進める上で本人の困りごとが表面化した際は、本人や支援者（支援機関）に伝えてもらいたいことなど、あらかじめ話し合っておく。
- ◇ 横浜市「就労訓練事業交流会」では、送り出す側（自立相談支援機関等）と受入れる側（認定就労訓練事業所）とが同じテーブルで日々の意見や感想を情報交換・交流する機会を設けることにより、双方向で事業の価値を実感するきっかけとなり、利用の促進やモチベーションの維持につながっている。

- 訓練事業所の人手不足の解消が目的では？と誤解されることがあるが、実際にはきめ細やかなサポートが必要な方が対象。事業所以外からのサポートが全くなければ、訓練受入れを通常の業務の中で行っていくのは大変な面がある。
- 横浜市就労訓練事業支援センターの主催により、令和5年から「就労訓練事業交流会」を開催しており、令和6年11月にも開催。市（各区）の支援員や担当部局の職員、認定就労訓練事業所の担当者等の総勢51名が参加し、交流を深めた。
（認定 NPO 法人ユースポート横濱 熊部委員ヒアリング/2024年8月等）

就労訓練事業交流会を実施しました
2024年11月14日（木）、神奈川中小企業センタービル多目的ホールにて「就労訓練事業交流会」を開催しました。当日は、送迎のバスが駅前に到着し、送迎のバスを乗り換えて交流会会場まで送迎されました。

ご参加いただいた方々
 ・認定就労訓練事業所様：24名
 ・区生活支援課の支援員様：22名
 ・横浜労働福祉会館 厚生労働部：5名

第一節では、五全全機株式会社様と横浜労働福祉会館様におけるケースを紹介しました。認定事業所の方々は生活支援課の支援員の方からも貴重なコメントをいただき、ケース理解を深めることができました。
 第二節では、認定事業所の方々と区生活支援課の支援員の方々が一緒に、グループに分かれて就労訓練事業についての意見交換を行いました。

グループトークの様子（一例）

「ちょっと困ってしまう訓練生はどんな人ですか？」
 「あまりないですよ。訓練に来ることができたら、コミュニケーションや仕事のスキルは職種で変わります。」
 「就労訓練を利用するハードルが下がりました！」

認定事業所の皆さんからのご意見・ご感想（一例）

【気づき】
 訓練の内容を考え、伝えるためにマニュアルを作成する過程で、自分たちの業務を整理する機会となった。訓練生とのやり取りから考えることで、自分たちも成長につながる。また訓練生の成長の促進にやりがいを感じるなど、双方で成長の思いがされるため、就労訓練が継続できると感じた。

【悩み・心配】
 一般就労を目指すことを考えると、身だしなみや道具について注意すべき点があった場合、どのように声をかけをすべきか等。その注意がきっかけとなり就労訓練を中止してしまうのではないかと心配である。

【ご要望・期待】
 訓練に当たっては業務のやり取りをどのように実施したかを具体的にアピールすれば、一般企業における認定事業所の役割が薄くなるだろう。訓練後の訓練生の様子を知ることができれば、訓練内容が有意義だったのか、対応に問題がなかったのかを振り返ることが出来る。

区支援員の皆さんからのご意見・ご感想（一例）

【気づき】
 福祉施設から一般企業まで、認定事業所の種類が多岐にわたり、多様な訓練が提供されていることが分かった。就労訓練では、訓練生の生活を支える役割。その上で働きがきになっていることが、安心感を得た。実際に訓練の様子を知ることができ、今後の就労訓練の提案がしやすくなった。

【訓練生のやりがいを持つことが大切】という話を聞き、モチベーションに関する支援の重要性を改めて実感した。訓練をする上で、訓練生にとって取り組むことが出来るようになることも、非常に重要なことと感じた。

【悩み】
 訓練に当たることがなかなか難しい、特にプライドが高いと感じて、どのような声をかけて就労訓練につなげるかが課題である。

【ご要望】
 認定事業所が地域に密着しているため、地域ごとにはバリエーションが異なる。視察がしやすくなる。交流会を通じて、就労訓練事業は単に訓練を行う、受け手だけでなく、送り出す側も学び、地域でのつながりや交流合いにおいて重要な役割を果たしていることを再確認いたしました。いただいた貴重なご意見を参考に、今後もより良い就労訓練事業の運営に努めてまいります。

- 認定就労訓練事業の利用期間は個人差がある。辞めない限りは、最低でも3か月は寄り添うようにしている。ずっとついているわけではなく、初めのステップでうまくいけば、月1回の面談で利用者及び受入れ事業者と交流・情報交換をしながらフォローしていく。（名古屋市/就労支援推進員）
- 「振り返り」として、まず働いてみた日にどうだったかというフィードバック。その後、1週間、2週間と様子を伺いながら、何か問題があれば受入れ事業所とも話をしながら調整する。必要に応じて、企業・事業所側に「もう少しこうしてほしい、こうしてくれたらこの人が動きやすいかもしれない」ということもお伝えする。利用者が仕事にやりがいを持っているかは重要なポイント。人間関係や仕事が合わないとなると、無理して続けてしまい心のバランスが崩れるといけないため、慎重に見極める。（名古屋市/就労支援推進員）

④地域特性に応じた認定就労訓練事業所の活用を広げる

- ◇ 認定就労訓練事業所を広げるためのアプローチとしては、自治体規模等によって異なることが想定されるが、以下のような方法が考えられる。
 - ・ 知り合いの紹介や関係団体からの情報提供を受けて連絡をする。
 - ・ 商工会議所や中小企業家同友会等にアプローチする。
 - ・ 職場見学や就労体験先になってもらう。(その上で、認定を受けることを検討)
 - ・ 無料職業紹介所を通して理解のある企業・事業所等にアプローチする。
 - ・ 求人情報を手掛かりに気になる企業に電話で紹介、訪問する。
- ◇ 高知市では、認定就労訓練事業所の認可を社協が受け、その「作業場所」として、地域の協力事業所を指定し、就労訓練事業を実施しており(概ね就労体験の協力事業所と重複する)、どのような人口規模においても汎用性が高い展開方策の一つである可能性がある。(※ガイドライン p7「4-2-2 就労の実施形態」の②に該当)

4-2-2 就労の実施形態

○ 就労訓練事業での就労の実施形態としては、以下のような形態が想定される。

- ① 対象者が単身又は対象者同士のグループで通所し、業務時間中も自律的に、あらかじめ決められた作業を行う形態
- ② 社会福祉法人、NPO法人等の支援スタッフが対象者に同行し、対象者が、当該スタッフの指示の下、地域の協力事業所等の中で、訓練として、対象者の状態や就労訓練事業における就労形態(雇用型、非雇用型)に応じた作業を行う形態

- 「就労訓練たより」は、登録事業者宛てに作成したもの。コロナ禍で認定就労訓練事業所との交流が断絶してしまった経緯があり、全部の企業を回るのとは不可能なため、何かアクションをとるということで発行。求人情報などから目星をつけた企業に飛び込みで就労訓練をお願いしても、なかなかすぐに受入れてもらえない、理解してもらえないことが多い。最近では、就労訓練の希望者がいて、その方について具体的に「どうですか？」という形で訓練事業所を増やしていくスタンスに変えつつある。(名古屋市)

- 就労準備支援事業における「就労体験」の作業は、社協内または市内の協力事業所において実施。協力事業所は、規定や基準を設けているものではなく、あくまでも生活支援相談センターの就労支援にご理解をいただいた企業に対し、どのような作業ができるか等を記入する「協力企業登録」を行うもの。菓子製造工場は請負契約で、季節ものの菓子商品の包装作業を行い、個数あたり〇円で社協から請求し、歩合で報奨金として利用者にお渡しする。(高知市)
- 他方、認定就労訓練事業で実施する場合は、仕事の距離感として就労の手前、プログラムの内容としても実際の「仕事」の内容に近く、負荷が高いもの。利用期間は概ね3か月までをベースとしている。利用期間の限度・期間を経て雇用につながっていくことが難しい。認定就労訓練から職場体験を経て、再び就労準備支援事業のつながりで支援していくことも、アップダウンを繰り返しながら進む。(高知市)

⑤就労訓練実施後の「つなぎ先」と「つなぎなおし」

- ◇ 当初より「雇用型」での訓練利用ではない場合、受入れ事業所の事情や訓練時の本人の状況（再アセスメントが必要な場面）により、他の支援に切り替える場合がある。例えば、新たな課題に対応するために、就労準備支援事業の支援プログラムの利用や、本人の実情に応じて、B型事業所（利用者もしくはスタッフ（従業員）側）や有償ボランティア活動等につながる場合もある。
- ◇ 就労訓練後に振り返りを実施しながら、就労訓練時の状況と今後について本人と検討する必要がある。その際、今後の「つなぎ先」のイメージと、「つなぎなおし」ができる体制を確保しておくことが必要である。

⑥利用しやすさについて継続的に検討する

- ◇ 本人が希望する就労体験先や訓練先が、通勤範囲にないことから交通費が捻出できない場合や、事業所側が保険料を負担しなければならない場合がある（補助事業で負担は可能ではある）など、費用面でのインセンティブの必要性に関する意見がある。
- ◇ 制度上のハードルについては、自治体とともに対応や工夫点などを継続的に検討することも必要である。

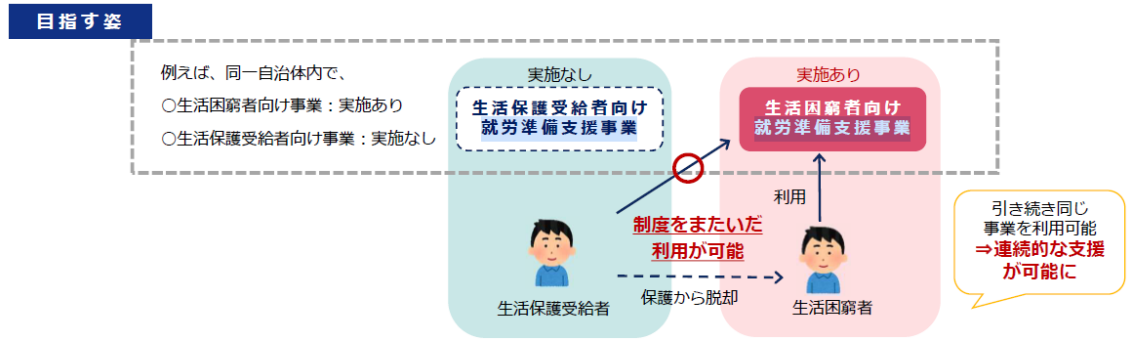
- 保険について、通常、事業所ごとにボランティア保険に入り、受入れごとに何百円の費用がかかり、やや面倒な手続きが生じる。事業者さんの負担を減らす意味で、3年前より横浜市から事業費の補助を受け、センターが一括して団体加入（***損保のレクリエーション保険）することにより、事業所ごとの手続きを不要にすることで一部クリアした経緯もある。ただし、割高にはなる。（認定 NPO 法人ユースポート横濱 熊部委員ヒアリング/2024年8月）

(6) 被保護者の就労(準備)支援を一体的に進める

現行では、生活困窮者向けの事業は生活保護受給者を対象としていないため、生活保護受給者向けの事業（現状は予算事業で実施）を自治体が発行していない場合には、生活保護受給者は就労準備支援事業等を利用することができない。

※就労準備支援事業実施率：生活困窮者向け 83%、生活保護受給者向け 40%（2023 年度予定）

2024（令和 6）年 4 月 17 日成立の生活困窮者自立支援法等の一部を改正する法律において、生活保護受給者も特定被保護者と認められた場合、生活困窮者向けの就労準備支援事業等を利用することが可能となる。



被保護者就労準備支援事業を実施しているヒアリング自治体・支援員の意見をまとめると、生活困窮者も生活保護受給者も、基本的な支援プロセスは共通するものがあると考えられる。また、検討会においても、状態像として生活困窮者と生活保護受給者で大きな差異があるわけではなく、それぞれの支援者側（自立相談支援事業の就労支援員・就労準備支援事業支援員等/生活保護ケースワーカー・就労支援員等）の就労支援に対する姿勢や意識を共有することが重要ではないかという意見が出された。

生活困窮者の「尊厳の確保」を基軸にした支援の源流は、生活保護の「当事者性を尊重した支援のあり方」にあるものと考えられる。

(指導及び指示)
 第二十七条 保護の実施機関は、被保護者に対して、生活の維持、向上その他保護の目的達成に必要な**指導又は指示**をすることができる。
 2 前項の指導又は指示は、被保護者の自由を尊重し、必要の**最少限度に止めなければならない**。
 3 第一項の規定は、被保護者の意に反して、**指導又は指示を強制し得るものと解釈してはならない**。
 (相談及び助言)
 第二十七条の二 保護の実施機関は、第五十五条の七第一項に規定する被保護者就労支援事業を行うほか、要保護者から求めがあつたときは、**要保護者の自立を助長するため**に、**要保護者からの相談に応じ、必要な助言**をすることができる。
 (生活保護法より)

- 「被保護者就労支援事業」は第 27 条の 2 に位置づけられている。自立支援プログラムとして実施する事業は、第 27 条の 2 に基づく「自治事務」と考えられる。
- 「被保護者就労準備支援事業」「被保護者家計改善支援事業」についても、本人の同意に基づく支援が行われるべきものであり、そこに第 27 条第 1 項の「指導」「指示」が入ることはないと考えられる。

(※参考：「生活保護受給者の社会的な居場所づくりと新しい公共に関する研究会」報告書概要・一部抜粋)

5 社会的居場所の確保と新しい公共との協働を促進するために (1) 考え方	
① 自立支援のあり方	生活保護受給者の置かれている状況を把握し、自立支援を行うことが必要。経済的自立、日常生活自立、社会生活自立の三つの自立は、並列の関係であるとともに、相互に関連するもの。
② 多様な「働き方」の考え方	企業就労等の有給労働に就くことだけを目標とするのではなく、仕事に就く前段階の就業体験・技能習得や社会的就労を通して段階的に就労に向けたステップを踏んでいくことの効果や、ボランティア等を通じた社会参加の機会を作り、生活保護受給者が自尊感情や他者に感謝される実感を高めていくことが、生活保護受給者自身の持つ力を引き出す支援として意義がある。
③ 当事者性を尊重した支援の在り方	生活保護受給者の支援に当たっては、個々の違いを出発点とし、できる限りその意欲や自立性を高めていくという視点が重要。

また、2019（平成 31）年の「生活保護受給者に対する就労支援のあり方に関する研究会報告書概要」には、生活保護受給者に対しても 3つの自立（日常生活自立・社会生活自立・経済的自立）の視点から支援を行うとまとめられている。

生活保護受給者に対する「就労支援」のあり方の見直しについて (生活保護受給者に対する就労支援のあり方に関する研究会 報告書概要)	
現状と課題	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 生活保護制度では、「日常生活自立」、「社会生活自立」、「経済的自立」の3つの「自立」を支援するため、「自立支援プログラム」として対策を推進してきたが、就労支援については、主として就労阻害要因の少ない者を対象に、一般就労による経済的自立を目標とした支援が実施されてきた。 ○ これまでの就労支援については、事業参加者のうち約半数が就労に結びつくなど一定の効果は上げてきたが、一方で、現に生活保護を受給している者は、高齢化していたり、障害が窺われる者や就労経験が乏しい者、ひきこもりなど就労に向けて課題を多く抱える者の割合が増加している現状にある。 ○ 一般就労に向けて課題を抱える者については、本人が就労を希望していてもそもそも就労支援の対象から除外されたり、対象者に応じた効果的な就労支援が行えず、一般就労に結びつかないまま支援期間が終了してしまう場合も見受けられている。 	
見直しの考え方	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「働くこと」は、労働の対価として収入を得ることの他にも、働くことを通じて、社会とのつながりや自己のやりがい、達成感を得ることも重要な要素であり、生活保護受給者に対する就労支援についても、一般就労だけでなく、多様な働き方を通じて生活を豊かにするための就労支援の充実を図る。 	
見直しの方向性	
1. 自立支援のあり方の再整理	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者や障害者、就労に向けて課題のある者など、支援が必要な人に対する確実な支援の実施 <ul style="list-style-type: none"> ・ アセスメントの強化による個々人の課題や本人の意向の十分な把握 ・ 課題に応じた包括的・個別的な支援の実施
2. 課題を抱える者に対する就労支援のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「一般就労」のみではなく、本人の課題や意向に応じ、日常生活自立や社会生活自立も目標とした「多様な働き方」に向けた支援 <ul style="list-style-type: none"> ・ 他者との交流や本人の生活の質の向上など「働くこと」の意義の評価、就労意欲の喚起 ・ 中間的就労や個別求人開拓など、課題を抱えた者が働ける場などの確保 ・ 就労した者が就労を継続できるような支援
3. 就労支援を行うための体制・連携方策のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 関係機関との連携強化等による支援体制の強化 <ul style="list-style-type: none"> ・ 就労支援員の増配置やケースワーカーとの協働による組織的な支援、生活困窮者自立支援機関との連携 ・ ハローワーク、シルバー人材センター、障害就労支援機関などとの連携体制の強化
4. 就労支援の実施状況の評価のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 課題を抱える者に対する就労支援についてきめ細やかな効果の把握・評価 <ul style="list-style-type: none"> ・ 年齢階層別の就職率・増収率など適切な評価指標の整理 ・ 日常生活や社会生活の改善に関する評価指標の設定
5. 稼働能力の評価、指導指示のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 稼働能力の評価や指導指示のあり方の再整理 <ul style="list-style-type: none"> ・ 稼働能力の評価を行う場合の判断項目や判断例の整理 ・ 「就労指導」と「就労支援」の区分や、手順等の整理

生活困窮者には「支援」、生活保護受給者には「指導」という印象が強い傾向が未だに残っているものの、両制度における自立の概念や、就労の意味や意義、本人の意思を尊重して、本人を主体とする支援のあり方というものは本来共通していることを改めて共有したい。

□ 実践のポイント

①両制度の担当者の共通認識を深める

- ◇ 個別ケースの支援や合同研修等を通じて、両制度の担当者の就労支援の基本的な考え方等について、共通認識を深める。

②支援プログラムや社会資源の情報を相互に共有する

- ◇ プログラムの構築や地域の社会資源の活用・開拓に関して、両制度が協同して取組み、情報を共有する。
- ◇ 共通プログラム等を通して、相乗効果による事業利用者のモチベーションの向上などにつなげる。

→ **【参考】資料編「就労支援の実践から学ぶ個別事例集」：事例 1 (p4~6)**

第V章 おわりに

本調査研究事業では、ヒアリング調査や検討会での議論等を踏まえ、「手引き」改訂に向けて反映・検討すべき事項をとりまとめた。最後に、そうした議論等を通じて見えてきた生活困窮者自立支援制度における就労支援の今後の課題や展望について示す。

(1) 分野を越えた包摂的な就労支援への広がり

- 「手引き」改訂の基本的な方向性として、「連続性のある一体的な就労支援」の必要性を掲げている。このことが実践されることにより、本人の状況や希望、価値観等に対応したプログラムへの参加や、行ったり来たりする状態像に応じた事業間の行き来が柔軟に行われ、就労が困難な生活困窮者等に沿った就労支援が展開されることが期待される。
- また、本人に合わせた多様な「参加する場・働く場」を増やしていくプロセスでは、生活困窮者自立支援制度以外の制度・分野に活用できる既存の社会資源がないか、支援員が地域に出向いて探してみることから広がり生まれる。ヒアリング先においても、生活困窮者の就労体験の協力事業所やプログラムの受入れ先として、障害福祉サービス事業所やひきこもり支援機関等が運営する事業所を活用する場合もあり、就労支援のノウハウも共有されている。
- このように、生活困窮者等を受入れる地域の社会資源を事業間だけでなく制度(分野)間においても共有しつつ、支援者同士の情報共有を図ることは、複数の制度にまたがる支援プログラムへの参加や行き来のしやすさにもつながるため、当事者にとっての選択肢も広がっていく。
- 現状では、生活困窮者のほか、障害福祉サービス、ひきこもり地域支援センター、地域若者サポートステーション事業等、対象者別に仕切られた支援体系(事業)となっている。今後、属性を問わず「働きづらさ」を抱える人の多様な働き方の実現に向けた分野を超えた包摂的な就労支援方策が充実することが期待される。

(2) 地域の企業との関係づくりの促進

- 本調査研究のヒアリング調査から、生活困窮者自立支援制度の理念の一つ「生活困窮者の自立と尊厳の確保」に基づき、各事業の支援員が、本人の願いや希望を中心に据えた支援を実践していることをあらためて確認することができた。
- 対象者1人1人に寄り添い、自己肯定感や意欲の向上、生活習慣の改善、社会参加機会の創出などの日常生活自立・社会生活自立の側面として、対象者への働きかけに重

点を置いた支援が行われる一方で、「協力事業所の連携・開拓が不十分」「企業開拓が重要なことはわかっているが、どのように開拓すればよいかわからない」といった声も多く聞かれる。

- その人に合った就労体験・訓練等のプログラムや就労先を開拓するためには、職務分析を行うことで、企業にとって専門的な知識が必ずしも必要でない仕事や手間がかかるために手をつけられていなかった仕事等を切り出し、それを生活困窮者等の仕事（プログラム）として提案することも重要である。
- また、受入れや雇用にあたっては、本人側の生活面や心理面でのサポートを行いながら、企業の職場環境をよく理解した上で、本人が適性を発揮して働ける職場づくりや柔軟な働き方を企業と一緒に考え、提案・調整することが必要である。
- このような企業への働きかけは、企業との関係性を築き、対話を重ねることが不可欠である。就労支援に関わる支援員の専門性においては、本人に向き合うことと、労働需要側である企業の思いにも寄り添いながら交渉していく姿勢などがより重要であることをあらためて捉え直す必要があると思われる。

(3) 自治体による新たな働き方・仲介の仕組みの普及

- 我が国の雇用施策は、国のハローワークを介在しての企業（求人）側と求職者側とのマッチング（一般職業紹介）を主として行われてきた。生活困窮者自立支援制度における就労支援では、ハローワークによる仲介も活用しつつ、独自に開拓した地域の企業と協働して就労体験や訓練等を行っていくこと、無料職業紹介事業による企業サポートなどをベースに、企業へのアプローチを推進していくことが可能となっている。
- この枠組みを活かし、職場見学や体験・訓練等を通して本人と企業の双方が職務内容との適合性や職場環境を確認した上で雇用につながる人が増えれば、慢性的な人手不足に悩む中小企業等にとって、業務の効率化や状況を改善する一助となる。また、生活困窮者や就労困難者等が働き続けられるような職場の環境調整は、すべての人が働きやすい職場づくりを醸成する。
- 上記のような支援付きの仲介プロセスは、企業にとって一般的な仲介プロセスとは言い難く、一方、人手不足に悩む企業にとってはこうした手法が有効な可能性がある。生活困窮者自立支援制度において、こうした就労支援のプロセスを幅広く普及していくような工夫が必要である。
- 生活困窮者自立支援制度における企業へのアプローチは、自立相談支援事業の就労支援員や就労準備支援事業支援員等の個人的な活動に依拠せざるを得ない状況がみられる。ヒアリング先では、自立相談支援事業の就労支援員を専任として個別求人開拓等の企業へのアプローチに取り組む事例や、認定就労訓練事業について、開拓からマッチング、その後の定着支援までを一貫して行う専任の担当職員を配置するといった事例もみられる。

- 地域の就労支援体制をデザインする中で、就労支援の各事業の実施機関と協力しながら自治体が企業(働く場)との関係づくりに積極的に関与していくことが期待される。

(4) 認定就労訓練事業の利用促進

- 認定就労訓練事業は「中間的就労」と表現され、本人の状況に応じた多様な働き方を実現する場として重要であるが、利用が伸び悩んでいる。
- 認定就労訓練事業所の開拓に関しては、都市部においては一般企業、地方の中・小規模の自治体においては既存の社会資源を活用し、障害者の就労支援の枠組みや農福連携、商工会議所(商店)等へのアプローチなどが想定される。
- 一方、認定就労訓練事業がもともと社会福祉法人の自主事業(公益)を想定して創設された経緯もあり、例えば就労準備支援事業のプログラムにおける協力事業所である地場産業や商店街、自営業者等が認定を受けることが難しい。この点については、高知市社協の取組のように、全国どの規模の自治体でも展開する社協が認定就労訓練事業の認定を受け、その作業場所として地域の協力事業所を指定する方法は一つの方策と考えられる。
- 企業・事業所の側からは、障害分野と異なり訓練受入れに係るインセンティブが弱いのではないかといった意見や、生活困窮者を非雇用型(無償)で受入れる際、3~6か月と時間をかけて訓練を受ける余裕が本人側にはないなどの指摘もある。
- このような「利用しづらさ」につながる制度上のハードルや訓練受入れに係るインセンティブのあり方について継続的に検討することに加え、利用した人へのメリットとして、就労訓練に参加したことを公的に証明できる証明書等を発行し、本人の満足度の向上と就労に向けて企業にアピールできるような仕組みなども考えられる。

資料編

○就労支援の実践から学ぶ個別事例集

自就 自立相談の就労支援
職紹: 職業紹介事業
認訓: 認定就労訓練事業

準プ: 就労準備支援プログラム(集団型プログラムや各種セミナー等)
保護: 生活保護 CW 等との協働
ボラ: ボランティア活動(有償ボランティア含む)

就体: 就労体験
職見: 職場見学
自促: 生活保護受給者等自立促進事業

■事例一覧(概要)

	基本属性	事例概要	支援内容(事業)	事例から学ぶポイント	掲載頁
1	50代 男性 保護ケース (Aさん)	長期ブランクのある生活保護受給者が、 集団型のプログラムや就労体験等を通して 一般就労に至った事例	自就 準プ 就体 保護	<ul style="list-style-type: none"> ● 人と関わることへの不安感が強いため、話しやすい状況(環境、聞き方等)を作り、これまでの本人のつまずきを理解する ● 集団型プログラムを通じた他者との関わりの中で、対人緊張の回復と自分の存在を認められる実感から就労への意欲を引き出す ● 生活保護ケースワーカーや就労支援員との協働による支援 ● 定着支援(就労先に出向き本人や企業担当者から話を聞く) 	P4
2	40代 男性 困窮ケース (Bさん)	両親が他界し単身となった20年間無職、 コミュニケーション力に課題を抱える相談者 の強みを活かせる環境(企業)に働きかけた 事例	自就 準プ 就体 職見	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人が興味を持って参加できる幅広い就労準備支援メニューを提供し、少しずつコミュニケーションに慣れるよう場づくりに配慮 ● 本人を変化させるのではなく、強みを活かして今のままで働くことができる職場(環境)を探し、企業の理解を得る ● コミュニケーション不足から面談だけでは伝わりづらい本人の長所を採用側に理解してもらうために職場体験を提案 	P7
3	20代 男性 困窮ケース (Cさん)	就労準備支援から、その後の求職活動～ 就職後にかけて、長期・継続的に本人と 企業の仲介役となることにより職場定着を 図った事例	自就 準プ 就体 職見	<ul style="list-style-type: none"> ● 初期は「就職」を意識しすぎずプログラムへの参加を楽しむことを優先し、本人が少しずつ自信を回復するプロセスを重視 ● プログラムに参加する中でアセスメントを深める ● 多数の企業見学を調整することにより、本人が自分に向いている仕事について実感を得られるようにする ● 就職後もメンタル面のアップダウンが続く中、本人と企業との仲介役となって休職や勤務時間の調整等を提案することにより職場定着を目指す 	P10
4	30代 女性 困窮ケース (Dさん)	実際に働く体験を通して発達障害を受容し 手帳取得、一般就労(障害者雇用)に至った 事例	自就 準プ 就体 職見	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業との並走による段階的なプランを作成 ● 就労支援員の個別求人開拓先の企業において職場見学・体験を行った上で、就労開始。本人と企業との振り返りを通して、得意なこと・苦手なことを確認する ● 面接対策として、事前の企業採用者へのアプローチや入社後のフォロー・バックアップ体制のPRまで幅広く行い、本人の不安をできるだけ軽減する 	P14

	基本属性	事例概要	支援内容(事業)	事例から学ぶポイント	掲載頁
5	40代 男性 困窮ケース (Eさん)	頻繁な離職転職を繰り返す相談者への就労支援と生活再生を軌道に乗せるための家計相談支援等の事例	自就 自促 就体 職見 職紹	<ul style="list-style-type: none"> ● 無料職業紹介事業を活用して本人が希望する仕事を探しつつ、自らの特性の理解を深め、就労への自信をつけてもらう ● ハローワークとの協力関係を築き、自立相談支援事業と双方のアセスメント結果を共有することにより、本人の特性を活かせる就労先とのマッチングを支える ● キーパーソンの協力を得ることや家計の相談支援など、生活面からのフォローアップも行き、本人が「働き続ける」ための支援体制を整える 	P18
6	50代 男性 保護ケース (Fさん)	長期ひきこもり状態で軽度知的障害を抱える中高年男性に対し、就労訓練や求職活動等、関係機関とさまざまな支援を実践した結果、社会参加につながった事例	自就 認訓 ポラ 就体 職見	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労訓練や求職活動で関わる中で、これまでの人生におけるつらさや苦しさに共感し、本人理解を深める ● 認定就労訓練事業や理解のある企業での就労体験等の実践の結果、療育手帳を取得。就労には結びつかなかったものの本人の能力にあった社会参加の場(有償ボランティア活動)につながる 	P22
7	40代 女性 困窮/保護 ケース (Gさん)	メンタルヘルスの不調から離職、経済的に困窮するも介入を拒否する40代女性への生活保護受給等と一体となった社会復帰に向けたサポート事例	自就 準プ 就体 ボラ	<ul style="list-style-type: none"> ● 当初は介入を拒否される中、面談や電話、訪問等を重ねて関係性の構築を図り、本人が今後なりたい自分や課題と向き合うプロセスに寄り添いながらサポートする ● 本人の健康状態や家計状況等の生活課題を把握し、選択肢を提示しながら関係機関(生活保護、地区保健師、法テラス等)につなぐ ● 社会参加プログラムや就労体験、ボランティア活動等のさまざまな体験を他者と一緒に行うことにより、本人の力を必要としてくれる人も場所もたくさんあることに気づいてもらう ● 若者サポステによる職業適性検査やキャリアコンサルタントとの相談などを活用し、職業適性等を含む自己理解を深める 	P25
8	20代 女性 困窮ケース (Hさん)	家庭内暴力やいじめ・不登校等を経験し、セルフネグレクトにある若年女性が支援を通して自らの強みを発見し、働くことへの前向きな気持ちを引き出した事例	準プ 就体 ポラ	<ul style="list-style-type: none"> ● オンライン面談やイベント企画など、面接室に限らず本人の興味・関心に合わせてオーダーメイドのプログラムを展開し、本人が安心して話せる関係を構築 ● 支援員や社協等の個々の人脈から、本人に合う有償ボランティア、単発アルバイト等を見つけ、同行支援や調整を行う 	P30

	基本属性	事例概要	支援内容(事業)	事例から学ぶポイント	掲載頁
9	30代 女性 困窮ケース (Iさん)	母子家庭で小学校から不登校となり自宅で過ごしてきた30代女性が、徐々に仕事に慣れ、得意分野での資格取得により認定就労訓練事業の利用に至った事例	準プ 就体 認訓	<ul style="list-style-type: none"> 相談から約3年間にわたり伴走。1人で取り組める軽作業から徐々に人と接する仕事に慣れるまで、多様な「仕事」や「体験」を提供し、自らの強み(得意な作業)と意欲を引き出す 資格を活かした仕事をしたいというニーズに応じて、認定就労訓練事業の受入事業所において業務分解(切り出し) 	P33
10	20代 女性 困窮ケース (Jさん)	高校卒業後、人間関係でアルバイト先を転々としてきた20代女性に長期にわたり伴走し、認定就労訓練事業所での雇用に至った事例	準プ 就体 認訓	<ul style="list-style-type: none"> 支援する中で起きたことについて、失敗を含めて振り返りを行い、プランの見直しを順次細かく反映していく 本人が希望する職種での認定就労訓練事業を調整し、雇用継続に向けた本人及び事業所に対する伴走支援 認定就労訓練事業の利用期間終了後を見据えた関係機関との情報共有(若者サポステ、主治医等) 	P36

(注1) 事例を掲載するにあたっては、個人情報保護の観点から、一部加工した上で、事例を提供いただいた自治体に確認を行った。

(注2) 各事例は、「1. 基本情報と支援初期の状況」「2. 支援開始後の展開」「3. Oさんに対する支援の流れとポイント」「4. 支援員の取組と考察」に分けて、支援のプロセスや就労支援としてのポイント、支援員の思いなどを紹介している。

※留意事項

以下、支援員がどう考え取り組んだかという、各支援に至った思考や揺れ等を含めて紹介しており、言葉として相応しくない表現が含まれる可能性もあるが、現実感をもって伝えられることを優先し、そのままとしている。

事例 1：長期ブランクのある生活保護受給者が、集団型のプログラムや就労体験等を通して一般就労に至った事例（Aさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	高校卒業後、運輸業や製造業などのさまざまな職に就いてきたが、40代後半で就業中に脳梗塞となり退職を余儀なくされた。そこで1回目の生活保護を受給し、その後就労により保護を停止したが、過重労働によりストレスがたまり自傷行為にまで至り、怪我をしたことで退職、2度目の生活保護を受給。それからは就職活動がうまくいかず約10年間のブランクがある。
<性別> 男性	
<年齢> 50代	
<区分> 生活保護受給	
世帯(家族)の状況	本人に働きたい気持ちはあるものの、人とのコミュニケーションが苦手な長いブランクもあるため、不安感を抱えている。人との交流や関わりに慣れながら、少しずつ社会復帰できるような支援が必要と担当ケースワーカーが判断し、Aさんに就労準備支援事業を紹介。週1回の集団型プログラム ^(※) に参加するようになった。
● 単身(相談時は母と同居) ● 高齢の母と同居していたが、支援期間中、母は病気により他界	

(※) 他者との交流を通してコミュニケーションが促されるようなグループワークや、スポーツ、調理等のレクリエーション活動を含む共同作業等のプログラムを総称して「集団型プログラム」とする。これ以降の他事例も同じ。

2. 支援開始後の展開

週1回の就労準備支援事業の集団型プログラムに参加するようになる。プログラムに参加する際は必ず一番前に座り、「他の人から話しかけられたくないから」との発言もあり、人嫌いの様子。前回の就労から約10年のブランクがあり、その間、外出の機会もほとんどなく、人と接することへの不安感を抱えているようである。

プログラムへの参加姿勢は真面目で、ほとんど休まずに参加する。毎回早く来て一番前に座るため、就労準備支援員(以下、「支援員」)がその日のテーマを板書する際、「Aさん、今日のテーマどうですか？」などと話しかけを重ねていると、「それは前にやったテーマと同じです」「次はテーマを考えてきます」など受け答えしてくれるようになってきた。真面目に取り組むがゆえに頑張りすぎてしまい、結果、「なぜうまくいかないのか」という気持ちが、自傷行為のほか、投げやりな態度や言動につながっているのではないかとと思われる。

就労準備支援事業を継続する中で、支援員からの話しかけに対する受け答えも穏やかになる。また、集団型プログラムの際、他の利用者と趣味の話をする様子がみられるようになり、年長者として頼られる存在になったことが自己有用感につながったようである。企業説明会への参加や、就労準備支援事業利用後のOB・OGの話を聞くプログラム、就労体験等を通じて徐々に「仕事をしたい」という気持ちにつながっていった。このタイミングで、生活保護の就労支援員による職探しも行い、社員寮の調理補助のパートを提案し、応募、採用が決定した。現在も就労中。

3. Aさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
		<ul style="list-style-type: none"> 担当ケースワーカーから A さんに就労準備支援事業を紹介。「こういうプログラムがあるけど行ってみないか」と促す。 	生活保護ケースワーカーや就労支援員との協働による支援(★3)
0日	<ul style="list-style-type: none"> 週1回の集団型プログラムに参加。会場で一番前に座る。「他の人に話しかけられたくないから」とのこと。 朝の会でのテーマトークで「好きな食べ物は？」と聞くと、脳梗塞の後遺症で頭痛があり、食欲もないため食べることに興味がないと怒りを訴える。 その後も、週1回の集団型プログラムには参加。 		<p>◆Aさんは生活保護受給中のため、全体のプランはケースワーカーや就労支援員が作成する。日頃から就労準備支援事業への理解を得ておくことにより生活困窮者の事業の利用へと円滑につないでもらうことができる。</p>
5か月後	<ul style="list-style-type: none"> 母親が病気になり、心配している様子。プログラムを休みがちになる。しばらくして母は他界。 		
	<ul style="list-style-type: none"> 集団型プログラムの時は毎回早く来て一番前に座るため、支援員が板書する際、「Aさん、今日のテーマどうですか？」と話しかけを重ねていると、「それは前にやったテーマです」「次はテーマを考えてきます」など受け答えしてくれるようになった。 		人と関わることへの不安感が強いいため、話しやすい状況を作り、これまでの本人のつまづきを理解する(★1)
7か月後	<ul style="list-style-type: none"> 週1回の集団型プログラムにはほとんど休まず参加。支援員からの話しかけに対する受け答えも穏やかになった。 		
1年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> 支援員が同行し、一般就労向けの合同企業説明会に参加。自ら2社選り話を聞くことができ、就労意欲とまではいかないが、興味が出てきた様子。 		
1年2か月後	<ul style="list-style-type: none"> 就労準備支援事業の利用が1年以上を経過。 集団型プログラムでの1日の達成目標として、協調性を心がける、他の利用者と会話するなどの記述が増え対人関係の向上・意欲がみられるようになってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ケースワーカーからの提案で、中止していた就労支援員による面談を再開(2~3週間に1回)。 	生活保護ケースワーカーや就労支援員との協働による支援(★3)※再掲
1年3か月後	<ul style="list-style-type: none"> プログラムの一環として、就労準備支援事業を利用して就労したOB・OGによる話を聞く機会を提供。「自分も就労について考えはじめようか」と話す。 		<p>◆就労準備支援事業の利用中も本人の状況や変化等について生活保護ケースワーカー等と定期的に情報共有し、協働で支援方針を決定する。</p>
1年4か月後	<ul style="list-style-type: none"> お正月に「食べるのが苦痛と言っていたAさんが自分でおでんを作った」という話を聞く。 		
1年7か月後	<ul style="list-style-type: none"> 集団型プログラムの際、他の利用者との趣味(カメラ)の話をするように。自分が年長であり、いろいろと教えながら楽しく会話する様子が見られるようになった。 		集団型プログラムを通じた他者との関わりの中で、対人緊張の回復と自分の存在を認められる実感から就労への意欲を引き出す(★2)
1年8か月後	<ul style="list-style-type: none"> 集団型プログラムでは最年長ということもあり、他の利用者からの質問に答えたり、優しく教えたりする姿もみられるようになる。 		

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	● 集団の中で他者から頼られる存在となったことが自己有用感につながったのではないかと推測。		
1年 10か月後	● 客室清掃の就労体験に参加。その後、ホテルの客室清掃の求人に応募するも不採用。(タッチパネル式の業務管理システムを導入したホテルで、面接時に戸惑いもあり結果は気にしていない様子)	● 就労指導員との面談でも A さんの就労意欲がみられてきたことから職探しを始める。	● 特に就労準備支援事業を利用した人は、就労して即終結とはなり難く、働き続けられるかどうか、フォローを行う。
2年後	● 就労支援員が応募の提案をした求人、社員寮の調理補助のパートに応募、採用が決定。		
3年 2か月後	● 当面の間、就労先の事業所に訪問し、A さんや事業所担当者から近況を聞く。週 3 日から始め、現在は週 5 日勤務している(1日 4~5 時間)。		就労後の定着支援(★4)

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 高卒後、さまざまな職に就いているが過重労働によるストレスが原因で離職を繰り返していることや、一方で、集団型プログラムには休まず参加してくれることなどから、真面目で頑張りすぎる人なのではないか。
- 真面目に取り組むがゆえに「なぜうまくいかないのか」という気持ちや、自傷行為や「人に話しかけられたくない」などの投げやりな態度や言動につながっている。A さんが話しやすい状況(環境、聞き方等)で対話を重ね、時間をかけて心を開いてもらいたい。
 ⇒point(★1): 人と関わることへの不安感が強いので、話しやすい状況を作り、これまでの本人のつまずきを理解する
- 働きたいという気持ちはあるが、長期ブランクや人間不信による不安感などから自分に対する自信を失っている状態。グループワークなどの集団活動を通して人と関わる中で、少しずつ自信を取り戻していけるような働きかけが必要ではないか。
 ⇒point(★2): 集団型プログラムを通じた他者との関わりの中で、対人緊張の回復と自分の存在を認められる実感から就労への意欲を引き出す
- 就労準備支援事業に参加してから約 1 年以上が経過する頃には、話しかけに対する受け答えも穏やかになり、他の利用者との会話もできてきた。支援員が同行した合同企業説明会では自ら 2 社選び話を聞くことができ、働くことへの関心・意欲がでてきた。
 ⇒point(★3): 生活保護ケースワーカーや就労支援員との協働による支援
 ※ケースワーカーからの提案により、就労指導員による面談を再開
- 就労支援員が応募の提案をした企業に無事採用が決定した A さん。働き始めると、また頑張りすぎてストレスや体調を崩さないか心配な面もある。
 ⇒point(★4): 就労後の定着支援

事例 2 : 両親が他界し単身となった 20 年間無職、コミュニケーション力に課題を抱える相談者の強みを活かせる環境（企業）に働きかけた事例（B さん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	<p>高校卒業後、地元小売店で 2 年ほど働くが、勤め先の小売店が閉店してしまい、職を失う。その後も自力で数社の面接に応募したものの、どこも不採用となり、それからは就職活動をせずに母と暮らし、20 年間無職。その母が他界して 1 人暮らしとなり、今後の生活を心配した親戚が自立相談支援機関に相談、初回面談は親戚とともに来所した。</p>
<性別> 男性	
<年齢> 40 代	
<区分> 生活困窮者	
世帯(家族)の状況	<p>親戚によると対人恐怖症とのことで、支援員からの質問には「うん」「いや」「わからない」等の一言回答の B さん。生活のためには働かなければならないという意識はあるようだが、何をどうすればよいかは思いつかない、といった印象。まずは就労準備支援事業を提案し、継続的に参加できるかどうかの確認を含めて関わりを持つこととなった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ● 単身(他界した両親の持家で一人暮らし) 	

2. 支援開始後の展開

B さんは、もともと三食自炊し、6 時起床 23 時就寝と規則正しい生活をしており、買い物・家事も全て自分でこなしているとのこと。また、毎日仏壇にご飯とお茶を供えていると話す。

就労準備支援事業では、調理、スポーツ、ゲーム、ボランティア活動など幅広いメニューを提案したところ、B さんは遅刻欠席もなく参加した。集団型プログラムへの参加や面談の中で、B さんが多趣味であることがわかってきたため、周囲にも人となりを知ってもらえるよう、支援員からプログラムの最中に質問するなどしていった。すると、自ら話かけることはないが、聞かれたことには多く答えるようになり、趣味をきっかけに他の参加者との会話も生まれるようになった。(支援員だけでなく他の参加者同士で話すことも増えていった。)

並行して就労支援員(自立相談支援事業)との面談も実施。就労準備支援事業の集団型プログラムでの様子を共有しながら、支援開始から 2 か月ほど経過した頃より求人票の提案をするがどれも否定的。工場見学を提案し、2 社ほど見学するが、過去の面接の不採用で自信がないのか恐怖心が強く、求人への応募ができないまま半年が過ぎた。その後も就労支援員は地道に企業探しを続け、やっと本人がわずかに興味を示した企業(クリーニング関係)が見つかるが、B さんの第一印象から社長が採用には後ろ向きであったことから「職場体験」を提案した。結果、社長から「覚えが早い」と高評価を得ることができ、採用に至る。

入社後、B さんは独学でクリーニング師(国家資格)の試験に一発合格し、周囲の予想を超えた頑張りを見せている。

3. Bさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● Bさんとの初回面談(親戚と来所)。最初の印象としては、同席した支援員は生活保護につながるが適当ではないかという所感。 ● 自立相談の就労支援員から就労準備支援事業の集団型プログラムを提案し、参加につなげる。もともと規則正しい生活をしているため<u>集団型プログラムには遅刻欠席もなく参加。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ● Bさんの場合、もともと規則正しい生活をしていたため、特に日常生活自立について助言するところはなかった。 	本人が関心を持って参加できるよう幅広い就労準備支援メニューを提供し、少しずつコミュニケーションに慣れるような場づくりに配慮する(★1)
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員と定期的に面談。趣味の話などを聞くと、サッカー、ラジオ、音楽、プラモデルなど多趣味であることがわかってきた。 ● 同時に、<u>3食自炊、毎日仏壇にご飯とお茶を供えていること、同じラジオ番組を20年間聞き続けていることなどをBさんから聞く。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ● Bさんの興味を引く話題や質問を投げかけることで、他の参加者に人となりを知ってもらうよう心がけた。 ● すると、Bさんの多趣味やユニークな面が見えるようになり、共通の趣味をきっかけに参加者同士の会話も生まれてきた。 	
2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムには休まず参加している。Bさんが多趣味であることがわかってきたため、いろいろな話題で話をしたり、プログラムの最中に質問したりするようになった。 ● 就労支援員と定期的に面談。興味のある仕事、興味のない仕事などを聞く。 		
3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムに継続して参加。<u>いろいろな趣味をきっかけに支援者だけでなく、参加者同士で話すことも増えていった。</u> ● 就労支援員と定期的に面談。工場見学を提案し、見学する。恐怖心が強く応募に至らず。 ● 本人の意向も聞きながら就労支援員が職場見学先を探し、Bさんに提案と見学を繰り返す。 		本人を変化させるのではなく、強みを活かして今のままで働くことができる職場(環境)を探し、企業の理解を得る(★2)
5か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員から工場見学を提案するが、過去の面接の不採用などで自信がないのか恐怖心が強く応募に至らず。 ● 数社求人票の提案もしたが、「清掃は嫌」「(その業種は)臭いから嫌」「(あの工場は)明るかったから嫌」など、どれも否定的な発言を繰り返す。 		
6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員が提案した工場見学に行く。自ら応募するほど積極的ではないが、感想を聞くと否定的ではなかったことから、企業に連絡を入れた。 ● <u>見学先工場の社長がBさんの採用には否定的だったため「1～2日間の無給の職場体験」を提案し、何とか職場体験を受入れてもらう。</u> ● 体験後、企業側から「(思った以上に)彼、いいね」と 	<ul style="list-style-type: none"> ● Bさんがコミュニケーションに苦手意識を持っている点を踏まえると、面接ではなく、実際の仕事ぶりを見てもらうことが採用につながりやすいと考えた。 	コミュニケーション不足から面談だけでは伝わりづらい本人の長所を採用側に理解してもらうために職場体験を提案(★3)

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	評価してもらい、採用となった。		
8か月後	●採用から約2ヵ月がたち、就労支援員より就労先企業の社長にヒアリングを実施。Bさんのことは「覚えが早い」「第一印象からは想像できなかった」とのこと。		
11か月後	●Bさんから電話があり、独学でクリーニング師(国家資格)を受験し、合格したことを聞く。		
1年後	●就労して半年が経過し、フォローアップのため就労支援員が企業を訪問。社長にBさんのことを聞くと、「(クリーニング師の試験)これまで一発合格する人はいなかった。驚いている」とのこと。 ●現在も周囲の予想を超えた頑張りを見せている。		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 極度の対人恐怖症でコミュニケーションには難があるが、いろいろな趣味や自分なりの考えを持っている。幅広いテーマの集団型プログラムを提案し、Bさんが関心を持って参加できるようにする。
- 20年間のブランクがあるため、集団型プログラムでは少しずつ他者とのコミュニケーションに慣れていけるとよい。自分から他者に話しかけることはしないため、プログラムの最中にBさんの興味を引く話題や質問を投げかけることで、他の参加者に人となりを知ってもらうよう心がけた。
 - ➡point(★1): 本人が関心を持って参加できる幅広い就労準備支援メニューを提供し、
少しずつコミュニケーションに慣れるよう場づくりに配慮
- 「3食自炊」や「毎日仏壇へお供え」ということから真面目さと規則正しさを、「休まずプログラムに参加する」「同じラジオ番組を20年聴いている」ことから継続力を感じ、仕事をする上で必要な要素は備えている。環境さえ整えば就労できるのではないかと。
- 一方、「清掃は嫌」「(その業種は)臭いから嫌」「(あの工場は)明るかったから嫌」といった感想から、理屈ではなく感覚で選ぶタイプであり、本人が気に入る環境が見つかるまで企業見学を繰り返すしかないのではないかと。
 - ➡point(★2): 本人を変化させるのではなく、強みを活かして今のままで働くことができる
職場(環境)を探し、企業の理解を得る
- 最大の課題は「極端なコミュニケーション能力の不足」(逆に言えばそれ以外はあまり問題なし)。一方で、多くの採用担当者は面接での第一印象で難色を示すことが想定されるため、面接ではなく、実際の仕事ぶりを見ていただくことができれば採用につながる。
 - ➡point(★3): コミュニケーション不足から面談だけでは伝わりづらい本人の長所を採用
側に理解してもらうために職場体験を提案

事例3：就労準備支援から、その後の求職活動～就職後にかけて、長期・継続的に本人と企業の仲介役となることにより職場定着を図った事例（Cさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	短大卒業後、機械製造工場数社に勤務。職場でいじめを受けいずれも半年程度で退職し、以来3年間無職のまま家で過ごしている。仕事をしていないため生活リズムは多少崩れているが、洗濯・買物・祖父の通院同行など家の手伝いをしており両親との関係も良好である。
<性別> 男性	
<年齢> 20代	
<区分> 生活困窮者	
世帯(家族)の状況	Cさんの父が定年退職することとなり、経済的な支援を続けていくことが困難になり、今後の生活の相談のため父親とともに自立相談支援機関に来所する。父親としてはCさんに就職してほしいと思っているが、本人は過去の職場でのいじめがトラウマとなり就職に恐怖を感じている。初回面談での会話もたどたどしく、就職への自信は完全に失われている印象。
<ul style="list-style-type: none"> ● 両親、祖父、兄と5人暮らし ● 両親とは関係良好 	

2. 支援開始後の展開

初回面談時、「まずは来週の就労準備支援事業の〇〇講座に参加してみませんか」と提案。どのテーマのプログラムも最初は苦手意識が強く、毎回緊張しながらの参加であったが徐々に慣れていく。他人からどう思われるかが不安で、支援者に細かく質問することが多かったが(過去の職場では「何度も質問すること」「すぐに覚えられないこと」に対して怒られていた)、すべての質問に丁寧に答えていると、集団の中で支援員からの質問に率先して答えることが増えてきた。さらに他の利用者への思いやりもみられるようになり、周囲からの信頼感が増していく中で、少しずつ自信を回復していった。

相談から半年を過ぎた頃、Cさんの表情が目に見えて明るくなり、自分から話をしてくれることも多くなってきたことから、本人の意向を聞きながら数社の企業見学を提案した。その中からCさんが興味をもった企業に見学に行くが、社長が発した「マルチタスク」という言葉に自信を失ってしまう。また、翌月にも建設業の企業見学に行き、興味をひかれた様子であったため、応募してみてもどうかと提案。約1ヵ月間、体調を崩すほど悩み続け、何度も面談した後、見学先企業への応募を決意。就労支援員から企業に連絡をとり、Cさんの長所・短所を伝えた上で面接を受け、採用が決定した。

採用の翌月から勤務を開始するも、腱鞘炎にかかり1週間求職することとなり、就労支援員からも企業に一言お詫びをし、回復後は何とか復帰。その後、順調に働いているようであったが、入社3ヵ月後に勤務時間が半日から1日に伸びたこともあり、徐々に仕事を休みがちになる。ストレスで痩せて表情も暗く「辞めたい」「自分は役立っていない」などネガティブな発言を繰り返すようになったことから、支援員より企業に電話し、Cさんが退職を考えていること、その前に2週間の休職をもらえないか相談した。企業側は「頑張ってくれている」という評価であったため、Cさんとの面談ではそのことも伝えな

がら勇気づけた。休職期間が終わる前に、支援員より再度企業に電話をし、勤務時間を1日から半日に戻してもらえないか交渉し、了承してもらった。Cさんは無事に職場復帰を果たし、現在も継続勤務中。

3. Cさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回面談。父親とともに来所。Cさんは、過去の職場でのいじめがトラウマとなり、就職に恐怖を感じている様子。会話もたどたどしい。 ● 「まずは来週の〇〇講座に参加してみませんか」と提案したところ、遅刻欠席もなく参加。 		
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムでは不安ゆえに何度も細かい質問をする。Cさんに対し、一つ一つ丁寧に答えるようにした。過去の職場では、何度も質問することに対して怒られていたようだが、「質問はいくつでもしていい」「むしろ質問をした方がいい」ということを伝えた。 ● 最初は「就職」を意識しすぎず、プログラムを楽しむことを優先してもらった。就労支援員との面談も、雑談を交えながら、今後少しずつ地域活動や企業見学などをやっていこうということを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ものづくりなどの共同作業や各種講座のような場で発言してくれる参加者がいることは、支援者としても助かること、プログラムの中で必要な存在であることをCさんに伝えた。 	初期は「就職」を意識しすぎずプログラムへの参加を楽しむことを優先し、本人が少しずつ自信を回復するプロセスを重視する(★1)
2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムには楽しく参加できている様子。回を重ねるごとに緊張感が和らぎ、会話の際の口数も多くなってきた。 ● 表情が明るくなり、楽しく会話できているタイミングで時々「就職」の話をすると、途端に恐怖心が高まる様子がみられた。 		
3~4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムでの参加の様子や面談での会話等からCさんの長所・短所が見えてきた。支援者が感じるCさんの「強み」を伝えるようにし、勇気づけた。 		プログラムに参加する中でアセスメントを深める(★2)
5~6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 集団型プログラムでは支援者からの質問に率先して答えることが増えてきた。さらに他の利用者への思いやりもみられるようになり、周囲からの信頼感が増していく中で、少しずつ自信を回復していった。 ● 就労準備支援プログラムの一環で数社の企業見学に参加。 		
7~8か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 「就労訓練」を提案。しかし気持ち的にどうしても踏み出せない。 		
9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● Cさんが興味を持った企業に企業見学に行く。しかし社長が発した「マルチタスク」という言葉に自信を失った。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 8社の企業見学をすることにより、自分に向いている仕事は「1人で作業を担当して、手順も決まっている仕事」なのではないかとCさん自身が思い至った。 	多数の企業見学を調整することにより、本人が自分に向いている仕事について実感を得られるようにする(★3)
10か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 建設業の企業見学に行き、興味をひかれた様子であったため、応募してみてもと提案。そこから1ヵ月間、応募するかどうか悩む。悩みすぎて体調を崩す。就労支援員と何度も面談する。 		

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
11か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 職場見学先の企業に応募を決意する。 ● <u>就労支援員から企業に連絡をとり、Cさんの長所・短所を伝えた上で面接を受けた。</u> 		就職後もメンタル面のアップダウンが続く中、本人と企業との仲介役となって休職や勤務時間の調整等を提案することにより職場定着を目指す(★4)
1年後	<ul style="list-style-type: none"> ● 採用が決定。 ● <u>就労支援員から企業側に採用後の勤務時間等について相談し、勤務開始。</u> 		
1年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 腱鞘炎にかかり1週間休職することとなる。<u>就労支援員からも企業にお詫びし、回復後は何とか復帰。</u> 		
1年2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● Cさんの就労先の企業に時々訪問し、定期面談。楽しく働いているようで、表情も明るい。 		
1年4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 勤務時間が採用当初の「半日」から「1日」に伸びた。 		
1年5~7か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 仕事を休みがちになる。ストレスで痩せて表情も暗く「辞めたい」「自分は役立っていない」などネガティブな発言を繰り返すようになる。 ● <u>支援員より企業に電話し、Cさんが退職を考えていること、その前に2週間の休職をもらえないか相談。</u> ● 企業側は「頑張ってくれている」という評価であったため、<u>Cさんとの面談ではそのことも伝えながら勇気づけた。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Cさんは「自分は役に立っていない」と言うが、企業からは「頑張ってくれている」と言ってもらっている。 ◆ 仕事においては他者評価も大事で、企業が評価してくれているのであれば、もう少しそれを信じてみてもよいのではないかと。Cさんが自分で思っている以上に、他者にはない強みをたくさん持っていることを繰り返し伝えて勇気づけた。 	
1年8か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員から企業に電話。<u>勤務時間を1日から半日に戻してもらえないか交渉し、了承してもらう。</u> 		
1年9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● Cさんが職場復帰。 		
1年11か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 電話や企業訪問によりCさんの様子を確認。現在、継続勤務中。 		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 過去の職場でのいじめがトラウマとなり就職に強い恐怖を感じている。また、仕事をしていないため多少生活リズムが崩れていることから、就労準備支援事業の集団型プログラムに参加し、人と関わる経験を取り戻しながら生活リズムを整える。
⇒point(★1):初期は「就職」を意識しすぎずプログラムへの参加を楽しむことを優先、本人が少しずつ自信を回復するプロセスを重視
- 集団型プログラムに参加する様子などから、Cさんは不器用だが何事にも「全力」であり、覚えようと「努力(メモ)」し、周囲への「思いやり」もある。また、「素直」であるため吸収スピードが速い、といった本人の強みを見出す。
⇒point(★2):プログラムに参加する中でアセスメントを深める。同時に、企業見学先や就労先を探す際、Cさんの強みを活かせること、ブランクを重視しすぎず本事業を理解してくれる企業を探す
- Cさんは真面目なため、こちらから「こういう仕事が向いているんじゃない？」と言うとそれしか考えられなくなってしまうのではないかと思われた。支援者が無理やりあてはめるよりも、「どういところ(仕事・企業)なら働きたい/働くことができそうと思うか」、本人が興味のある企業見学をなるべく多く調整していくしかない。
⇒point(★3):多数の企業見学を調整することにより、本人が自分に向いている仕事について実感を得られるようにする
- 見学先企業に応募するときも1ヵ月もの間、体調を崩すほど悩んだCさん。無事に採用に至った後も、仕事や職場環境によっては精神的なアップダウンが予想される。企業側は「頑張ってくれている」と言ってくれているため、Cさんへの勇気づけとともに、企業との仲介役となることが必要と思われる。
⇒point(★4):就職後もメンタル面のアップダウンが続く中、本人と企業との仲介役となって休職や勤務時間の調整等を提案することにより職場定着を目指す

事例4：実際に働く体験を通して発達障害を受容し手帳取得、一般就労（障害者雇用）に至った事例（Dさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	大学卒業後、検査会社の事務職に就いていたが、集中できない、ミスが多いなど、業務がうまくこなせずつらくなってしまい、入社1ヵ月で入社できなくなり、半年後に退職に至る。精神科を受診し、不安障害と診断を受けた。
<性別> 女性	
<年齢> 30代	
<区分> 生活困窮者	
世帯(家族)の状況	退職後はひきこもりがちとなり、自分の貯金を取り崩して毎日ゲーム(課金)をして過ごしている。母親が「娘に仕事をしてもらいたい」と思い、ひきこもり相談窓口でメールで相談。主訴が就労支援であったため、ひきこもり支援員から自立相談支援機関につながった。
● 両親と3人暮らし	
● 母親自身が発達障害の傾向を自認しており(手帳なし)、娘にも同様な傾向がみられるとのことから、障害の疑いをもち、当初より手帳の取得に前向きであった。	母親は「娘は発達障害ではないか」と考えているが、主治医によると、障害者手帳の取得は現時点では難しいとのこと、また、就労可能の判断は得ている。

2. 支援開始後の展開

初回の面談は、ひきこもり相談窓口で本人と母親が一緒に来所。きっかけは、母親が娘に仕事をしてもらいたいという相談からつながったが、話を聞いていると、本人も仕事をしたい気持ちがあった。しかし、前職で離職した際は、トイレにこもって出てこれなくなるほどつらい思いをし、仕事をする事への不安が強く、どうしたらいいかわからない状況であった。

本人も母親も手帳取得に対して前向きであったことから、障害者枠の仕事も視野に入れつつ、就労支援員の個別求人開拓先の企業での職場体験に参加。職場体験を通じて、具体的にどのような作業が得意なのか、苦手なのかを振り返り、「自分でもやれるかもしれない」と職場体験先の企業での面接に応募することを決めた。無事に採用となるも、実際に業務を行うことで自身でも障害への自覚が強まる。話し合いの結果、離職し、手帳取得後に障害者枠での就労を目指すこととなった。

手帳取得までの数か月、就労準備支援事業のプログラムとして、これまでの振り返りとともに、自分の好きなテーマ(ゲーム)を面談時にプレゼン形式で発表することや、障害者枠の企業への見学などを行った。障害者手帳を取得後、就職活動を開始し、障害者就活イベントに就労支援員とともに参加。応募企業の1次面接に通過し、数日間の実習の後、内定を獲得。

3. Dさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	支援内容・本人の変化等		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
		<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり相談窓口：母親から「娘に仕事をしてほしい」と相談があり、就労支援ということから自立相談支援機関を紹介。 	
0日	<ul style="list-style-type: none"> Dさんが母親とともに自立相談支援機関に来所。Dさんから、仕事をしたい気持ちはあるが前職の離職による不安感が強いこと、障害について自分でもやりづらさなどは感じつつも確たるものはないという気持ちを聞く。 手帳取得による障害者枠の仕事の視野に、就労支援と就労準備支援の連携によるプランを策定。 	<ul style="list-style-type: none"> ひきこもり支援員が事前の相談から把握している本人の状況等を共有。 	自立相談支援事業の就労支援と就労準備支援事業との並走による段階的なプランを作成(★1)
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> 就労支援員と就労準備支援員とでDさんと面談。 就労支援を中心とした話を続けたところ面談の途中から表情に変化、会話に集中できない様子がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 約1時間の面談を通して、仕事をする時に情報量が多い処理や複数のことを同時に処理する業務の対応が難しいのではないかと見立てを支援員間で共有。(※初回面談は概ね1時間くらい話し、どのくらい負荷がかかるか本人の様子をアセスメントに活かす) 	
	<ul style="list-style-type: none"> 本人が手帳取得に対して確たるものがない状態のため、状況を確認する上でも就労支援員の個別求人開拓先の企業での職場見学・体験を調整。 企業側には、あらかじめDさんが苦手なことや配慮が必要な点などを伝え、Dさんには理解のある環境で働くことの利点を説明、見学・体験に取り組んだ。 体験後は振り返りの面談を行い、実際の業務内容の感想や職場の雰囲気、担当者の人柄などの印象を聞いた。また、具体的にどのような作業が苦手なのか・得意なのかを確認。(企業側にも共有) 	<ul style="list-style-type: none"> 面談から複数のことを同時に処理する業務が難しい印象を受け、就労支援員がもつ求人の中で、簡単な軽作業の仕事、かつDさんの不安に寄り添ってくれるような職場環境が得られる(理解のある)企業を選定。また、通勤時のストレスにも配慮し、満員電車とは逆方面の近い場所を探した。 	
2か月後	<ul style="list-style-type: none"> 職場体験を通じて、「自分でもやれるかもしれない」と前向きな思考が生まれ、「ここで働いてみたい」という意志も確認できたため、面接を調整。 週4日/1日5時間の労働条件を受入れてもらう。 職場見学時、就労支援員も同行し、面接担当の方に、面接ではどのような人物を求めているのか、どのように面接を進行するのか、質問の内容などの把握に努めた。また、職場見学では面接担当の方にも案内いただけるよう調整。 面接には就労支援員も同席。当日の面接官の方とすでに顔合わせしているため大きな緊張等もなく終了、無事に採用となる。 	<ul style="list-style-type: none"> 職場見学・体験後、意欲の高いタイミングで面接を調整。 企業は見学や体験に応募すると面接のつもりで見ると見る。 	就労支援員の個別求人開拓先の企業において職場見学・体験を行った上で、就労開始。本人と企業との振り返りを通して、得意なこと・苦手なことを確認する(★2)
3か月後	<ul style="list-style-type: none"> 食品加工などを取り扱う軽作業の企業で就労開始。 まずは一段階目の就労ととらえ、Dさんのプレッシャーを緩和し、無理をして継続就労にこだわらないようフォローを進めた。 作業工程で壁にぶつかった場合は三者で面談を行うことにより、企業からの理解も得られ、一つひとつ 		

タイムライン	支援内容・本人の変化等		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	の不安を取り除いていけるよう取り組んだ。		
7か月後	<ul style="list-style-type: none"> 実際に働く中で、Dさんや企業側からの報告、三者面談によりDさんの苦手とすることが表面化。 Dさんと就労支援員とで、このまま継続して働くか、離職か話し合いを行い、離職することを決める。 <u>Dさん自身も障害への自覚が強まった様子がかがえ手帳取得にも前向きであったため、障害者手帳取得を優先としたプランに変更。</u>手帳取得後の障害者枠での就労を目指すこととした。 手帳取得まで数か月間かかるため、その間の支援について、就労準備支援員と協議。 	<ul style="list-style-type: none"> 障害福祉課：障害者手帳の手続き 	<ul style="list-style-type: none"> ♦ 仕事をしている中で、「集中している時間が短い」、「作業での正確性が失われミスが多い」、「手先が不器用」、「複数の業務を同時に行うことが苦手で1つの作業完結型でない」と難しい等の課題が表面化してきた。 ♦ 失敗体験も振り返りを重ねることによりDさん自身の障害自認につながった。
	<ul style="list-style-type: none"> 最終的に障害枠の求人で行う面接では自己課題への理解や苦手なことを伝えるための対人スキル、説明スキルなどが必要となるため、<u>自己課題の把握とコミュニケーションスキルの向上を目的としたメニュー(課題)</u>を面談で都度Dさんに提示しながら取り組んだ。(就労準備支援員がメインだが、就労支援員も可能な限り同席) Dさんが好きなゲームをテーマにプレゼンしてもらうなど、無理のない範囲で取り組んでいくことで表情にも変化があらわれ、笑い声が聞こえるような面談が多くなってきた。 		
1年4か月後	<ul style="list-style-type: none"> 障害者手帳の取得時期が近づいてきたため、障害枠の求人についてDさんに説明するなど、就職活動準備を実施。(再び就労支援員がメインに動く) 障害枠での就労について説明だけでは理解しづらいため、<u>就労支援員より企業を選定し、本人と調整の上、見学を手配。</u>見学は、就労支援員・就労準備支援員も同行した。 		面接対策として、事前の企業採用者へのアプローチや入社後のフォロー・バックアップ体制のPRまでを幅広く行い、本人の不安をできるだけ軽減する(★3)
	<ul style="list-style-type: none"> 障害者手帳取得。 		
1年6か月後	<ul style="list-style-type: none"> 障害者就活イベントに参加。就労支援員が同行。この時の就活イベントは大手企業が多く参加するもので、名の知れたところに勤めてみたいという気持ちも持っていたため、参加してみることにした。 就労支援員はDさんとの待ち合わせより1時間ほど早く入場し、会場を視察。Dさんと合流した後、効率よく動けるように、あらかじめ気になる企業を選定してもらい、優先順位の高い企業から説明会に参加。 Dさんが企業説明を受けている間、<u>就労支援員は企業担当者にアプローチし、採用基準等の情報を把握。</u>あわせて支援員による入社後のフォロー・バックアップ体制などをPRし、企業との関係づくり(パイプ役)に動いた。 	<ul style="list-style-type: none"> 【注】手帳取得後は障害福祉サービスにつなぐ選択肢もあったが、Dさんの中で整理がつき、社会と折り合いをつけていけそうな様子から、就労支援を併走してきた。もし失敗して戻ってきてしまった際は、あらかじめつなぎ直すことも想定しながらの展開 	
1年7か月後	<ul style="list-style-type: none"> 就活イベントで説明を聞いた企業の中から応募企業を選定し、面接へ。就労支援員がイベント中に採用担当者から把握した情報を踏まえ、想定質問の準備等、具体的な面接対策を行った。 		

タイムライン	支援内容・本人の変化等		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	● 無事に1次面接を通過し、数日間の実習に進んだ。		
	● 就労支援員として、継続して内定前も採用担当者となり取りし、実習のポイントや内容なども伺い、Dさんにとって過度な負担がかからないかなどを確認。		
	● 実習が終了し、その後の面談で内定を獲得。Dさんも承諾し、就労が決定となる。		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 初回面談の様子から就労準備支援(段階的な就労)の必要性を感じた。Dさんにとって手帳取得は選択肢としてあるものの、主治医からも現時点では取れない可能性が高いとのこと。Dさん自身これまで「障害」という診断を受けたことがなく、最初から手帳取得ありきや障害枠での就労を進めるのは難しい。(やってみてからでないとな本人の中での納得や必要性が出てこないと思われる)
- 仕事への不安感を改善しながらDさんに向いていると思われる職種・職場での就労体験や就労支援を行う。結果、苦手感、課題があったら、それを具体的にする必要があり。Dさん自身も納得した上で次の段階の支援を調整する。
 - ➡point(★1): 自立相談支援事業による就労支援と就労準備支援事業との並走による段階的なプランを作成
- 就職活動に失敗はつきもの。失敗するかもしれないが、根底では「できるよ」という気持ちでいる。失敗したとしても、それについて気軽に相談出来るような信頼関係を築いていくことが重要。
- まず「働いてみる」という段階では、「がんばれ!」という言葉は本人にとって重荷でしかないだろう。無理に働かせよう、継続させようとするとうまくいかなかった場合のダメージも大きく、失敗事例として終わってしまう。
- 体験先企業で「就労定着」することは二次的な目標とし、作業工程で壁にぶつかった場合は三者で面談を行うなど、不安は一つひとつ取り除きながらフォローを重視。企業とも「何かあったら教えてください」というスタンスの関係性で理解を得ている。
 - ➡point(★2): 就労支援員の個別求人開拓先の企業において職場見学・体験を行った上で、就労開始。本人と企業との振り返りを通して、得意なこと・苦手なことを確認する
- 就活イベント(障害枠)は、大手企業が多く参加する大規模なもので、競争者が大勢いる。また、障害者の就職活動は本人だけでなく支援員が同席することが多いため、Dさんに同行しやすい状況。候補の会社では、どのような特性の人が多いのか聞き「Dさんはこういう特性があるためスキルの活かさず」等のPRができる。
 - ➡point(★3): 面接対策として、事前の企業採用者へのアプローチや入社後のフォロー・バックアップ体制のPRなどを行い、本人の不安をできるだけ軽減する

事例 5：頻繁な離職転職を繰り返す相談者への就労支援と生活再生を軌道に乗せるための家計相談支援等の事例（Eさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	製品加工や裁断などの仕事を25年続けてきたEさんであったが、精神疾患を発症し、その仕事を退職する。退職後も板金業などの下請仕事を転々とし、ハローワークで相談するが、なかなか転職先が決まらない状況が続いた。ハローワークの担当者としても、本人が希望する仕事への就職は難しいと判断し、一度、自立相談支援機関に相談してみることをEさんに提案。
<性別> 男性	
<年齢> 40代	
<区分> 生活困窮者	
世帯(家族)の状況	当時無職であったEさんは、ハローワークの担当者から紹介された自立相談支援機関に連絡し、初回の面談に至る。
● 母親と2人暮らし。兄弟は他県で暮らし、本人とは疎遠	

2. 支援開始後の展開

初回の面談時は無職。長年勤めた製品加工や裁断の会社で病気を発症して退職してしまったこと、その後、転職を繰り返し、直近に1年ほど勤めた板金工場もメンタルの不調から離職、ハローワークで相談したがなかなか希望する仕事が決まらず困っていることなどを話す。また、製品加工や裁断の会社を退職した際、心療内科を受診し、精神障害者保健福祉手帳2級を所持しているとのことであった。

自立相談支援機関の就労支援員が、Eさんと共に、やりたい仕事・できそうな仕事・やりたくない仕事を一緒に考えながら整理した上で、「やりたい仕事」と「できそうな仕事」をまとめ、職種・仕事内容を絞っていった。絞り込んだ職種を中心に、無料職業紹介事業により該当する企業をピックアップするとともに、これまでのアセスメントも踏まえてEさんにマッチしそうな企業を見つけた。就労先の候補とした企業にはあらかじめ就労支援員が連絡をとり、業務内容や職場環境、求人ニーズ等について確認し、Eさんと一緒に職場見学と体験を行った。給料は希望額には至っていなかったが、職場の雰囲気がよく、体験して自分でもできる作業が多かったことが自信になったようで、就職に結びついた。

1ヵ月ほど本人もがんばって仕事を続けていたが、母親から「給料が少ない」と言われたことがきっかけとなり、「仕事を辞めたい」と再び自立相談支援機関に相談があった。より給料が高い会社に転職したいという意向があり、無料職業紹介事業に加えて生活保護受給者等就労自立促進事業も活用し、支援を再開した。同時に、障害年金を受給していなかったが、一般枠で就労するとしても、年金受給による経済基盤があることによって、給与が希望より低い会社を含め選択肢が広がる可能性もあるため、障害者就業・生活支援センターの協力を得て障害基礎年金の受給に向けた支援を行った。

その後、面接・履歴書作成の支援なども行いながら求職活動するも、なかなか採用に至らず、就労継続支援事業A型事業所にも検討の幅を広げて職業紹介を行うものの、母親から給与が低いことを指摘され、一般枠での就労を希望したため、就労支援を継続した。1ヵ月後、ハローワークから紹介の

あった修理メンテナンスの会社に就労支援員と一緒に職場見学を行い、就労が決定した。これまでの面談から、Eさんはお金を持つとギャンブルに散財し、過去に債務整理を経験しており、Eさんの家計は母親が管理していることも把握された。また、Eさんは母親の言葉(給与が安い等)に左右されがちであり、一方で、背中を押してもらえるとがんばれる人と思われたため、母親にはEさんに声かけの協力をしてもらえるようお願いをした。

再就職先の会社は、長年働いていた製品加工や裁断の会社と同じような仕事内容であったため、本人も自信を見せており、会社の理解もあつてがんばっていたが、社員とのトラブルが起きてしまい、現在退職を希望している。会社側は、残ってもらいたいとの意向であるため、Eさんと会社、就労支援員とで今後について話し合いを行う予定である。(障害年金は受給が決定。)

3. Eさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回面談に来所したEさん。長年勤めた会社を病気により退職後、転職を繰り返し、ハローワークで相談したが、なかなか仕事が決まらず困っていると話す。 ● 2回目以降、就労支援員と面談。前職を退社した際、障害者手帳を取得したが、「母親から障害枠では給与が低いと言われたため一般枠で頑張っていきたい」「自分でどこまでできるかわからない」といったEさんの意向や気持ちを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ● ハローワークより自立相談支援機関を紹介 	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労支援員が、Eさんと共に、<u>やりたい仕事・できそうな仕事・やりたくない仕事を一緒に考えながら整理</u>した上で、「やりたい仕事」と「できそうな仕事」をまとめ、職種・仕事内容を絞った。 ● 無料職業紹介事業により、Eさんと一緒にまとめた職種や条件とマッチしそうな企業をピックアップ、就労先として第一候補の企業を決めた。<u>あらかじめ就労支援員が連絡をとり、詳しい仕事内容や職場環境、求人ニーズ、Eさんの得意なこと・苦手なことなどについて確認した。</u> ● 就労支援員が同行し、職場見学と体験を実施。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 面談を通して、本人ができること・得意なことを見つけ、それを言葉にして伝えながら、就労支援員がEさんの「強み」を活かせる企業を探し、マッチングしていく。 	<p>無料職業紹介事業を活用して本人が希望する仕事を探しつつ、自らの特性の理解を深め、就労への自信をつけてもらう(★1)</p>
5か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 見学・体験の後、給料はEさんの希望額には至っていなかったが、職場の雰囲気がよく、体験して自分でもできる作業が多かったことが自信になったようで、就職に結びついた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● Eさんと就労支援員とで一緒に確認してきた本人の特性(適性)が本当かどうかは実際に「体験」することにより「経験」として積みあがれば「自信」につながる。 ● そのため、必ず本人と振り返りを行い、職場見学・体験の中で「できたこと」を伝えることにより、意欲の向上につながった。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ● Eさんは身の回りのことは自分でできるが家計管理が苦手で、お金を持つとギャンブルに散財し、過去に債務整理を経験。就職はしたが、支援終了ではなく、家計の支援を継続しながら見守っていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 家計改善支援事業(自立相談支援機関が実施) 	

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
11か月後	<ul style="list-style-type: none"> ●半年ほど本人もがんばって仕事を続けていたが、母親から「給料が少ない」と言われたことがきっかけとなり、「仕事を辞めたい」と再び自立相談支援機関に相談。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆就職後、ある程度収入を得られるようになっており、就労支援としては企業とのつながりの中で情報を共有し、定着に向けて見守り段階であったが、家計支援の関わりがあったことにより、Eさんの状況に気づく。 	
	<ul style="list-style-type: none"> ●より給料が高い会社に転職したいという意向があり、無料職業紹介事業と生活保護受給者等就労自立促進事業も活用し、就労支援を再開。 ●同時に、障害年金を受給していなかったため、障害基礎年金の受給に向けた支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆先立つものがないと気持ちが焦ってしまう。経済基盤が落ち着くことで、Eさんが安心できると思われた。 	ハローワークとの協力関係を築き、自立相談と双方の就労支援によるアセスメント結果を共有することにより、本人の特性を活かせる就労先とのマッチングを支える(★2)
	<ul style="list-style-type: none"> ●面接・履歴書作成の支援も行い、一般枠での求職活動が続けるものの、なかなか採用に至らない。 ●就労継続支援事業A型事業所にも検討の幅を広げて職業紹介を行うものの、母親から給与が低いことを指摘され、一般枠での就労を希望。 		
1年2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ●ハローワークから紹介のあった修理メンテナンスの会社に就労支援員と一緒に職場見学を行い、就労が決定した。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ●これまでもEさんは母親の言葉(給与が安い等)に左右されがちであり、一方で、背中を押してもらえどがんばれる人と思われたため、母親にはEさんに声かけの協力をしてもらえるようお願いをした。 ●月の収支や債務滞納状況を整理し、家計表を作成する等の家計の支援を継続して行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆母親にも精神疾患が疑われた。Eさんは母親の発言に大きく左右されてしまうことが多々あり、意図して行った支援が結果としてひっくり返されてしまうことが懸念される。 ◆母親がEさんの家計を管理しているため、協力者になってもらうことが必要。 	キーパーソンの協力を得ることや家計の相談支援など、生活面からのフォローアップも行い、本人が「働き続ける」ための支援体制を整える(★3)
1年3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ●再就職先の会社は、長年働いていた会社と同じく単純作業が中心の仕事内容であったため、本人も自信を見せており、会社の理解もあってがんばっていたが、社員とのトラブルが起きてしまい、現在退職を希望している。 ●今後、Eさんと会社、就労支援員とで話し合いを行う予定(※支援継続中) ●障害年金は受給が決定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆人の話を理解するのに時間がかかるためか、理解せずに物事を進める傾向にあり、トラブルに巻き込まれたのではないかと推測される。 	

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- Eさんは、受け答えはゆっくりだが、コミュニケーションや意思疎通は問題なく行える。また、多少の気分のムラはあるものの単純作業であればこなせて、仕事をがんばろうという姿勢もある。
- ハローワークでは、なかなか仕事が決まらないとのことであったが、もう少し本人の希望を聞いてみよう、本人の希望に合うところがどれだけあるのか、探してみよう。職場見学や体験などにより本人も雰囲気を感じ取ることができれば自信につながる。
→point(★1): 無料職業紹介事業を活用して本人が希望する仕事を探しつつ、自らの特性の理解を深め、就労への自信をつけてもらう
- ハローワークは圧倒的に求人数が多い。自立相談支援機関の就労支援員によるアセスメントや、無料職業紹介事業を活用した1回目の就労経験などから把握される本人の特性等についてハローワークと情報共有することにより、ハローワークでのEさんに対する理解も深まり、マッチングがうまく進むのではないかと。
→point(★2): ハローワークとの協力関係を築き、自立相談支援事業と双方のアセスメント結果を共有することにより、本人の特性を活かせる就労先とのマッチングを支える
- 「働いて自分で自立して生活していきたい」という強い意思をもっている。就職活動・マッチングではどうしても本人が我慢しないといけない部分が出てくることもあり、先立つものがないと気持ちが焦ってしまう。経済基盤が落ち着くことで安心して就職活動に取り組むことができるのではないかと。
- これまでもEさんは母親の発言に大きく左右されてきた。こちらが意図して行った支援が結果としてひっくり返されてしまう可能性もあり、母親に支援の前向きなサポーターとして役割を担ってもらうことが必要。
- 家計の管理が苦手なEさんの家計を母親が握っているようであり、障害年金の受給が始まった後、不適切に使われてしまうことがないよう気を付けたい。
→point(★3): キーパーソンの協力を得ることや家計の相談支援など、生活面からのフォローアップも行い、本人が「働き続ける」ための支援体制を整える。

事例6：長期ひきこもり状態で軽度知的障害を抱える中高年男性に対し、就労訓練や求職活動等、関係機関とさまざまな支援を実践した結果、社会参加につながった事例（Fさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	<p>専門資格を活かして美容関連のサービス業で約10年就労経験あり。その後、飲食店や清掃業など様々な単発のバイトを転々とした後、30歳頃から仕事をせずひきこもり状態になったFさん。</p> <p>これまで同居する母親の年金と貯蓄を切り崩して生活していたが、母親が75歳で仕事を退職したことをきっかけに生活が立ち行かなくなり、どうしたらよいかと自立相談支援機関に相談に来所。話を聞くと、「うちにはひきこもりの息子がいて、どうにかしたい。働いてほしい」とのこと。</p>
<性別> 男性	
<年齢> 50代	
<区分> 生活保護受給者	
世帯(家族)の状況	
<ul style="list-style-type: none"> ● 70代の母と2人暮らし ● 母親の年金と就労収入で暮らしていたが、母親は75歳で仕事を退職 	

2. 支援開始後の展開

母親に生活保護申請を勧め、息子のFさんについては、本人と直接話をしたいことを伝えた。しかし、なかなか本人が来所する気にならないとのことで自宅に手紙を送付。2ヵ月後、本人と初回面談を行う。30歳頃は無職となってからは母親の元で暮らすようになり、本人は何もせずとも生活ができていた様子。自宅で新聞を取りに行くなどの身辺動作や買い物に行くことはできている。

本人は何かをしなければいけないことはわかっているが、何をすればいいのかわからない、仕事についても何をどうすればいいのかわからないとのことで、まず社協(自立相談支援機関)で認定就労訓練事業を開始し、約10日間、軽作業(包装や組立等)の作業を行う。

その後、市内の特養でのお試し就労を提案するも、本人が拒否。別のレストランでの洗い場の仕事を見学に行くも、「暑くてできない」と断念。続いて市内のスーパーの品出しの仕事を開始するも挨拶ができない等のために部署を異動、なんとか2ヵ月続けたが、就労先の職員から注意を受けた後に退職してしまう。また、この間、生活保護が決定した。

母親から状況を聞き、隣町に住んでいる弟から連絡が入り、Fさんのことで、母親と弟、生活保護ケースワーカーとで面談を実施。発達障害の疑いで受診を検討することとなり、発達障害者支援センターの医師と面談する。2ヵ月後、療育手帳の判定会があり、手帳取得に至った。

生活保護ケースワーカーから、Fさんの社会参加の場所として有償ボランティア活動ができないか相談があり、草むしりや高齢者宅の片付けなど有償ボランティア活動を開始。現在は月4回程度活動している。

3. Fさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 母親と初回面談。所内で支援方法を検討し連絡することとした。 		
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 母親に生活保護申請を勧めた。 ● ひきこもりの息子(Fさん)のことについては、本人と直接話をしたいことを伝えた。 ● その後、何度か母親を通じてや、電話をしてみるものの、本人と話をすることができない。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 生活保護申請/市役所(生活保護課) 	
2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人宛に手紙を送付。 		
4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 本人と面談。何かをしなればいけないことはわかっているが、何をすればいいのかわからない、仕事についても何をどうすればいいのかわからないとのこと。認定就労訓練事業での内職を提案。 ● 社協(自立相談支援機関)で認定就労訓練事業を開始し、約10日間、お菓子の箱折などの作業を行う。かなり几帳面に折っていた。支援員が「とてもきれいに折れています」とほめると、うれしそうに笑う。 ● 市内の特養でのお試し就労を提案するも拒否。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ほめると笑顔になりとても嬉しそう。 ◆ これまで褒められたことや成功体験が少なかったのではないかと感じた。(相談支援員) 	就労訓練や求職活動で関わる中で、これまでの人生におけるつらさや苦しさに共感し、本人理解を深める(★1)
6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 母親の生活保護が決定。初回支給。 ● 就労準備支援事業の利用を想定し、就労準備支援事業支援員と初めて面談する。 ● 就労準備支援事業支援員が同行し、<u>ハローワーク</u>に行き、登録や検索などを一緒にする。待ち時間に、「今まで大変でしたよね」「苦勞されましたよね」と声をかけるとFさんは急に泣き出してしまう。後から車の移動中に尋ねると、理解してくれたことへのうれし泣きだったよう。 ● 市内のレストランの洗い場の仕事を見学。Fさんいわく「暑くてできない」と断念。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ もともと美容関連サービスで働いており、手先も器用(認定就労訓練での箱折等)なため、掃除や品出しの職種ではもったいないのではないかと。(就労準備支援員) ◆ これまでの人生では、誰かに褒められたり優しい言葉をかけられたりしたことがあまりなかったのかも。(就労準備支援員) 	
7か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援員からの紹介により、市内のスーパーの品出しの仕事を開始する。 ● 挨拶ができない等の理由で部署を異動して継続。 		
9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労先の職員から「なぜ挨拶ができないのか」「もう少しやる気を出してくれ」等と言われたことに対して腹を立ててスーパーを退職してしまう。 ● 隣町に住んでいる弟から連絡が入り、Fさんのことで、母親と弟、生活保護ケースワーカーとで面談を実施。発達障害の疑いで受診を検討。 		
11か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 障害者支援センターの医師と面談。 		
1年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 療育手帳の判定会。手帳取得。 		

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
1年 9か月後	<ul style="list-style-type: none"> 生活保護ケースワーカーより F さんの社会参加として有償ボランティア活動ができないか相談。 本人、生活保護ケースワーカー、社協の有償ボランティア担当者、自立相談支援員と面談。 	<ul style="list-style-type: none"> 生活保護 CW 	就労には結びつかなかったものの本人の能力にあった社会参加の場(有償ボランティア活動)につながる (★2)
	<ul style="list-style-type: none"> 有償ボランティア活動を開始。 現在は、月 4 回程度活動している。 		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 就労訓練での作業について支援員がほめると笑顔が見られ、就労準備事業支援員から「大変でしたよね」と理解のある言葉をかけられることで涙ぐむほど繊細なFさん。これまでの人生では、誰かに褒められたり優しい言葉をかけられたりしたことがあまりなかったのかもしれない。もし自分(支援員)が同じ立場だったら辛いだろう…。

→point(★1): (家族から聞く成育歴・生活歴に加え)就労訓練や求職活動に関わる中で、これまでの人生におけるつらさや苦しさへ共感し、本人理解を深める
- もともと美容関連サービス業で働いていた経験があるとのことで、実際に手先も器用(認定就労訓練での軽作業等)。本人の「働きたい」という希望も踏まえ、就労に向けて心構えや気持ちの整理をしていく。
- 紹介した企業は、生活困窮者への就労支援に理解があり、「実際にやってみてうまくいけばいいし、ダメなら仕方ない」1日、2日でダメなら「〇〇(支援員)さん、仕方ないですよ」と教えてくれる関係性。
- 就労には結びつかなかったが、関係機関といろいろな方法を検討し、実践しながら支援を進めた。現在は有償ボランティア活動を継続しており、本人の能力にあった活動につながられたのではないかと考える。

→point(★2): 認定就労訓練事業や理解のある企業での就労体験等の実践の結果、療育手帳を取得。就労には結びつかなかったものの本人の能力にあった社会参加の場(有償ボランティア活動)につながる

事例7：メンタルヘルスの不調から離職、経済的に困窮するも介入を拒否する40代女性への生活保護受給等と一体となった社会復帰に向けたサポート事例（Gさん）

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	父子世帯で育ち、学生時代は父親に奨学金を使い込まれたがアルバイトをして学費を稼ぎ、父親が他界した後は残った多額の滞納・債務を1人で返済するなど全て自分で解決してきたGさん。運輸業界で通算約20年間の就労経験もあるが、人間関係がうまくいかないなどのことから何の伝手もないX県に移り住んだ。そこで介護職に就いて働くが、3ヵ月から半年程度で離職を繰り返すうち、精神疾患を発症してしまう。
<性別> 女性	
<年齢> 40代	
<区分> 生活困窮→生活保護申請	
世帯(家族)の状況	対人恐怖や仕事に対しての不安があるため家から出ることができず、何に対してもやる気が起きない状態で、自傷行為もあり、生活再建に向けて動くことができない。収入がなく家賃の支払いもできなくなったことから、お金を貸してほしいと自立相談支援機関に来所。
<ul style="list-style-type: none"> ● 単身 ● 同居以外の家族は、長女（別居、Gさんとの関係性が悪い）・長男（別居、以前は連絡をとっていたが、公共料金を肩代わりしてもらってから連絡を取っていない）・弟（疎遠、所在不明） 	

2. 支援開始後の展開

初回の来所では、「お金を貸してほしい」という相談であったが、そう簡単にお金を借りることができないとわかり、すぐに帰ってしまった。その後は自立相談支援機関による介入を拒否していたが、食料を持って訪問。「生きる気力が薄れていたのでうれしかった」とメールが送られてきた。Gさんも相談しても（頼っても）いい場所があることを認識し、徐々に心を開いてくれるようになる。

健康状態について、保健師へ相談を促すもののGさんは受診を拒否。就労面では、若者サポートステーションへ同行し、職業適性検査を受けることを提案、他の仕事にも適性があることなどを知る。また、法テラスに同行し、自己破産を選び、生活を立て直すこととなった。しかし、まだ就労にチャレンジする気力がなく、生活保護を申請。生活保護に強い拒否感のあったGさんだが、生活費の確保と低額家賃の物件への転居ができ、安心につながった。

就労準備支援事業で開催する定期開催の講座を案内したところ、最初は会場に入ることすらできない状態だったが、支援員も一緒に参加することによって徐々に馴染んでいくことができた。そうしたタイミングで、家から近い農家での職場体験を提案。初めての体験に戸惑っていたが、Gさん自ら体験後も定期的に受入農家のもとに通い、手伝いや野菜の購入などで関わりを続けている様子。仕事の閑散期には町民センターでの地域活動の手伝いなども実施。この頃には生活保護を廃止したい気

持ちがあるものの、フルタイムで働くことへの不安などがあったため、キャリアコンサルタントに相談。「仕事ができない自分には存在価値がない」と発言していた G さんだが、いろいろな体験を一緒に行うことで本人の力を必要としてくれる人・場所があることに気づくことができた。再び、職場体験とは別の農園でアルバイトを開始。

現在は収穫出荷作業、加工品の在庫管理、イベント出店などさまざまな業務を任されるほど職場から信頼されている。医療にもつながり、主治医と相談しながら就労継続中。仕事以外でもボランティアやワークショップなどを行い、こども食堂のボランティアに参加した経験から、「いつか自分で食事を提供するような活動をしたい」という目標も話せるようになった。

3. G さんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援機関にふらっと来所し、「仕事を辞めて収入がないため家賃の支払いができない。お金を貸してほしい。」とのこと。お金を簡単に借りられるわけではないとわかり、すぐ帰ってしまう。 ● 心配なため G さんに何度か電話するも、なかなか連絡がつかない。 ● 再び飛び込みで来所され、悩み事を聞く。来週また面談させてほしいと伝えると「いいですよ」とのことであったが、時間になっても G さんは来られず。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 家から出ることができず、食事のままならない状態。 ◆ 何に対してもやる気が起きず、自死の発言や自傷行為もあり生活再建に向けて動くことができない。 	当初は介入を拒否される中、面談や電話、訪問等を重ねて関係性の構築を図り、本人が今後やりたい自分や課題と向き合うプロセスに寄り添いながらサポートする(★1)
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 介入を拒否されるため、食料をもって G さん宅を訪問。後から「生きる気力が薄れていたのうれしかった」とメールが届いた。 ● その後も会う度に次の約束を取り付け、頼ってもしやすい場所があることを認識してもらった。 		
3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 以前の職場から精神科を受診するよう促されていたというが、受診を拒否する G さん。健康状態について保健師に相談することを提案。メール相談を行ったが、「専門医に相談した方がよいことは自分でもわかっている」と返信があり、継続的な相談にはつながらなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地区保健師 	
4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会復帰をしたい気持ちはあるが、対人恐怖や仕事に対しての不安があるため、仕事探しも気が重く、自分に何ができるかわからないという G さん。 ● 若者サポートステーションでの職業適性検査を提案。結果を受けて、20年間運輸業界で走り続けてきた G さんだが、他の仕事にも適性があるということが信じられない様子。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 若者サポートステーション 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 今まで仕事をする(誰にも頼らず頑張ること)で自分の存在価値を見出してきたため、働けなくなった今の状況を受け止めることができない。

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 家賃が払えない、貯蓄が底をつくなどの状況から、相談の時に家計についても確認したところ、債務があるとのこと。支払督促などがどうなっているか「一緒に整理してみましょう」と話すが、怖くて見られない。 ● 自宅には大量の郵便物が溜っていたため、<u>一緒に郵便物の開封作業を行う。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 債務の督促と思うと郵便物も怖くて自分1人では開封・確認することができなかった。 	<p>本人の健康状態や家計状況等の生活課題を把握し、選択肢を提示しながら関係機関(生活保護、地区保健師、法テラス等)につなぐ(★2)</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ● しばらく就労することが難しい場合、生活保護の申請も考えてみてはどうかと提案するが、「周囲から生活保護を受けて楽に生活していると思われたくない」という気持ちが強い様子。 ● 生活保護について無理な促しはせず「いつでも手伝えることはできるので、申請したい時は教えてくださいね」と伝える。 		
5 か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労の目途もなく、督促だけがどんどん届く状況に限界を感じた G さんから「生活保護を申請したいので手伝ってほしい」と希望があり、福祉事務所へのつなぎを行う。 ● 自己破産に対しても拒否感が強かったが、「今までがんばり続けた自分に一度立ち止まって休憩することを許してあげませんか」と声掛けを行う。 ● 数日間自分の中で検討した結果、自己破産を選び、生活を立て直すこととなった。法テラスに同行。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 福祉事務所 ● 法テラス 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 生活保護や自己破産の選択において、支援員の意見は押し付けず、自分で決めてもらうことにより、自分の力で生活を立て直している感覚を取り戻していったように思われる。
6 か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● G さんの今の自分自身の状況について臨床心理士に相談。今はがんばりすぎていてガソリン切れを起こしている状態であるという助言を受け、自己理解が進んだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 臨床心理士 	
8 か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備の講座を紹介。最初は会場に入ることすらできない状態だったが、職員(相談支援員・就労準備支援員等)が必ず一緒に参加するようにしたところ、少しずつ場に馴染んでいった。(来ても来なくてもいいよ。というような自由さ・ゆるやかさがマッチし、G さんにとっての参加のハードルが下がった。) ● 講座(各回でテーマが異なる)によってはムードメーカー的な存在になることもあり、他の参加者が悩みを吐露された際にはアドバイスする場面もみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 生活保護を受給開始となった時点でプランとしては終結、その後はケースワーカーが主な担当となるが、被保護者就労準備支援事業も実施していることや、もともと担当だった支援員に G さんから時々連絡をくれることもある。 ◆ 本人のペースにも波があるため、基本はケースワーカーに伝えるようにしつつ、何かあれば相談してもらえるように関わりを継続。 	<p>社会参加プログラムや就労体験、ボランティア活動等のさまざまな体験を他者と一緒に行うことにより、本人の力を必要としてくれる人も場所もたくさんあることに気づいてもらう(★3)</p>
1 年後	<ul style="list-style-type: none"> ● G さんは、元気な頃に、自然の中で行うイベントにボランティアとして関わっていたというのを聞き、家から近い農家での 5 日間の職場体験を提案。 ● 初めての職場体験ということで、「失敗してはいけない」という気持ちがある様子。「あくまで『体験』なので、やってダメならやめればいいですよ」と伝えると、思い切ってチャレンジすることとなる。 ● 受入農家から、G さんの仕事ぶりについて高い評価をもらい、本人の生き生きとした表情がみられた。 ● 職場体験以降も、定期的に受入農家のもとへ通い、手伝いや野菜の購入など自ら関わりを続けるように 		

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	なった。		
1年 2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 農園でアルバイトを開始。 		
1年 6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 農家の仕事が閑散期に入り、家でじっとしているのがつらいという訴えを聞き、町民センターにつなぎ、Gさんができる作業(花の種取り作業)を提供してもらった。 ● 初めての場所のため、最初は緊張していたGさんであったが、センター長からの勧めで地区の文化祭の手伝いなどにも参加した。 ● 今では時間があれば定期的に通っているようで<u>本人の居場所の一つとなっている。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ● 町民センター 	
1年 10か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● Gさんから、生活保護を廃止にしたいが、フルタイムで働くことへの不安があるという気持ちを聞き、キャリアコンサルタントへの個別相談を実施。 ● キャリアコンサルタントからは「今の仕事(農園)が好きなのであれば無理に辞めなくてもよい。ダブルワークという道もあるが、体調のこともあるため、今は急に大きな変化を求めず、自分にできることを一つずつこなして行った方がよい」とアドバイスを受けた。 ● 「小さなことでも周囲の人はあなたの頑張りを必ず見ているよ」という言葉をかけてもらった時には、自分の頑張りを認めてもらい嬉しかった…と涙を流す様子がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 家族はいるが、関係性が悪く、励ましてもらうような人が周囲にいなかった。 	若者サポステによる職業適性検査やキャリアコンサルタントとの相談などを活用し、職業適性等を含む自己理解を深める(★4)
	<ul style="list-style-type: none"> ● 農園でのアルバイトは継続しており、現在は収穫出荷作業から加工品の在庫管理、イベント出店など<u>さまざまな業務を任されるほど職場から信頼されている。</u> ● Gさんも、「消費者からありがとう、と言ってもらえることに<u>やりがいを感じています</u>」とのこと。医療(うつ病/精神科)にもつながり、主治医と相談しながら就労継続中。 ● 仕事以外にも、ボランティアやワークショップの開催なども行っており、子ども食堂のボランティア活動に参加したことをきっかけに、<u>最終的には「自分で食事を提供するような活動をしたい」という目標を持っている。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ● これまで「仕事ができない自分には存在価値がない」とよく口にされていたが、現在は「自分を支えてくれる人がたくさんいるから心強い」「何でも体験！やってみないとわからないよね」など前向きな言動が多くなった。 	

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 学生時代、父親に奨学金を使い込まれたがアルバイトをして学費を稼いだこと、父親が他界してからは父親が残した多額の滞納債務を一人で返済してきたことなど、これまでは全て自分で解決してきたGさん。「できて当たり前」が本人の中での常識になってしまい、人への頼り方がわからない。
 - ➡point(★1): 当初は介入を拒否される中、面談や電話、訪問等を重ねて関係性の構築を図り、本人が今後なりたい自分や課題と向き合うプロセスに寄り添いながらサポートする
- 生活保護に対して強い拒否感があったため、まずはGさんの気持ちを受け止め、本人の中のイメージや気になること等を聞き取ったところ、「楽に生活していると思われたくない」といった気持ちがあることがわかった。必要なのではとの思いはあるが、無理な促しはせず、自分で決めてもらうことが大切。本人が自分で決断するまでとことん見守り続ける。
 - ➡point(★2): 本人の健康状態や家計状況等の生活課題を把握し、選択肢を提示しながら関係機関(生活保護、地区保健師、法テラス等)につなぐ
- 「仕事ができない自分には存在価値がない」とよく口にされていたが、Gさんの力を必要としてくれる人も場所もたくさんあることに気づいてもらいたい。
 - ➡point(★3): 社会参加プログラムや就労体験、ボランティア活動等のさまざまな体験を他者と一緒に行うことにより、本人の力を必要としてくれる人も場所もたくさんあることに気づいてもらう
- 周囲からの期待とそれに応えられない自分のギャップに苦しんでいる。
 - ➡point(★4): 若者サポステによる職業適性検査やキャリアコンサルタントとの相談などを活用し、職業適性等を含む自己理解を深める

事例 8 : 家庭内暴力やいじめ・不登校等を経験し、セルフネグレクトにある若年女性が支援を通して自らの強みを発見し、働くことへの前向きな気持ちを引き出した事例 (H さん)

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	<p>中学 2 年生から不登校となり、高校には進学していない。母親は、父親からの暴力が原因で H さんが中学を卒業して間もない頃に離婚している。父親からの母親への DV や本人への暴言、中学時代のいじめ等により、10 代後半に、精神的な困難を抱え、睡眠障害等複数の診断があり、現在も定期的に通院中。</p>
<性別> 女性	
<年齢> 20 代	
<区分> 生活困窮	
世帯(家族)の状況	<p>母親から自立相談支援機関に連絡があり、H さんが病院とは別のところでこれからの生活について相談してみたいと希望しているとのこと。相談支援員が直接会うのは躊躇があるようで、オンラインによる面談から始めた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ● 母親と 2 人暮らし ● 母はパートナーとの同居を考えているため、H さんは 1 人暮らしを考えている 	

2. 支援開始後の展開

直接会うことが難しく、オンライン面談を重ねて H さんの話を少しずつ聞いた。家族以外に安心して過ごせる場所がほしいこと、いずれ 1 人暮らしをするため自分のペースで家事ができるようになりたいことなどを話してくれた。初期は具体的な方針は決めず、定期的なオンライン面談を通して、一緒に短期目標(「自分のペースに合わせて家事ができるようになる」「家族(家)以外で安心して過ごせる場所・話せる人を見つける」「自信を持てるようにする」など)について話し合い確認した。

相談から約 1 か月半後、オンライン面談の際に、就労準備支援事業で予定していた農業収穫体験のプログラム(季節イベント)があり、H さんにも興味があればと紹介したところ「行ってみたい」との返事があり、参加した。就労準備支援事業の就労体験先でもあったため、利用者に普段の仕事内容について話してもらった。

その後も、面談で本人が話してくれる興味・関心のあること、好きなことから、折り紙など手作業による創作活動を一緒に取り組む機会を月 1 回程度設けるようにした。就労準備支援事業でのフリースペースも活用しながら相談支援員や就労準備支援事業支援員などが参加し、徐々に、他の利用者で「一緒にやってみたい」という声があれば少人数で開催していった。

最初の相談から 7~8 か月ほど経った頃、社会福祉協議会が行う有償ボランティアで、高齢者の住まいの掃除をお手伝いするという活動や地域食堂での調理補助等があり、H さんに紹介し、支援員と一緒に活動した。その後、何か仕事をしてみたいという思いが本人の中に出てきたことから、単発のアルバイトを紹介し、必要に応じて履歴書作成や面接対策をサポートした。この頃には外出頻度も増え、1 人でバスの通院や趣味のイベント参加のため遠方まで電車に乗って行くことができるようになった。

支援から1年半が過ぎた頃、自立相談支援員の個人的なつながりから紹介を受けた軽作業の業務を、出来高制により自分のペースでできる内職として週2回ほど会社に出勤して行くようになる。約3か月後、同会社でアルバイトとして雇用されることとなった。

3. Hさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 母親から自立相談支援機関に連絡。Hさんが病院とは別のところでこれからの生活について相談してみたいと希望しているとのこと。 ● 自立相談支援員が直接会うのは躊躇があるようで、オンラインによる面談から始めた。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 初期は具体的な方針は決めず、定期的なオンライン面談を通して、一緒に短期目標（「自分のペースに合わせて家事ができるようになる」「家族(家)以外で安心して過ごせる場所・話せる人を見つける」「自信をもてるようにする」など）について話し合いを重ねた。 ◆ みんなが苦戦するパズルを人より何倍も速く完成させることもあり、自信がついて楽しくなったこと、仕事選びまではいかないまでも、自分で「こういうことが得意だ」と認識することにつながった。 	<p>オンライン面談やイベント企画など、面接室に限らず本人の興味・関心に合わせたオーダーメイドのプログラムを展開し、本人が安心して話せる関係を構築(★1)</p>
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業で展開するフリースペースに初めて参加。農業収穫体験について紹介したところ、「行ってみたい」との返事が得られた。 		
2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 農業収穫体験に参加。 		
3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 面談を通して Hさんが教えてくれた、自分の好きなこと・関心のあること(折り紙など手作業による創作活動)について、フリースペース等を活用して一緒に取り組む場を設けた。(月1回程度) ● 最初は、自立相談支援員と就労準備支援事業支援員などが参加し、徐々に、他の利用者で「一緒にやってみよう」という声があれば少人数で開催した。 		
9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会福祉協議会が行う有償ボランティアで、高齢者の住まいの掃除をお手伝いするという活動や、地域食堂での調理補助等に取り組む。(支援員と一緒に参加) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会福祉協議会(有償ボランティア) 	<p>支援員や社協等の個々の人脈から、本人に合う有償ボランティア、単発アルバイト等を見つけ、同行支援や調整を行う(★2)</p>
1年	<ul style="list-style-type: none"> ● 何か仕事をしてみたいという思いが本人の中に出てきたことから、面接なしで応募可能な単発のアルバイトを紹介。 		
1年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 住まいの近くのスーパーで品出しの単発アルバイトを募集していたため、あらかじめ就労準備支援事業支援員が電話をし、同行。品出し業務を経験。 ● 必要に応じて履歴書作成や面接対策をサポートした。 		
1年3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 外出頻度が増え、1人でバスを使った通院ができるようになった。 		
1年5か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 趣味のイベント参加のため遠方まで電車に乗って行くことができるようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 就労支援員の個人的なつながりの中で見つけた会社。こちらからの相談もしやすく、会社側も柔軟に対応してくれた。 	
1年7か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 自立相談支援員の個人的なつながりから紹介を受けた軽作業の業務を出来高制により自分のペースでできる内職として行く。 		
1年10か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 上記の軽作業の会社でアルバイトとして雇用されるようになった。 		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 自己肯定感が低く、これまで「これをしたい」「あれが好き」という話をしても否定されることが多かったのではないかと。単に面談室での面談だけではなくレクリエーション活動等の関わりや、本人の好きなこと・関心のあることに一緒に取り組むことで社会性を引き出せるのではないかと。
- フリースペースに通い始めた頃、家に帰ってから「あの時はどういう返しをすればよかったのか」「あの時の対応は間違っていなかったか」と1人で反省することが多かったと話してくれた。不登校の経験もあり、家族以外の他者との関わりが少ないため、就労準備支援事業でいろいろな大人、他者と関わる中で、「こういう考えの人もある」「自分が完璧でなくてもいい」ということを自分の中で経験からわかっていくとよいのではないかと。
- 「不安に思うことがあれば、担当の〇〇(支援員)と話をしようね」と伝え、「自分の悩みなんて」と思うことのないように、しっかり受け止め、それに対して一緒に考え、寄り添ってあげれば、徐々に抱え込まずに思いを外に発散していけるのではないかと。
➡point(★1): オンライン面談やイベント企画など、面接室に限らず本人の興味・関心に合わせたオーダーメイドのプログラムを展開し、本人が安心して話せる関係を構築
- 有償ボランティア活動を経て、Hさんの中で、何か少し仕事をしてみたいという思いが出てきた。まずは自分のペースでできる仕事、受入れ側もHさんに配慮してくれるところで始めるとよいのではないかと。
➡point(★2): 支援員や社協等の個々の人脈から、本人に合う有償ボランティア、単発アルバイト等を見つけ、同行支援や調整を行う

事例 9 : 母子家庭で小学校から不登校となり自宅で過ごしてきた 30 代女性が、徐々に仕事に慣れ、得意分野での資格取得により 認定就労訓練事業の利用に至った事例 (I さん)

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	母子家庭で育ってきた I さんは、中学校卒業後、高校に進学することなく自宅で過ごしてきた。不登校支援の団体(中学卒業後、20 歳までの青少年を対象)につながっていたが、支援の対象年齢を過ぎてしまったこと、また若者サポートステーションなどの支援機関に通うことが本人の状況からは難しいということで、支援団体より就労準備支援事業所に相談があった。
<性別> 女性	
<年齢> 30 代	
<区分> 生活困窮	支援員が I さん宅に訪問し、本人と母親に就労準備支援事業の支援内容について紹介したところ、関心を示し利用を希望。 母親の用事などで外出する以外は自宅が日中の居場所となっており、長期にわたり時間に縛られることなく過ごしてきたため、生活リズムが不規則になっている。
世帯(家族)の状況	
● 母親と 2 人暮らし	
● 弟が県外で働いている	

2. 支援開始後の展開

自宅以外の環境に慣れるため、まずは週 2 回、就労準備支援事業所において 1 人で取り組める軽作業を提案し、定期的な来所を促した。面談の中で、I さんから「パソコン作業が得意なので挑戦してみたい」という言葉を聞き、パソコンを使う作業を積極的にプログラムに取り入れるようにした。その一環として、もともと就労準備支援事業所内で使うポスターの製作を一緒にやってみてはどうかと提案したところ、本人もできそうだということで、取り組み始めた。

就労準備支援事業所への通所にも慣れた段階で、就労継続支援 B 型事業所での農作業や、協力事業所での事務補助作業なども体験した。ポスター製作では、最初は 1 人でデザインから思うように作成してもらい、支援員がそれをプリントアウトしたものを他の利用者に見せて意見を聞きながら作業を進めた。最初の段階では視覚的にさまざまな色が混じっていたため、ユニバーサルデザインを学ぶ講座を取り入れ、他の利用者とも少しずつ交流する場を設けた。慣れてくると、A3 サイズの大きいものや、卓上サイズの小さいものまでエクセルで製作できるようになり、他の利用者がある中で自分から意見や感想を聞くなど、中心になって作業を進められるようになってきた。

定期的に外出ができるようになり、母親から将来は必要になると勧められていた自動車免許を取得するため、教習所にも通うようになった。また、「働くために何か資格を取得したい」ということから、ハローワークの公共職業訓練に応募し、介護事務の資格を取得できた。その後、資格を活かした仕事をしてみたいという相談を受け、認定就労訓練事業を利用し、介護施設でのシーツ交換や清掃等の軽作業と事務補助作業を開始。現在も週 3 回通い、作業を行っている。

3. Iさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 初回面談(Iさん宅に訪問)。Iさんと母親に就労準備支援事業の支援内容について紹介したところ、関心を示し利用を希望。 ● 母親は「このままだとひきこもってしまうため、今の支援機関(支援者)から途切れることなくどこかにつなかりたい」とのこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 作業は、使用済み切手を切りそろえるなどの簡単な作業から、新聞紙でのバックやゴミ箱作成、パソコンでの入力作業などさまざまなレベルのものを設定した。 ◆ 環境の変化や対人関係によるストレスが体調に表れやすいため、作業前に事前の説明をし、取り組める状況を確認した。 	1人で取り組める軽作業から徐々に人と接する仕事に慣れるまで、多様な「仕事」や「体験」を提供し、自らの強み(得意な作業)と意欲を引き出す(★1)
	<ul style="list-style-type: none"> ● 週2回、就労準備支援事業所において1人で取り組める軽作業(2時間)を提案し、定期的な来所を促した。 ● Iさんから「<u>パソコン作業が得意なので挑戦してみたい</u>」という言葉聞き、<u>パソコンを使う作業を積極的にプログラムに取り入れるようにした。</u> 		
	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的な通所を継続。時間に遅れることはなく、病院や急用等がある時には必ず連絡をくれた。 		
4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● ポスター製作では、最初は1人でデザインから思うように作成してもらい、支援員がそれをプリントアウトしたものを他の利用者に見せて意見を聞きながら作業を進めた。 ● ユニバーサルデザインを学ぶ講座などを実施し、他の利用者とも少しずつ交流する場を設けた。 		
9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的に外出ができるようになり、母親から将来は必要になると勧められていた自動車免許を取得するため、教習所に通うようになった。 		
1年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● ポスターは、A3サイズや卓上サイズの小さいものまでエクセルで製作できるようになり、他の利用者がある中で自分から意見や感想を聞くなど、中心になって作業を進められるようになってきた。 		
1年5か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労準備支援事業所に通所しての作業や環境に慣れたところで、協力事業所の一つであるB型事業所での農作業も体験。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 就労経験がなく、自宅で過ごす時間が長かったため、体験を通して働くための体力をつけることや、仕事のイメージをもってもらうことが必要。 	
1年7か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所に登録のあるデイケア施設での事務補助作業の就労体験を行う。 		
1年11か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 「働くために何か資格を取得したい」ということから、ハローワークの公共職業訓練に応募。 ● 認定就労訓練事業を利用し、介護施設でのシート交換、清掃等の軽作業を開始。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 認定就労訓練事業所の開拓を行う中で、介護施設における勤務環境改善の課題として、施設内のダストボックスの点検等の作業が職員の残業につながっていることを知り、業務の切り出しを提案。 	資格を活かした仕事をしたいというニーズに応じて、認定就労訓練事業の受入事業所において業務分解(切り出し)(★2)
2年1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 公共職業訓練での約3ヵ月の訓練の後、介護事務の資格を取得。 ● 同事業所において介護事務の補助作業も加わり、週3回・1日約4時間の業務を行っている。 		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 時間に縛られることなく生活をしてきたため、生活リズムが不規則になっており、母親の用事で外出すること以外は自宅が日中の居場所になっている。自宅以外の日中の活動場所や、少しずつ人と接するような経験が必要ではないか。
- Iさんは、環境の変化や対人関係によるストレスが体調に表れやすい。まずは定期的・継続的に就労準備支援事業所まで通うことから始める。
- 得意な作業を中心にプログラムを組み立て、Iさん自身が「できる」「やってみたい」という気持ちを引き出せるように関わっていく。人と接することに慣れてきたら、具体的な就労体験をすることで、働くことへのイメージづくりや意欲につながるのではないか。
 - ➡point(★1): 1人で取り組める軽作業から徐々に人と接する仕事に慣れるまで、多様な「仕事」や「体験」を提供し、自らの強み(得意な作業)と意欲を引き出す
- さまざまな経験を経て、自分の得意なことを見つけ、自ら資格の取得に向けて動くことができた。認定就労訓練事業所の一つであった介護施設において、職員の残業につながる周辺業務(ダストボックス点検等)が課題と聞いていたため、業務の切り出しを相談し、認定就労訓練としてIさんの資格を活かす働き方につなげられないか。
 - ➡point(★2): 資格を活かした仕事をしたいというニーズに応じて、認定就労訓練事業の受入事業所において業務分解(切り出し)

事例 10 : 高校卒業後、人間関係でアルバイト先を転々としてきた 20 代女性に長期にわたり伴走し、認定就労訓練事業所での 雇用に至った事例 (J さん)

1. 基本情報と支援初期の状況

本人の状況	<p>高校卒業後、コンビニやドラッグストアなどさまざまなアルバイトをしてきたが、いずれも人間関係が原因で長続きせず、就職活動がうまくいかない。インターネットで求人検索をしても、自分がどんな仕事ができるかわからず応募することができない。</p> <p>定期受診しているクリニック(心療内科)の先生が、J さんの状況を聞き、地域若者サポートステーションや就労準備支援事業等の支援機関を紹介し、行ってみてはどうかと案内した。J さんから就労準備支援事業所に相談をしてみたいという気持ちを聞いたクリニックの先生が自立相談支援機関に電話でつなぎ、J さんと面談を行うこととなった。</p>
<性別> 女性	
<年齢> 20 代	
<区分> 生活困窮者	
世帯(家族)の状況	
● 両親、姉、J さんの 4 人家族	

2. 支援開始後の展開

就労準備支援員と面談を開始。支援員からの問いかけに対してはなかなか応答がなく、うなずきや首をかしげて意思表示をすることはできるが、かなり時間をかけて一言発するような状況であった。就労準備支援プログラムのパソコン講習などを紹介すると、「はい」と参加するものの、定期的な面談を含め、本人からの言葉・発信がなかなか出てこない状況が長く続いた。

子ども食堂でのボランティア活動を提案したところ、2 回ほど参加。子どもたちから「本を読んで」とせがまれると、普段は時間をかけてぼそっと一言話すだけの J さんが、大きな声で情感豊かに読み聞かせをする場面もみられた。高齢者施設での就労体験や就労継続支援 A 型事業所の職場見学なども実施。

さまざまな就労準備支援プログラムを行う中で、障害者手帳についても話し合い、手帳申請に向けて市役所窓口へ同行支援した。(精神障害者手帳を取得)

相談から約 3 年後、自立相談支援の就労支援員とも話し合い、認定就労訓練事業の利用を検討。障害者雇用を推進したいというニーズのある幼稚園(認定就労訓練事業所)で短時間就労を開始し、就労支援員が、月 1 回は J さんが働いている日に現場に行き、園長先生を交え、3 者で話をした。約 1 年間、様子を見ながら就労を継続してきたが、園長先生からどのように対応したらよいかわからないと相談があり、J さんに対して腫れものに触るような対応になってしまっていることがわかる。園長先生や他の職員と、J さんとの間での意思疎通をつなげられるように、自分から言葉で相手に発信することが苦手な J さんにノートを作り、その日の出来事や気持ちなどを書いてもらい、それをもとに情報交換することを提案。

ノートでは自分の気持ちを書いてくれたため、Jさんの気持ちをもっとしっかり受け止め、どのようにしていきたいかを聞けるよう、「ワークシート」をオリジナルで作成し、チャレンジしたいこと、チャレンジしたこと、日常で楽しかったこと、好きなことなどについて書いてもらい、それをもとに振り返りの面談を行った。ワークシートを使った定期的な面談を通して、振り返りと目標、どこまで目標に近づけたのか3者で共有し、一歩ずつ進めるように働きかけを続けた。結果、Jさんが困った時に自分から相談ができるようになってきたことに加え、幼稚園教諭の資格を取得しスキルアップを目指そうという姿勢に変化してきた。また、職場(幼稚園)においても、障害者枠として採用したいという方針が変わった。

並行して、幼稚園が雇用継続不可となった場合に備え、地域若者サポートステーションに定期的に連絡し、サポステの開拓企業とのマッチングも視野にJさんの状況を伝えながら情報共有を進めた。

勤務時間については、認定就労訓練としては週2回・3時間の6時間/週勤務のため障害者雇用での雇用率に算定できないという課題があったが、主治医と相談し、焦らず2~3か月のペースで30分、1時間を目安に増やしていき、結果を検証しながら調整していくことについて助言してもらった。勤務時間について少しずつ伸ばしていくことが本人にとって安心で今後長く働き続けられると職場に伝えたところ、Jさんがやりたいことをしっかり話してもらえば応援する、と理解を得た。

認定就労訓練事業から、同一事業所での一般就労(障害者枠)につながった。

3. Jさんに対する支援の流れとポイント

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
0日	<ul style="list-style-type: none"> ● 病院から相談を受ける ← ● 初回の面談にJさんが来所 	<ul style="list-style-type: none"> ● 病院(心療内科)から就労準備支援事業を紹介してもらう。 	
1か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的に面談。支援員からの問いかけに対してはなかなか応答がなく、うなずきや首をかしげて意思表示をすることはできるが、かなり時間をかけて一言発するような状況 ● パソコン講座などのプログラムに参加してみる 	<ul style="list-style-type: none"> ● うつの症状の影響もあるのか、自分のことや感情を表に出すことができない様子。学生時代は保健室登校をしていたことなどを話してくれた 	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的に面談(3~6ヵ月ごとにプランを見直しながら継続して関わりを続けた) 		
10か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 子ども食堂でのボランティア活動に参加 ● 子どもたちから「本を読んで」と頼まれると、普段は時間をかけてぼそっと一言話すだけのJさんが、大きな声で情感豊かに読み聞かせをする場面がみられた 	<ul style="list-style-type: none"> ● 子ども食堂 	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 定期的な面談を継続 		
1年 2~3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 高齢福祉サービス事業所での就労体験や就労継続支援A型事業所の見学を行う 	<ul style="list-style-type: none"> ● 協力事業所(高齢者福祉サービス事業所、就労継続支援A型事業所) 	

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
1年4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 就労体験を実施した高齢福祉サービス事業所で採用が決まる ● 雇用開始の初日、体調が悪化して来られなくなる ● Jさんを担当していた就労支援員から事業所に連絡を入れ、採用は一旦取り消し休養したい旨を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 自立相談支援員、就労準備支援員等で意見交換。 ◆ 仕事のプレッシャーで病気が悪化したのではないかと見立てと、今回はたまたまではないかという意見が支援員の中で分かれた。 	支援する中で起きたことについて、失敗を含めて振り返りを行い、プランの見直しや微調整に反映していく(★1)
1年10か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● Jさんと面談。初日予定していた仕事に行くことができなかったことも含め、一緒に話し合う。その中で障害者手帳の取得についても考えるようになった 		
2年後	<ul style="list-style-type: none"> ● 障害者手帳申請に向けて市役所への同行支援 ● 以前に見学した就労継続支援A型事業所で就労体験を行う ● 就労先として障害福祉サービス事業所を含めて提案すると、障害分野で働くことは心の奥底では納得ができていない様子うかがえた 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 障害者手帳を取得することについてのメリット・デメリットや、取得して手帳があることを開示して仕事をするか・しないかは自由だが、手帳があることで就労する時に周りがJさんのことをわかってくれると思うといったことを話した。 	
2年3か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定就労訓練事業の利用を検討。障害者雇用を推進したいというニーズのある幼稚園(認定就労訓練事業所)で短時間就労を開始 	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定就労訓練事業所 	本人が希望する職種での認定就労訓練事業を調整し、「雇用型」までの本人及び事業所に対する伴走支援(★2)
3年2か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 月1回はJさんが働いている日に現場に行き、園長先生を交え、3者で話をした ● 園長先生から、Jさんに対して意思疎通がしづらく、他の職員との関わりなども含めてどのように対応したらよいかわからないと相談がある ● 自分から言葉で相手に発信することが苦手なJさんにノートを作り、その日の出来事や気持ちなどを書いてもらい、それをもとに情報交換することを提案 ● ノートを活用して定期的に面談 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ Jさんに対して腫れものに触るような対応になってしまっていることがわかり、「このままではいけない」と、対応を検討 ◆ ノートでは自分の気持ちを書いて表現できたため、Jさんの気持ちをもっとしっかりと受け止め、目標に向けてどのようにしていきたいかを聞けるよう工夫したい ◆ 相手に自分の気持ちを話すことは怖いことではないということも、ワークシートを通じて知ってもらいたい 	
3年6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 「ワークシート」をオリジナルで作成し、チャレンジしたいこと、チャレンジしたこと、日常で楽しかったこと、好きなことなどについて書いてもらい、それをもとに振り返りの面談を行った。 ● ワークシートに1ヵ月間を振り返りながら項目に書いてもらい、それをもとに月1回の3者面談を継続 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 少しずつだが、困った時にはJさんから相談することができるようになってきた 	
4年6か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 資格を取得しスキルアップを目指したいと、働く姿勢にも変化がみられるようになった ● 職場(幼稚園)から、障害者枠として採用したいという方針を伝えてもらう 		
4年8か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 幼稚園から、Jさんの雇用の継続について自立相談支援機関に相談:週2日・3時間で6時間/週の勤務のため、障害の雇用率に算定できないのでどうしたらよいか、勤務時間を延ばすことができないか ● 主治医と相談し、焦らず2~3ヶ月のペースで30分、1時間を目安に増やしていき、結果を検証しながら調整していくことについて助言してもらった 		

タイムライン	本人の状況(変化)と支援内容		支援のポイント
	自立相談支援事業/就労準備支援事業によるもの	関係機関によるもの	
	<ul style="list-style-type: none"> ● 幼稚園が雇用継続不可となった場合に備え、地域若者サポートステーションと定期的な情報共有を進めた(若者サポステの開拓企業につなげないか) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域若者サポートステーション 	認定就労訓練事業の利用期間終了後を見据えた関係機関との情報共有(★3)
4年9か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 勤務時間について少しずつ伸ばしていくことが本人にとって安心であり、今後長く働き続けられると職場に伝えたところ、幼稚園から「Jさんがやりたいことをしっかり話してもらえば応援する」と理解を得た 		
5年4か月後	<ul style="list-style-type: none"> ● 認定就労訓練事業から、同一事業所での一般就労(障害者枠)につながった。 		

4. 支援員の取組と考察



支援員はどう考え、取り組んだか

- 就労体験した高齢福祉サービス事業所で雇用につながると思ったが、体調が悪化して初日に来られなくなってしまった。体験や見学と違い、いざ仕事となるとプレッシャーで病気が悪化した可能性がある。Jさんの特性に対して何らかの配慮や理解のある職場での就労(障害者手帳の取得)も検討した方がよいのではないかな。

⇒point(★1): 支援する中で起きたことについて、失敗を含めて振り返りを行い、プランの見直しや微調整に反映していく
- 障害分野で働くことは心の奥底では納得ができていない様子がうかがえる。支援の初期に参加した子ども食堂でのボランティア活動で見せた姿を思い出すと、子どもに関わる仕事でも探してみるとどうだろうか。
- 本人も希望した幼稚園での認定就労訓練であったが、園長先生からの相談で、Jさんのことを腫れものに触るような対応になってしまっているようだ。言葉で自分の気持ちなどを伝えることが苦手なJさんと、職場との意思疎通をどうにかしてつなげていきたい。
- 職場(幼稚園)から、障害者枠として採用したいという前向きな方針を聞くことができた。恵まれた職場で、Jさんが「こうしていきたい」という夢をひとつずつ実現できるよう応援したい。無理なく働き続けられるよう、勤務時間について主治医に確認した上で助言。

⇒point(★2): 本人が希望する職種での認定就労訓練事業を調整し、雇用継続に向けた本人及び事業所に対する伴走支援
- 雇用率の関係で、もしかしたら幼稚園でそのまま雇用してもらえないかもしれない。就労準備支援事業での関わりから、A型・B型事業所は合わない様子もうかがえたため、その他の就労先の選択肢も見据えておきたい。

⇒point(★3): 認定就労訓練事業の利用期間終了後を見据えた関係機関との情報共有

厚生労働省 令和6年度 生活困窮者就労準備支援事業費等補助金 社会福祉推進事業

就労準備支援事業・認定就労訓練事業等就労支援に関する
手引き改定に関する調査研究事業

報 告 書

令和7（2025）年3月発行

発行 一般社団法人北海道総合研究調査会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西6丁目1-1 毎日札幌会館3階

TEL : 011-222-3669 FAX : 011-222-4105

東京事務所／〒105-0003 東京都港区新橋6丁目20番1号 ル・グラシエル BLDG.1 5階

TEL : 03-5472-7337 FAX : 03-5472-8330